

自律教育
シリーズ

第3集

自律教育校内支援体制事例集

みんなで支援 みんなが笑顔

キーワードは
「チーム!」



平成18年(2006年)1月
長野県教育委員会

はじめに

「特殊教育」から「特別支援教育」への転換が図られる中、長野県では平成16年度に県内全小学校及び全自律学校において、平成17年度に全中学校において^{エスレック}SREC（自律教育コーディネーター）が指名され、校内委員会が設置されました。さらに、各校の実践を支援するために、県教育委員会では、SREC養成研修（年5回）、サポート会議（県下4地区年2回）、教育事務所・総合教育センター・自律学校による自律教育相談等を実施してきています。

校内支援体制の課題

これまで、自律教育シリーズ第1集（平成16年1月発行）では、校内支援体制づくりに向けたガイドラインを、第2集（平成17年1月発行）では、具体的な支援の方法を示してきました。各校では、これらを参考にしながら、SRECを中心に特別な教育的支援を要する児童生徒を支援していただいていると思います。

SRECが動き始めた平成16年8月に、支援を進める上で課題となっていることについて調査を行いました。課題として多かったのは、①校内支援体制をつくるのがむずかしい、②SRECは校務が重複していて大変、③忙しくて会議等が開けない、ということでした。他に、自律教育にかかわる専門性、保護者との関係、人員の不足、教師の意識改革等が挙げられました。

課題を乗り越えるために

特に、SRECを中心とした校内支援体制づくりに苦慮している学校が多いようです。しかし、特別な教育的支援が必要な児童生徒への支援は、SRECの指名によってスタートしたわけではありません。これまでも何らかの形で支援体制を組み、支援を行ってきているはずで、そうした学校ごとに積み上げてきた実践を重ね合わせて、学校サイズの体制づくりを行うことが大切です。

しかし、担当する教師が一人で抱え込んでしまうケースもまだまだ少なくないようです。今日では「チーム支援」が有効だと言われ、多くの学校で実践が進められてきています。第3集においては、「チーム」をこれからの校内支援体制のキーワードとしました。

第3集のポイント

第3集は、これまでの県下の実践を検討し、事例集としてまとめました。SRECが支援を進める上で課題とした内容を中心にテーマを取り上げてあります。教師が知恵を出し合い、まさしく「みんなで支援 みんなが笑顔」を目標に取り組んできた事例です。是非、ご利用ください。

平成18年1月

長野県教育委員会

目次

はじめに	1
目次	2
キーワードは「チーム！」	6

I 校内支援体制づくりの工夫

事例 1 全職員によるチーム支援（小学校） ～「教師全員で子どものよい点を褒めよう！」を合い言葉に～	8
事例 2 学生スタッフによる個別の支援体制（小学校） ～教員のノウハウと学生のやる気を無理なくつないで～	10
事例 3 子どもにとって身近な教職員で小委員会を組織（小学校） ～「個別の指導計画（短期）」を活用した支援～	14
事例 4 授業公開を通じた他機関との連携（小学校） ～校内支援体制の工夫と他機関との共同評価～	16
事例 5 個別支援のための人員・時間確保の工夫（中学校） ～週持ち時間数と時間割に注目！～	18
事例 6 生徒・保護者に寄り添った支援チームづくり（中学校） ～各委員会を連携させるためにSRECがかかわって～	20

II その子を理解するための工夫

事例 7 支援のアイデアが集まる「発達障害学習会」（地域） ～事例研究会を通して支援のヒントをつかむ～	22
事例 8 共に進める子ども理解（小学校） ～ネットワークづくりと特性を生かした支援～	24
事例 9 「個別の指導計画」を作成し確かな支援を（小学校） ～原学級担任が「個別の指導計画」を作成して～	26

事例 10	特性を知って、支える仲間づくり（中学校）	28
	～みんながアキラさんのサポーター～	

やってみよう その1	情報交換と記録の積み重ねで一貫した指導を行う	32
	～ABC分析により環境条件を整える！～	

Ⅲ ニーズにそった支援の工夫

事例 11	みんなが分かる楽しい授業（小学校）	34
	～障害の理解から具体的な支援へ～	

事例 12	少人数で取り組む算数の授業（小学校）	36
	～自律教育のノウハウを生かして～	

事例 13	通常の学級で担任が取り組む支援のあり方（小学校）	38
	～負担をあまり感じず取り組める支援の実際～	

事例 14	ポイントカードとマニュアルによる分かる状況づくり（小学校）	40
	～社会的ルールを「見えるもの」「関心のもてるもの」に～	

事例 15	自律学級での支援を通常の学級での指導につなげる（小学校）	44
	～「連絡ノート」で支援方法を共有～	

事例 16	「親子の会」で元気いっぱい（小学校）	46
	～語り合える場・分かり合える仲間と、子どもたちの集団保障を～	

事例 17	外部機関との連携を生かした支援（小学校）	48
	～保護者への支援が子どもを変える～	

事例 18	セルフエスティームを高めるPlan, Do, See（中学校）	50
	～生徒の自信を生み出す支援～	

事例 19	子ども・保護者・職員それぞれの願いを重ねて（中学校）	52
	～支援をチームで検討・修正～	

やってみよう その2	安定した集団生活を送るための手だて	54
	～自分は「今」・「何を」・「どうしたらいいか」が分かる！～	

IV 保護者の理解を深める工夫

事例 20	小さな成功を見つけて褒める（小学校） ～ADHDペアレント・トレーニング 親と教師の学習会～	56
事例 21	1年間の見通しをもって保護者と連携（小学校） ～三者による連携体制～	60
事例 22	保護者の協力を得るための学級懇談会（小学校） ～LD・ADHD児等への支援を保護者と共に行う～	62
事例 23	やってみよう、保護者学習会（小学校） ～全校の保護者を対象にした学習会の開催～	64

V 学校や関係機関との連携の工夫

事例 24	幼稚園・保育園とつなぐ縦の連携（小学校） ～SRECの訪問から保護者との連携が始まる～	66
事例 25	小学校と中学校をつなぐ縦の連携（小学校） ～SREC同士の連携で中学校にスムーズにつなげる～	68
事例 26	「個別の教育支援計画」に基づいた一人一人のネットワークづくり（自律学校） ～「みんなで支援」を進めるためのツールの活用～	70
事例 27	ずっと応援しているよ（中学校） ～中学校卒業生への支援～	74

◆支援情報

SREC養成研修

自律教育相談

障害者総合支援センター

自閉症・発達障害支援センター

平成17年度自律教育研究委員会



キーワードは「チーム!」

●「みんなで支援 みんなが笑顔」が肝心

第3集では、これまで小学校、中学校、自律学校で実践されてきた事例を掲載しました。読んでみて分かるのは、どれひとつとして一人のスーパーマンが問題の解決を導いている事例はないということです。まさしく「みんなで支援」し「みんなが笑顔」になることを目指して、学校が一丸となって取り組んできた事例です。

本年度までに県下の全小・中・自律学校でSRECが指名されました。各校では、SRECを中心に特別な教育的支援の必要な児童生徒に対する支援が進められていると思いますが、SRECだってスーパーマンである必要はありません。

●「役割の分掌化」が「みんなで支援」を阻んでいる？

一人一人の児童生徒に対し、校内で責任を負って支援しているのは誰でしょうか。学級の児童生徒であれば学級担任、部活動であれば部活動顧問ということになるでしょう。そして学校組織は「役割の分掌化」が明確になっており、よって学級担任、あるいは部活動顧問は一人で責任を背負ってしまう場合も少なくありません。責任感が強いばかりに、そうした状況に陥りやすい傾向があります。

また、このような例もあります。多動な児童に対して一人の介助員がその児童を支援する役割を分掌され、毎日一緒に生活しました。担任教師はだんだんとその介助員に任せきりになりました。介助員は、一緒に生活して悩んでいることなどを話す場がなく、一人で悩みを抱え込んでしまいました。一見支援体制が築かれているように見えますが、実際には十分機能していないということになります。

教師は「みんなで支援」ということがあまり得意ではないようです。仕事に分掌化され自己完結型で営まれている学校システムにおいては意識を変えないと、「みんなで支援」するという体制はできにくいのかもしれません。

エスレック
※SREC (Self-Reliance Education Coordinator)
自律教育コーディネーター

●「チーム支援」を行う

児童生徒は、様々な人たちとのかかわりを通して発達・成長していきます。特別な教育的支援が必要な児童生徒も同じです。一人だけがかかわるのではなく、児童生徒を取り巻く多くの人たちが、連携して支援にあたることが重要です。これが「チーム支援」です。第3集に掲載されている事例は、「チーム支援」を実践しています。

チームで進められている支援には、次のような姿が認められます。

- ①児童生徒を中心に、支援する人たちが結びついている。
- ②児童生徒についての情報や支援の目標等をメンバーが共有している。
※個人情報の扱いには、十分配慮して下さい。
- ③児童生徒にかかわる様々な立場のメンバーが各々の専門性をもってチームに参加し、お互いに尊重し合いながら力を発揮している。
- ④メンバー間のコミュニケーションが盛んである。
- ⑤チームにおいて、支援にかかわる役割が明確になっている。
- ⑥特定のメンバーのみに過剰な負担がかからず、相互に補い合って進めている。

自分の学校の校内支援の姿は、上記の項目と比べてどうでしょうか。チェックしてみましょう。「児童生徒をどうするか」の前に、「教師自身（教師集団）がどうするか」を語り合うことから始めた方がよい場合もあるでしょう。

●そして「授業」で勝負する！

現在進められている各校の奮闘が成果として積み上げられていくと思いますが、私たち教師は、やはり「授業」で勝負しなければいけないと考えます。「授業」にかかわる実践の積み上げを是非大事にしていきたいものです。

最近では、自律教育の授業研究のテーマに、通常の学級における教科指導のあり方を取り上げる学校も出てきています。



事例 1

みどころ



全職員によるチーム支援(小学校)

～「教師全員で子どものよい点を褒めよう!」を合い言葉に～

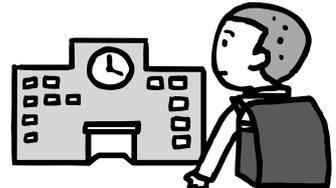
ユウキさんは、前籍校では授業中教室に入らず、一人校舎の陰でトカゲや虫を捕まえて過ごしていました。心配した保護者は落ち着いた小規模校で学ばせたいと願い、1年生の時に本校に転校してきました。本校は小規模校の利点を生かし、「教師全員で子どものよい点を褒めよう!」を合い言葉に子どもへの支援を行っています。そうした学校生活を通して、ユウキさんの行動は次第に落ち着き、現在は最上級生として全校の先頭に立って活躍しています。

●転校時の家庭の不安

- ・授業に参加できるかな?
- ・友だちと仲良くできるかな?
- ・学校のルールを守ることができるかな?



両親・祖母

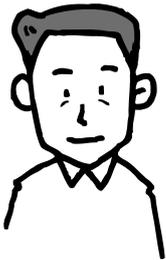


・全校児童 60名
・全校職員 15名
※自律学級未設置

●本校の特色<学校運営の基本方針>

- ① 一人一人の児童を大勢の目で見えて広い視野に立ってとらえましょう。あらゆる場面を生かし、先生方の持ち味を生かして支援に当たりましょう。
- ② 会議以外でも日常的に児童についての情報交換を行い、情報を豊富にすることで児童の内面に迫り、お互いに生かせそうな支援の仕方を取り入れましょう。
- ③ 児童のよい言動に目を向け、たくさん褒めましょう。

●担任ホシノ先生の取り組み



担任 ホシノ先生

<ユウキさんへの願い>

- ・授業中は教室にいてほしい。
- ・徐々に授業に集中できるようになってほしい。
- ・思い通りにならない時でも興奮せずに生活できるようになってほしい。

<先生方へのお願い>

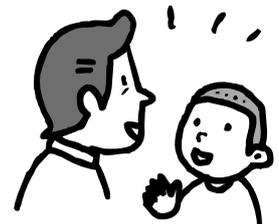
- ・支援についてのアドバイスをお願いします。
- ・学級以外での様子を是非担任に知らせてください。
- ・よいことは褒め、不適切な行動が見られたら注意してください。

ホシノ先生は、ユウキさんについて職員会で相談しました。ユウキさんへの願いを他の先生方が理解しにくれたこと、また協力をお願いできたこと、そして校長先生から「支援について不安がありそうですが、いつでも相談してください」と声をかけていただいたことで、不安が少し和らぎました。

「教師全員でユウキさんのよい点を褒める」ことを共通理解し、ユウキさんにかかわりました。

◆ホシノ先生が作成した「個別の指導計画」のポイント◆

- 1 意欲がもてるよう、授業の導入を工夫する。
- 2 ロールプレイ学習などを通して、友だちとのかかわり方を学習していく。
- 3 課題は短時間で終わるようにし、できた喜びを感じることができるようにする。
- 4 児童会活動、連学年での活動、縦割り班などでの活動を通して、他の学年の児童とかかわり、別の大きい集団でも活動できるようにしていく。
- 5 全校職員でユウキさんを見ていき、様々な場面で必要な支援をしていく。



●支援の実際

ユウキさんの様子

授業研究会

- ・問題を図や絵で示そう。
- ・スモールステップを大切に。
- ・問題等必要最少限の文字や数字、記号で表そう。

理科の先生

得意なところを生かして授業に取り組めるように工夫しました。

他学年の先生

同じ動作ができるまで模倣を促し、ゲームの中で失敗しても、一連の動きのよかったところを褒めました。
(ソフトバレーボール)

主治医

話の聞き落としがあり、次の行動がとれなかったり忘れ物があったりするようです。聞くことより見ることが得意なので、大切な指示はメモしたり、掲示物は目の高さに張ったりするなど、視覚に訴えるようにしましょう。

・自分から学習に取りかかるようになりました。発言もし、部分的に自力で問題を解けるようになりました。

・「昆虫の体の裏側はどうなっているか」の質問に、詳しい絵を描いて「ミヤマクワガタは、下のはらに4本線があって、2本あしがある。・・・」と添え書きをしました。女子の友だちが、その図の詳しさ、観察の細かさに感嘆の声を上げました。

・給食の配膳に自分で身支度も調えるようになりました。

・積極的にゲームに加わり、難しい動きにも挑戦する姿が見られるようになりました。

・だんだんに早くなってきたので、食べる量も増えました。今では時間内に食べ終わり昼休みに遊ぶ時間がとれるようになりました。

・少ない指示で、話の内容を受け止めることができるようになりました。

・音楽会は、しっかり演奏しました。家の方、ホシノ先生、音楽専科の先生は、一緒に大喜びしました。

校長先生

興味をもっていることや得意なことが見えてきますね。

保健の先生

給食準備の時には、手洗いと身支度がちゃんとできているか見ました。最初は、一緒にやったり、手伝ったりしました。

給食の先生

全校でランチルームでの昼食時、ユウキさんの隣に座り、声をかけました。食べられそうな量を配膳し、親しみ易い話題や栄養の大切さの話をしながら、時間内に食べるように促しました。

家庭との連携

毎日連絡は連絡帳、急な連絡は電話で連絡を取り合っていました。音楽会の時に本人が希望した木琴は、テンポが大変に速く難しいパートでした。ホシノ先生と音楽専科の先生で相談し、家でも練習を見てもらうようにお願いしました。

ユウキさんの最近の様子

- ・授業中、やるべきことが分かり授業に集中して取り組んでいます。学力もだんだん向上しています。
- ・同級生とトラブルを起こすことや感情を制御できず困ってしまうことも皆無に近い状態になっています。
- ・避難訓練時に不明者となった友だちを真剣に捜し、心配する姿が見られました。児童会やクラブなどの縦割り活動の時に、落ち着いて下級生の面倒を見ています。



皆に助けいただき、ありがたい気持ちで一杯です。

●校内支援体制のポイント

- ・全校職員で学校運営の基本方針を確認し、理解して取り組んでいることです。
- ・学校長が児童理解についてリーダーシップを発揮し、自らも積極的に子どもとかかわりをもっていることです。
- ・教職員が互いに学びあう姿勢を大切にし、情報を共有することを大切にしていることです。
- ・会議だけではなく、休憩時や放課後等、生活が子どもの話題でいっぱいなことです。

事例から学ぶ

すべての教師が、すべての子どもにかかわり、よさを認め褒めるといった支援を行えば、学校は子どもが安心して力を発揮し、子どもの力を育む格好の場となります。これは本事例のような小規模な学校だからできる、ということではありません。どの学校においてもできることです。そして、こうした教師の支援の姿勢は、校長先生のリーダーシップによって育まれていくものなのです。



事例 2 学生スタッフによる個別の支援体制(小学校)

～教員のノウハウと学生のやる気を無理なくつないで～

校内支援体制を推進していく上で、学校職員だけでは十分に対応できない「人不足」の状況を打開するためには、どうしたらいいでしょうか。本事例では、既存の制度を活用して、学生スタッフの導入を進めた事例を紹介します。

その中で、職員と学生スタッフが、短時間の打ち合わせや「記録・連絡簿」のやり取りなど、無理なくできる方法で情報交換しながら、一人一人の子どもの支援に丁寧に当たったところ、学習及び学校生活に対する意欲の向上など、一定の成果が見られました。

●人不足を補うという発想から

校内支援体制の中で、「人不足」を補うための苦肉の策として、個人的なつてを頼りに学生のスタッフをお願いしてきましたが、それには自ずと限界があり、2名のスタッフを探し出すのがやっとでした。

●学生スタッフの募集を組織的に

そこで、既存の「放課後学習チューター*」の制度を活用して、学生スタッフを組織的に募集することになりました。年度当初に市教育委員会と大学が協議の上、日時と会場を設定し、大学構内で学生に対する説明会が開かれました。そこでは、約200名の学生を前に、学校でS R E Cを務める職員が説明に立ち、次のような2コースに分けて、スタッフとして参加する学生を募りました。

Aコース(学力向上支援)

- <こんな子に> LD等、国語、算数などの学習に困難がある児童(未診断の児童を含む)
- <とき・ところ> 水曜日、午後3:00～4:00、コンピューター室など
- <やること> パソコンによるe-learning、プリント学習など、その子に合う方法で、「分かる」喜びが味わえるように、国語または算数の補充的な学習をする。
- <こんな方に> パソコンの操作や学習ソフトに詳しい、国語、算数などの教科の指導がしてみたい、LD等の子どもの学力向上支援について実践的に勉強してみたい方など

Bコース(学校生活支援)

- <こんな子に> ADHD、高機能自閉症等、行動や学校生活全般に困難がある児童(未診断の児童を含む)
- <とき・ところ> (月)～(金)の都合のつく時間、校庭・体育館・教室など
- <やること> 通常の学級に参加しない個別学習の時間に、子どもとマンツーマンで、キャッチボールなど運動的活動や、ちらし・ポスター作りなど製作的活動に共に取り組む。
- <こんな方に> 子どもと体を動かして遊ぶことが好き、デザイン、印刷、ペーパークラフト、粘土など、ものづくりの活動が得意、ADHD、高機能自閉症等の子どもの学校生活支援について実践的に勉強してみたい方など

※以上、「放課後学習チューター募集要項」より抜粋。

*文部科学省、県教育委員会、市教育委員会が、平成15・16年度に、調査研究事業として行ってきたもので、2年間で終了となる予定だったが、当面平成17年度は事業が継続されることになりました。次年度以後の継続は未定です。なお、英語の“tutor”は「家庭教師」という意味だが、訳語のチューターは「個人指導の教師」というような意味で用いられています。

●応募した学生スタッフと連絡・協議・チーム編成

最終的に、19名の学生の応募があったので、Eメールで連絡を取り、学生スタッフ説明会を開きました。その冒頭で、Aコース、Bコースそれぞれの支援の内容について説明するとともに、学生の希望を尊重しながらチーム分けを行いました。その結果、次のように、Aコース1、Bコース2の、計3チームが編成されました。そして、チームごとに、学生スタッフと職員（該当児童の学級担任）との打ち合わせが行われました。

☆放課後学習室（10名）＜Aコース＞

毎週水曜日の3:00～4:00（後半は職員会議の裏）、マンツーマンで教科の学習を行う。

☆チームT（6名）＜Bコース＞

学校教職員とともに、自閉症スペクトラムのタロウさんに対する、個別的な直接支援に当たる。

☆自律学級サポート（3名）＜Bコース＞

自律学級の活動に参加し、必要に応じて児童の活動を個別的にサポートする。

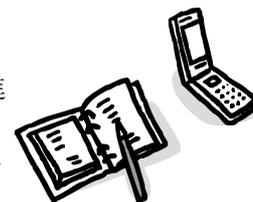
●学生スタッフを受け入れてのチーム支援の運営

学生スタッフに対しては、後掲の資料1「学生スタッフ留意事項」を配布し、勤務上の留意事項の徹底を図りました。そこには、各チームの拠点（受け付け場所）と担当職員を明示しました。更に、放課後学習室については、資料2「放課後学習室の運営」を配布し、各回の流れ、連絡・文書処理、当番職員などについて明示しました。こうして、学生スタッフの勤務が円滑に行われるよう配慮しました。

その後、支援の内容について、まとまった打ち合わせの時間は取れませんでした。教室での立ち話程度のごく短時間の打ち合わせや、毎回やり取りする「記録・連絡簿」（次頁図参照）などによって、学生スタッフと職員間の連絡を取り合いました。更に、チームTについては、学生が自主的に大学でケース会議を開きました。また、学校及び学生側の予定については、SRECが窓口となって、Eメールで連絡を取り合い随時調整しました。

●学生スタッフによる支援の成果

学生スタッフ導入による成果の一つは、子どもの自己肯定感や学習意欲の増進など、「学ぼうとする力」の向上であったように思われます。放課後学習室は、学級担任の側で用意したドリルや宿題などで進められましたが、学生スタッフとともに学習した子どもの日記には、次のように記されていました。



6月29日（水）

（4年・男子）

今日、学習チューターの先生とおべんきょうをしました。さいしょに算数の計算ドリルと日記のしゅくだいをやりました。計算ドリルは、チューターの先生にみなおしをしてもらって、3こぐらいまちがいがありました。日記もじょうずにかけました。また、チューターの先生とたのしくべんきょうしたいです。

また、ある子どもは、放課後学習室のある日に、「チューターの先生、まだ来ないかなあ」と言って、廊下に出てそわそわしていました。更に、別の子どもは、ふだんは宿題をやっているが、放課後学習室の次の日は必ず宿題をやってきて、それがその後も数日続くとのことでした。このように、首を長くして学生スタッフを待ったり、学生スタッフが来ない日にも何らかの波及効果が認められたりと、たとえ1週間に1回であっても、学生スタッフとの出会いが、子どもの学校生活に張り合いをもたらしているように思われます。

事例から学ぶ

学生スタッフによる支援は、日常的・継続的に多くの時間を当てるのが難しい反面、学生の希望や都合に配慮しながら十分な人員を配置することで、定期的に様々な支援が可能となります。その上で、職員と連絡を取り合い、子どもと近い立場で丁寧に対応することを通して、子どもの学習及び学校生活に対する意欲の向上などの成果が期待できます。地域資源の発掘を行ってみましょう。



学生スタッフ留意事項

〇〇〇立〇〇小学校

1 基本的留意事項

- (1) 学生スタッフの任務に当たるとき、その業務に関しては、学校の職員に準ずる。
 - ① 学校長の指導の下、教育活動に従事する。
 - ② 常時勤務ではなく、限られた時間の中で子どもと接する立場だが、一人一人の子どもの育ちに関与する立場であることに変わりはない。
- (2) 子どもと向き合い、誠意をもって、かつ柔軟に対応する。
 - ① 子どものしていること、しようとしていることに目を向け、子どものことばに耳を傾けて、その子の思いに寄り添うよう努める。
 - ② 自分の持ち味を生かしながら、自然で無理のないやり方で、明るく楽しい雰囲気づくり、関係づくりに心がける。
 - ③ 学習や行動などの上で、予想外のことや理解に苦しむことがあっても、自分の価値観で一方的に決めつけたりせず、「この子はどうしてそうするのだろう」と考える視点をもつ。
- (3) 個人情報の保護については、特に細心の注意を払う。(守秘義務)
 - ① 記録などの文書はもとより、メモの類まで、個人情報の保護に留意する。記録やメモに、実名は残さない。他の子どもと区別する必要がある場合に限り、略称(イニシャル)などを用いる。
 - ② 文書はきちんと保管し、必要なくなった文書は、職員室のシュレッダーに掛けて安全に処理する。
 - ③ 必要に応じて、担当職員と文書や口頭で連絡を取れるようにし、特に難しいケースについては、ケース検討の機会を設けるが、そこで扱われた内容については、スタッフ以外に一切口外しない。

2 勤務に関すること

(1) 出勤・退勤

- ① 出勤時は、玄関から入り、事務室に立ち寄って、「勤務整理簿」に記入・押印し、吊り下げ名札を着用する。
- ② チームの受付・拠点はおのとおりのとおり。

* 放課後学習室 コンピューター室 (SREC・担任)

* チームT 保健室 (養護教諭)

* 自律学級サポート 自律学級 (自律学級担任)

※ 担当職員に声を掛け、記録・連絡簿を受け取る。

- ③ 退勤時は、記録・連絡簿を所定の場所に収納し、名札を返して帰る。

(2) 記録・連絡

- ① 放課後学習室は子ども一人に1冊ずつ、チームTと自律学級サポートはチームで1冊、「記録・連絡簿」を用意し、所定の場所に収納して管理する。
- ② 記録・連絡簿の1ページ(記録・連絡票)が、学生スタッフ1名の1回分で、活動内容、子どもの様子などの記録、質問・申し送りなどの連絡を記入する。

(3) 持ち物・服装

- ① 上履き、印鑑、筆記用具、その他必要に応じて。
- ② 服装は自由だが、着替えの場所がないので、すぐ活動できるよう軽装が便利。

事例 3

子どもにとって身近な教職員で小委員会を組織(小学校)

～「個別の指導計画(短期)」を活用した支援～

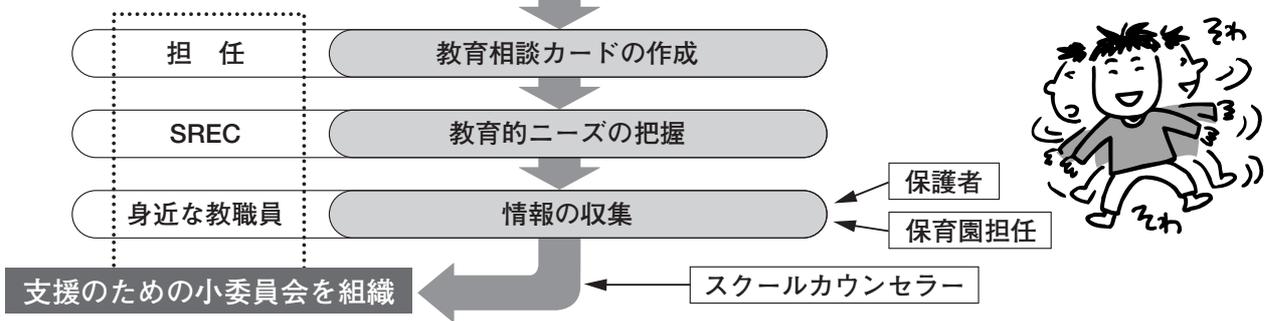
アヤコさんは通常の学級に在籍していますが、特別な教育的支援が必要な子どもです。担任一人では対応がむずかしく、他の子どもの学習指導との狭間で、担任はどう対応したらいいか悩んでいました。そのうちに、アヤコさんに学級不適應の様子が見られるようになってきました。悩みながらもアヤコさんを気にかけていた担任はそのことにいち早く気づき、教育カードを作成してSRECに相談しました。

これは、アヤコさんにとって身近な教職員で校内委員会小委員会を組織して支援を行った事例です。

●アヤコさんへの支援の流れ

【アヤコさんの気持ちや様子】

- ・教室にいても落ち着かない。
- ・他の教室に行きたくなっちゃう。
- ・授業がおもしろくない。
- ・ぼんやりしたり無気力になったりしてしまうことがある。



1週間単位で「個別の指導計画」を作成し、小委員会で継続的・発展的に支援

○年○組 アヤコさんの支援

1. 今週の重点 (○月○日～○月○日)

- ・前週、休み時間に、自分から友だちに話しかけている姿が見られました。周りの子どものやっていることや活動への関心が高まってきているようです。いろんな場面で、周りの子どもや活動に関心を向けられるように支援をしてみましょう。

2. 今週の予定

	○日(月)	○日(火)	○日(水)	○日(木)
朝の活動				
登校				
1				
2				
休み時間				

3. 留意事項

- 先週、いつもは活発なアヤコさんがぼんやりしている姿が見られました。その前後の様子を丁寧に検討し、何がそういう姿につながっているかを明らかにしたいですね。

○前週に行った支援の様子や情報を小委員会で出し合い、伸びてきている事柄を、今週の支援の重点にしました。

○アヤコさんへの願いの他に支援する際に気をつけたいことなどを、重点として記入することもありました。

○支援者の空き時間を確認し、対応できる時間や場所を調整しながら記入するようにしました。

○前週の様子によっては、活動場所や支援者を絞ることもありました。

○自分の学級で楽しくできた活動は、大切に位置づけるようにしました。

○支援の重点以外のことで、共通理解しておかなければならない配慮点について記入しました。

●子どもの教育的ニーズの把握は教育相談カードから

年度の初め、各教室で特別な教育的ニーズのある児童がいることに気付いた時は、担任が「教育相談カード」を作成してSRECに連絡することを、全校の教職員で確認し合いました。

教育相談カードを作成することには、次のようなメリットがありました。

- ・カードが子どもを共通理解する際の資料となり、担任とSRECがこれからの対応についてじっくりと話し合うことができました。
- ・必要に応じて、カードを使いながら複数の教職員と情報交換することができました。
- ・スクールカウンセラーからアドバイスを受ける場合の資料として使えました。
- ・「個別の指導計画（短期）」を作成する際の資料となりました。
- ・当初の教育的ニーズの記録として残しておけます。その後の支援の参考になります。

●アヤコさんの身近な教職員によって小委員会を組織し、毎週支援会議を開催

身近な教職員による小委員会は次のように組織し、運営上の配慮をしました。

- ・アヤコさんに対しては、担任だけでなく、学習習慣形成支援、学年主任、養護教諭、自律学級担任などアヤコさんの身近にいる教職員が、それぞれの立場で支援をしてきていました。それぞれが、アヤコさんの理解、支援の手だてにつながる情報を多くもっており、それらの情報を集め整理することによって、支援の方向が具体的に見えてくるのではないかと考え、身近な教職員で小委員会を組織しました。
- ・第1回の小委員会では、保護者や保育園の担任から聞いた情報や小委員会メンバーのもっている情報を基に、教育的ニーズの背景について再考察しました。そのことにより、支援の必要性などの共通理解が深まり、スムーズに支援をスタートさせることができました。
- ・小さな変化に対応するため、毎週支援会議を開催しました。話し合った内容は、SRECが「個別の指導計画（短期）」としてまとめ、翌週の初めにメンバーに配布しました。
- ・支援会議は、学習習慣形成支援の勤務時間に配慮し、毎週末、給食後30分行いました。

●「個別の指導計画（短期）」

「個別の指導計画（短期）」を作成することにより、次のようなメリットがありました。

- ・支援の経過を見返し、次の見通しを全員で共通理解して、それぞれの役割を果たしながら、連携して支援することができました。
- ・支援してほしい教職員や時には教職員全員に配布して、協力を仰ぐこともできました。
- ・保護者に経過を伝えたり、家庭でもできる支援の内容を伝えたりするための資料として使うことができました。
- ・アヤコさんの様子に変化が見られた時には、対応する先生にそのことを情報として伝えるための資料として使うことができました。そのことによって、必要な情報を確実に伝え、適時適切な支援につなげていくことができました。

事例から学ぶ

教室で困っている子どもがいる場合、対応を先延ばしにすることはできません。まずできることは、その子どもにとって身近な教職員で支援チームを組織することです。身近な教職員は何らかの形で支援を行ってきており、それらの情報を収集・整理することによって、有効な支援方法が見えてきます。本事例のように、毎週支援会議を開催して「個別の指導計画（短期）」を作成することは容易なことではありません。しかし、こうした努力が笑顔につながります。

事例 4

授業公開を通じた他機関との連携(小学校)

～校内支援体制の工夫と他機関との共同評価～

友人関係のつまずきから5年生後半不安定になり原学級に入れなくなったナツコさん。校内ではナツコさんの支援チームを作り支援を行いました。また、担任は授業を専門機関や教育機関に見てもらい、アドバイスをもらって授業改善に努めた結果、ナツコさんは6年生の後半から教室で過ごせるようになりました。

●学級担任でもあるSRECが中心となって、ナツコさんの校内支援体制をつくる



SREC

- 1 ナツコさんの心の状態の理解を大切に実態を把握して、「個別の指導計画」を立てましょう。
- 2 支援チームが主体となってナツコさんを支援（直接的支援）し、校内支援委員会・職員会は支援チームを支援（間接的支援）しましょう。
- 3 校外の専門機関や教育機関と積極的につながり、授業を公開してアドバイスをもらいましょう。

●1年間にわたる支援の実際

1学期の支援



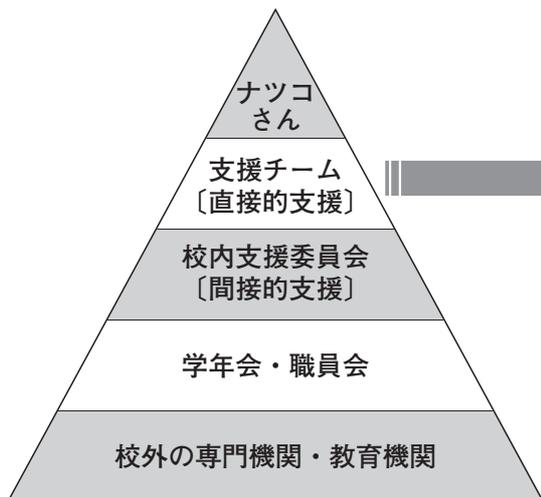
ナツコさん

- ・私だけの先生でいてほしい。
- ・原学級では緊張してしまう。

校内委員会でナツコさんのケース会議を繰り返して行いました。校内委員会では「個別の指導計画」を作成しましたが、それによって支援についての共通理解が図られ、徐々に支援のピラミッド（校内支援体制）ができあがりました。支援チームのメンバーとその役割を明確にし、支援に当たりました。

A市巡回相談員からは、「活動のエネルギーが低いので、エネルギーをためていけるようにすることが大切」との助言があり支援の際に配慮しました。

校内における支援のピラミッド



ナツコさんへの支援

支援の内容	支援の場	支援する人
個別の教科学習	職員室	自律学級担任
牧場体験学習	職員室	SREC
調理活動	家庭科室	家庭科担当
実験理科	理科室	理科専科
バドミントン	体育館	学習支援担当
書道	家庭科室	養護教諭
箱庭活動	通級指導教室	通級指導教室担当

2 学期の支援

徐々に学校の流れに沿って行動できるようになったナツコさん。運動会をきっかけに体育や給食を原学級で過ごせるようになりました。また、学級の友だちと手紙の交換を始めることもできるようになりました。

ナツコさんは、自律学級で始めた「牧場体験学習」に参加していましたが、校内で授業公開することになりました。授業こそがナツコさんにとって支援の大切な場だと考えたSRECは、これを機会に校内ばかりでなく他機関の専門家にも参観してもらい、共同評価を行うことにしました。

単元名 「牧場学習のことをわくわく新聞に書いて校内の友だち、先生に伝えよう」

(学習活動) 新聞の内容として、読んでもらう人に分かるように牧場のことを文章や絵にかく。

授業研究会では、次のような意見が出されました。

まだ自分のことで精一杯な段階。得意なこと熱中できることがもてるようにすることが大切です。

授業において役割がはっきりしてくるといいですね。主体的に取り組める活動を仕組んでみてはどうでしょうか？

素直に甘えられないところがあるんです。居場所がやはり必要ですね。

この授業の姿を原学級へつなげられるといいですね。

ナツコさんだって学びたがっているはず。授業の中でナツコさんが認められる場を作ることが大切なのでは？

(参加者)

自律教育担当教育支援主事
療育コーディネーター 学校長
教頭 学級担任 自律学級担任
通級指導教室担当 自律学校教育相談



共同評価を行ってみたいのSRECの感想

「初めての試みでしたが、さまざまな視点からアドバイスしてもらい、とても参考になりました。ナツコさんの心の状態をより深く見つめる機会ともなりました。また、私たち自身がこれまでの実践に対して励まされたような気持ちになりました」

3 学期の支援

原学級で行われる学習活動への配慮の仕方、個別学習の組み方、ナツコさんが自分の気持ちを見つめられる時間の確保など、支援の工夫を行いました。臨床心理士によるセラピーも始まりました。

4月からも友だちと
すごしたいなあ。
(心のつぶやきノートから)



事例から学ぶ

本事例においても、「個別の指導計画」にそって支援チームを組織するなど、まず、校内における支援体制をしっかりと構築しています。その上で、校外の専門機関や教育機関が授業参観やその共同評価に参加することが有効な支援となります。「授業の在り方」を共に考えている取り組みが、大変参考になります。教師自身が支援の現状を確認し、励まされるとともに、子どもへの支援をよりいっそう充実させてくれます。

事例 5

個別支援のための人員・時間確保の工夫(中学校)

～週持ち時間数と時間割に注目！～

「特別な教育的支援が必要な生徒はいるが、個別支援に対応できる人員や時間を確保できない」という悩みを抱える中学校は多いようです。本事例では、週持ち時間数の基準の設定や時間割の組み方に注目し、人員・時間確保を工夫した中学校の実践を紹介します。この工夫により、学習支援係会を時間割に位置づけて支援の方向を決めたり、必要に応じてTT（チーム・ティーチング）に入ったりするなどの支援が可能となりました。

●「生徒指導係」「教育相談係」「学習支援係」が連携し、校内支援体制の基礎をつくる

Y中学校では、年度末に新年度の校内組織を立案する際、SRECからの提案で、従来の「教育相談係」「生活指導係」に加えて「学習支援係」を新設し、3つの係が連携するための「生活安定委員会」を組織しました。委員会から、支援に当たる人員や時間の確保についての提案がなされました。

なぜ係が連携するのか

学校生活で困っているMさんがいます。

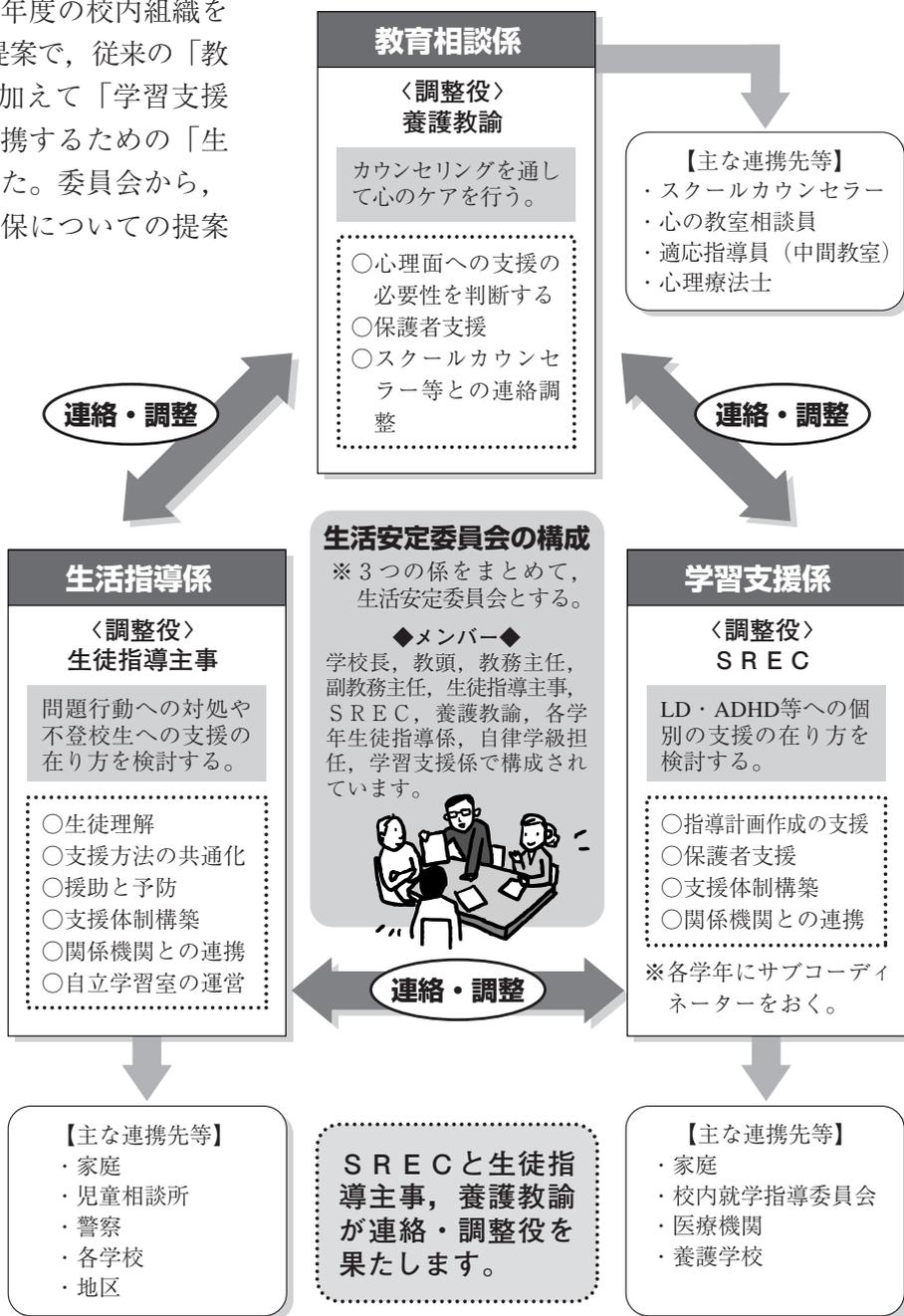
まず、行動の様子について、生徒指導係会で検討しました。その中で、つまずきの原因が、家庭環境と学習不振にあるととらえ、各係が次のような支援を行うよう考えました。

◆生徒指導係は、Mさんの生活全般と保護者への支援。

◆教育相談係はカウンセリング的な対応を通して心のケア。

◆学習支援係は、学習の状況の把握とサポート体制の検討と支援。

3つの係が連携して多面的に支援を行うことで、より有効な支援になると考えました。



Y中学校の生活安定委員会の組織図

●学習支援を行う人員を確保するために、担当時数の算出方法を工夫する

教諭	①週教科担当時数 (自律学級担当時数も含む)	②その他の時数 (道徳・学級活動等)	③学習支援に関する 週時数	④週担当総時数
A教諭	22.1	3.0		25.1
B教諭	22.0	3.9		25.9
C教諭	20.7	2.9		23.6
D教諭	19.4	4.4		23.8
E教諭	18.1	4.4	1.0	23.5
F教諭	18.7	2.9	3.0	24.6
G教諭	14.0	3.4	6.0	23.4
H教諭	19.0	2.9	2.0	23.9

TTや指導計画立案などの学習支援を行う人員を確保するために、1人あたりの週担当総時数の基準(表④)を23～26時間と決め、自律学級支援も含んだ週教科担当時数(表①)と、その他の時数(表②)を合計して総時数との差を出しました。教科によって週指導時数が異なるため、時数に余裕ができる先生が生まれます。その先生を、学習支援のメンバー(表③)に位置づけました。

●学習支援係が活動する時間を、時間割に位置づける

係会を時間割に位置づける

学習支援係会を金曜日の5時間目に位置づけました。原則的には不登校生支援係と隔週で開きますが、状況によっては、毎週開くこともできます。

係会では、対象生徒の学習上のつまづきを分析し、支援方法の大筋を決め出し、学級担任や教科担任、学年会に提案する役割を果たします。

空き時間を時間割に位置づける

係会のメンバーが空いている時間を週時間割に位置づけました。その時間は担任や教科担任の要請に応じて支援に行けるようにし、併せて不登校生などの家庭訪問にも対応できるようにしました。たとえばG教諭は、5時間(係会の1時間分を除いた時数)個別支援が可能になるわけです。

この方法は、学校規模や学校の状況によっても異なります。しかし、何よりも素晴らしいのは、「週持ち時間を多くしても、生徒のために学習支援ができる体制を作りたい!」という思いを全教職員が確認し、一致して取り組んでいることです。今困っている生徒に今支援することを第一に考え、人員が足りないからと諦めることなく、学校独自の努力で人員を確保し学習支援を行っています。

事例から学ぶ

支援体制を学校独自の工夫でどこまで作ることができるか。教職員がその支援体制の必要性和意義を共通理解できるかがキーポイントです。SRECを中心に、学校長、教頭、教務主任、自律学級担任等が連携し、支援体制づくりの推進力になることで実現が可能となります。

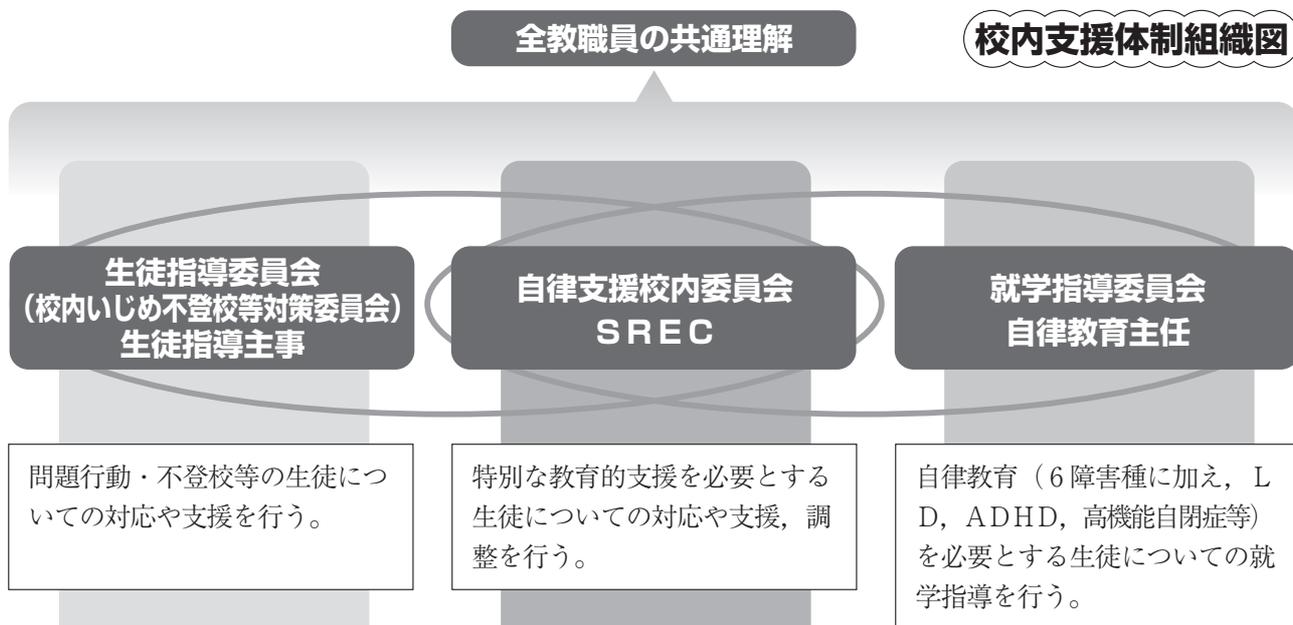


生徒・保護者に寄り添った支援チームづくり(中学校)

～各委員会を連携させるためにSRECがかかわって～

自律教育支援の対象範囲がほぼ全児童・生徒ということから、「SREC一人では対応が難しい」という声が聞かれます。本事例では、中学校において、生徒指導委員会、校内就学指導委員会等、現行の組織の在り方を大事にしながら新設の自律支援校内委員会・SRECの位置づけや役割などをはっきりさせていくようにしました。これによって教職員の連携が取れ、特別な教育的支援を必要とする生徒への対応や働きかけがスムーズになりました。

●各委員会が連携して取り組み、生徒・保護者のニーズに合った支援チームをつくる



問題行動・不登校等の中でも、障害に起因する場合や通常の教室で支援を行うなど、特別な教育的支援を必要とする場合は、自律支援校内委員会・SRECが担当しその支援、調整に当たる。

●支援チーム(各委員会)・SRECが生徒・保護者に寄り添いながら支援の調整を行う

<p>●ヨシエさんの支援チーム</p> <p>生徒指導主事 (SREC)</p> <p>生徒指導委員会・校内いじめ不登校等対策委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○生徒指導主事・学級担任・養護教諭・スクールカウンセラー・図書館司書・長期入院児童生徒訪問支援員 6名</p>	<p>●マモルさんの支援チーム</p> <p>SREC</p> <p>自律支援校内委員会・就学指導委員会・生徒指導委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○知的障害自律学級(以下知障学級)担任・原学級担任・養護教諭 3名</p>	<p>●サトミさんの支援チーム</p> <p>SREC</p> <p>就学指導委員会・自律支援校内委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○SREC・知的障害自律学級(以下知障学級)担任・情緒障害自律学級(以下情障学級)担任・原学級担任 4名</p>
--	--	---

- 「小学6年で、週2～3回夕方保健室登校」との情報より、ヨシエさん（現在中1）には小学6年時から生徒指導主事が中心となって、小中連絡会や個別相談（保護者）等を担当している。

〈支援の実際〉

生徒指導主事

- ・小学校の時は健康面から院内学級に入級して生活を送っていたことを聞き、不登校生としてとらえていた部分を修正。養護教諭・スクールカウンセラーにも対応してもらえるよう連絡・調整をして本人、保護者のケアに当たる。
- ・小学校、院内学級、医療機関等との連携を図る。

S R E C

- ・入学後は、つながりの深い生徒指導主事がそのまま担当し、本人及び保護者のニーズを正確に把握して進めていけるよう連携体制をつくった。

学級担任

- ・安全面から廊下を走ることやふざけることを控えるなど、全校生徒向けの共通資料を作成し、全教職員共通理解のもとで全校指導に当たれるようにする。
- ・保護者付き添いができるように配慮をする。

〈現在の様子〉

4月初めは保護者が付き添って、安心して学校生活を送った。体育の授業の裏では、図書館で読書をするなど、居場所の拡大で生活空間が広がり気分転換にもつながった。全校で生徒理解を深めたことで、周りの生徒の意識が高まった。現在は、自宅療養をしているため、週1～2回訪問支援員が通い学習等を行っている。

- 中学1年途中から知障学級に入級している2年生のマモルさん。原学級に戻って生活したいという希望があることから知障学級担任と原学級担任が連携して支援体制をつくる。

〈支援の実際〉

S R E C

- ・原学級での授業に出られない場合は保健室や自律学級で過ごせるように連絡・調整する。その時には相談にのり気持ちの安定を図るようにする。

知障学級担任

- ・説明が速いと理解することが難しく、ゆっくり説明すると理解しやすいことから、できる範囲で個別指導を確保してもらえるように教科担任に伝える。

原学級担任

- ・苦手なことは避け、動かない、隠れる等の行動をとることから、担任が間に入り友だちとの信頼関係づくりに努める。
- ・「今マモルさんは、こんなふうに思っているのではないかな」など、マモルさんが言葉で表現できない部分を担任が補うようにする。

〈現在の様子〉

居場所の確保から安心して原学級で生活しているが、苦手なことを避け、保健室・自律学級で過ごす時もある。そういった時でも、マモルさんなりの理由があることを認め、原学級の友だちが理解していくことが必要。

また、こういう状況下で、マモルさんのセルフエスティーム（自尊感情）を高めていく具体的な手だてを見いだしていくことが支援チームの課題となっている。

- 中学1年で不登校。知障学級生徒の励ましを受けて登校できるようになり、居場所を知障学級に求めたサトミさん。2年時に就学指導委員会の判断を受け情障学級へ入級。しかし、知障学級の生活・環境で安定することから情障学級担任と知障学級担任が連携して支援体制をつくる。

〈支援の実際〉

S R E C

- ・本人・保護者のニーズから、居場所（生活・環境）を広げる。
- ・知障学級、情障学級、原学級の時間割から受けることができる授業を選び、自分の時間割を作れるようにする。状況に応じて変更していく。

〈現在の様子〉

生活・環境を整えることで本人のやる気、自信につながっている。しかし、教科担任を選び好みしたり、苦手な教科を避けたりすることが起きてきた。プレッシャーやストレスを感じない範囲で時間割を考えながら、将来や進路のことなど徐々に深めていき、自己実現に向けて取り組むことができるようにしたい。

事例から学ぶ

S R E Cがかかわりながら各委員会で支援体制を検討し、生徒・保護者に寄り添える支援チームをつくること、そして支援の役割を明確にし具体的に取り組むこと、これらが、生徒・保護者にとっても学校に対する安心感につながります。

事例 7

支援のアイデアが集まる「発達障害学習会」(地域)

～事例研究会を通して支援のヒントをつかむ～

クラスにいる子どもへの支援について悩んでいたイチカワ先生は、同校のSRECの勧めで、地域で行われている「発達障害学習会」に研修を兼ねて参加しました。

そこで、自分の事例を報告して、参加者から多くのアイデアやアドバイスを受け、それらを参考にしながら、校内でも支援について話し合いをもち、日々の実践に取り組んでいます。この事例では、地域で取り組まれている学習会について紹介します。



学級担任 (イチカワ先生)

ツトムさんのことで悩んでいるのですが、どこかに相談できないかしら？障害について、専門的なことも勉強したいし・・・

校長先生、教頭先生に相談して、学習会に参加してみます。

A養護学校で行っている「発達障害学習会」に行ってみたらどうだろう。

ツトムさんのことを事例として扱ってまいりましょう。



SREC

学習会に参加

校内委員会実施

「個別の指導計画」作成

実践

地域における「発達障害学習会」

専門家を囲んでの学習会を、地域で開きたいという強い要望が以前からあり、支援センター職員、教員、保護者等で準備を進め、下記のように開催することになりました。

- 1 日時 毎月1回 18:30～20:30
- 2 場所 A養護学校 会議室
- 3 参加者 自由
- 4 内容

- (1) 参加者全員でテキストの読み合わせ (必要に応じて講師の先生の説明)
- (2) 事例研究会 (インシデントプロセス法により)

※保護者、福祉関係者、医療関係者、教育関係者等、毎回 20名前後の参加者で実施しています。



●事例研究会での内容

<イチカワ先生の事例発表>



ADHDと診断された小学1年生の男の子。カブトムシが大好きで、自慢したくて、他のことがなかなかできないようです。

自分に何かされるとオーバーにとらえて泣き叫び、周りの子のことが理解できないようです。

レポートがとれなかったり、彼にかかると他の子への支援がほとんどできなかったりで、悩んでいます。

<提案された意見>

家の人との連携を大切にしましょう。参観していただいたり、医療相談を受けたりすることも必要かもしれませんね。



一人で抱え込むのはたいへんです。TT等支援体制を学校で検討してもらいましょう。

クラスみんなで、カブトムシを飼うようにしたらどうだろう。

●イチカワ先生の取り組み

校内委員会では事例研究会の時に提出されたアイデアをいかし、次のような方向になりました。

- ・カブトムシをクラスで飼うことについては、提案者がカブトムシを提供するという申し出もあり、是非実施してみよう。
- ・保護者とは、連絡帳等でできるだけ情報交換をし、頑張ったことやできたことなどを具体的に伝えていきましょう。信頼関係ができれば、医療相談も含めて懇談をしていきましょう。
- ・体を動かす活動や外に出る活動を取り入れ、なるべく空白の時間をつくらないようにしましょう。
- ・学年での活動を行うなどして、学年で協力体制をつくりましょう。
- ・他の子とツトムさんをつなげる役を教師が行い、ツトムさんの言いたいことを他の子が説明するような場面もつくっていきましょう。

●ツトムさんとクラスの変化

- カブトムシをクラス全員で飼うようにしたので、他クラスの子たちの出入りも多くなり、クラスとしても広がりが出てきました。
- ツトムさんは、仲間ができる喜びを味わいました。
- ツトムさん自身も仲間を増やしていこうと願いをもち、友だちと一緒に少しずつ活動できるようになってきました。

一人で悩んでいたけどオープンにしてよかった。よい機会になりました！



事例から学ぶ

学習会はいろいろな立場の人と出会う機会にもなり、いろいろなアイデアがもらえ、支援の幅が広がります。困った時には一人で悩まず、学習会などに参加して相談することも効果的です。

各地域で、様々な学習会が実施されているようです。まずは、SRECに問い合わせてみましょう。

事例 8

みどころ

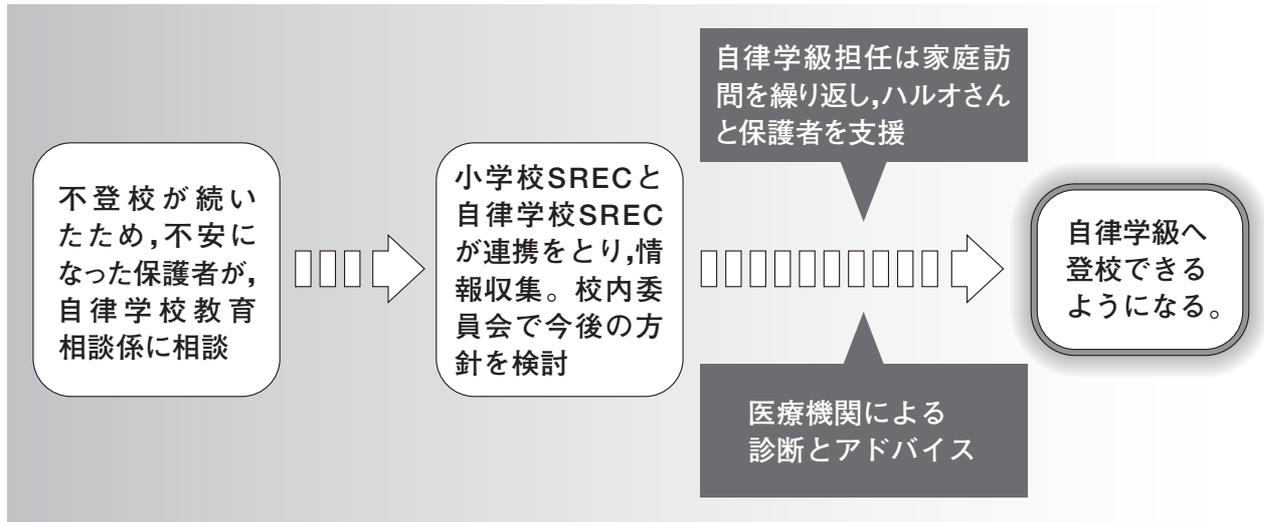


共に進める子ども理解(小学校)

～ネットワークづくりと特性を生かした支援～

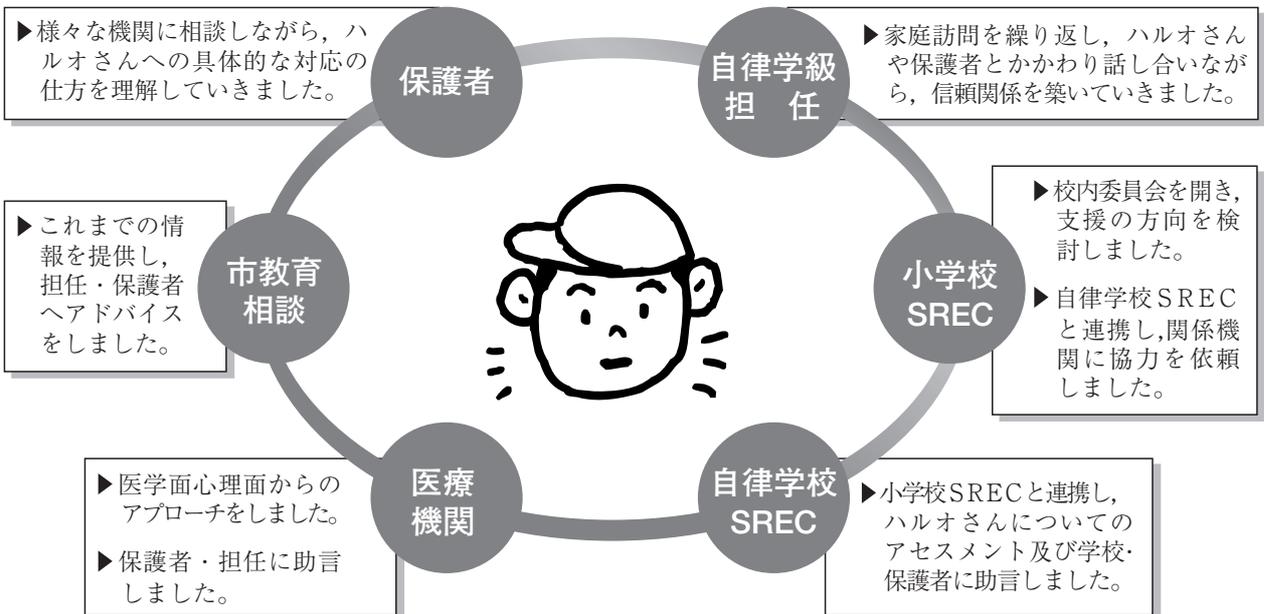
学校では話すことが苦手で不登校だったハルオさん。2年生からは自律学級に入級しましたが不登校は続き、保護者は不安を抱えていました。また、家庭では乱暴な行動も生じ始め、子どもの理解や対応に苦しんでもいました。学校と関係機関とが連携をとり、保護者の心情に寄り添ったアプローチをする中で、子ども理解を共に深めていき、登校へと結びついた事例を紹介します。

●ハルオさんが登校できるまでの流れ



●自律学校SRECと小学校SRECとの連携(支援のネットワークづくり)

自律学校と小学校のSRECは互いに連絡を取り合い、今後の方向について話し合いました。これまでハルオさんにかかわってきた市の教育相談、医療機関からも情報を得ることができ、ハルオさんと家族を支えるネットワークが徐々に作られていきました。自律学校と共に支援を進めたことで、ハルオさんに対する支援の幅が広がりました。



●保護者と学校関係者によるハルオさんの理解

ハルオさんの不登校の原因は何だろう、自律学級担任と小学校SRECはいつもこの疑問を抱えていました。また保護者もハルオさんの様子を記録したり、様々な機関へ相談に出かけたりして、ハルオさんの課題を探り続けていました。しかし、十分な支援の方向が見つけれないでいました。

その悩みを解決する糸口になったのは、医療機関の診断とアドバイスでした。ハルオさんの特性が明らかになることで支援の方向も定まり、瞬く間に学校と家庭との連携が深まって、同一歩調での支援が始まったのです。

●自律学級担任によるハルオさんの特性を生かした支援

自律学級担任はハルオさんが不登校になった当初から家庭訪問を繰り返し、再登校へのレールを敷いておきました。担任との信頼関係ができてくると、ハルオさんにも「学校へ行きたい。また給食を食べたい」という気持ちが出てきました。担任は再登校を始めたハルオさんのために特性に応じたさまざまな支援の手だてを用意しました。特に会話によるコミュニケーションが困難なハルオさんが安心感をもって担任とコミュニケーションをとれるよう様々な配慮をしました。



担任の願い

再登校したとき、安心して教室で過ごせるようにしたい。
視覚的な情報処理が有効という特性を生かした支援をしたい。



サインカード	「できたよ」「わからないよ」「てつだって」などと書かれていて、自分で選択し提示することで担任に意思を伝えられるようにしました。
模型の時計	自分の示したい時間を担任や保護者に伝えました。
文字表記によるコミュニケーション	交換日記やメールで担任との意思交換をしました。
うなずきや首振り	イエス・ノーなどのジェスチャーで答えられるようにしました。
活動シート	活動内容が書かれたマグネットシートで、自分がすることを選び、予定黒板に張り付けるようにしました。徐々に、箱庭、ジムボール、アイロンビーズ、コラージュ、外で遊ぶ等、カードが増えていき、活動の幅が広がりました。

事例から学ぶ

保護者の困り感に寄り添い、自律学校・小学校各SRECが連携しながら子どものよりよい成長を求めて、支援のネットワークをつくっていく大切さが分かります。

子どもの特性に合わせた適切で具体的な支援を行うことで、子どもは安心して学校生活を送ることができるようになります。

「個別の指導計画」を作成し確かな支援を(小学校)

～原学級担任が「個別の指導計画」を作成して～

自律学級に在籍する4年生のマサオさんは高機能自閉症の男の子です。興味を持ったことにはとことんのめり込むけれど、関心のないことは全く眼中にありません。技能教科のほかにも理科や社会科も原学級で学習していますが、一斉指導の授業では集中できないことが多く、今何をしているのかが分からなかったり、また不器用さが強く操作活動が苦手だったりして、学習がなかなか身に付いてきません。そんなマサオさんに対して、原学級担任は「個別の指導計画」を用意して、よりよく楽しく学ぶためのマサオさんへの支援を考えました。



マサオさん困ってるよな。でも何に困っているのだろう。

どうやれば話していることが分かるんだろう。

「やったー」という顔を見たいなあ。

この時間は何を学ぶことができるだろう。自律学級ではどんなふうになっているだろう。



原学級の授業でも、その時間にやるのが分かっているだけでいいのだけれど…。

記憶を助けるものを用意できるといいな。

特別扱いはイヤがるから、他の子にも通じる支援がいいな。



●マサオさんの「個別の指導計画(通常の学級用)」を用意して、指導への見通しをもちました

自律学級で作成している「個別の指導計画」を参考に、原学級担任も自分の教室用のマサオさんの「個別の指導計画」を作成しました。その中で次のことを明らかにしました。

- ① 原学級の学習で願うこと
- ② 教科のねらい
- ③ 本児の予想されるつまずき
- ④ 支援の方法
- ⑤ 自律学級での支援の位置づけ方

を明らかにして指導に当たりました。



【原学級担任の願い】

- 教室での学習を、実りのあるものに…。
- 支援の見通しをもつために…。

◆マサオさんの「個別の指導計画」(抜粋)◆

原学級での児童の実態		—略—	諸検査の結果	—略—
今年度の目標	1. 筋力を維持することができる。 2. 活動の区切りで「これでよいか」を担当とともに確認したり、次に何をするかを確認したりする。 3. 友だちの活動や言葉から自分のすることを知り、一緒に活動できることを増やす。			
1学期の目標	学習内容・手だて		評価	
○範囲を決めて作業に取りかかることができる。 ○写真を見ながら内容を理解することができる。	○「ここまで」と範囲を確認し、はじめは一緒に作業する。 ○矢印を使って写真をたどったり、ペープサートと吹き出しを使ったりする。 ○隣の友だちの作業を見たり声がけをしてもらったりして、学習の内容を知る。			

●原学級での授業に何を願い,どんな支援をするかを考えました



原学級で学習するよさ

- ① マサオさんには集団は大きい方がよい。
その中でこそ学べる人間関係もある。
- ② 通常の学級の授業に参加できることが自信につながる。
- ③ 教科のねらいが身に付く。

自律学級で支援

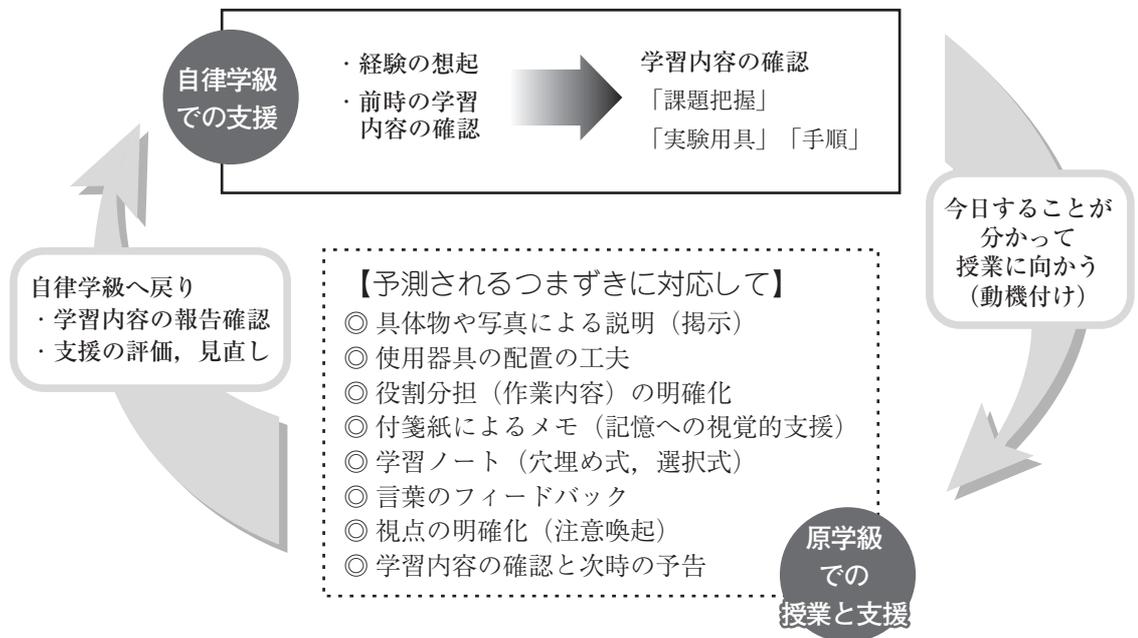
- ① 身体知覚と運動企画力を育てること。
- ② ボディイメージの向上をはかること。
- ③ スケジュールを確認すること。
・活動内容の報告確認
・次時の活動内容の確認

支援の原則

- ① 学習内容を確認し見通しがもてるようにする。
- ② 情報の提示は順序よく行う。
- ③ 情報の提示には視覚的補助教材を用意する。
- ④ 授業中も視覚的補助教材を用意し,学習を支援する。
- ⑤ 具体的作業が安全にできるような配慮をする。



◆マサオさんへの支援の実際(理科の学習)◆



マサオさんの分かりやすさは, みんなの分かりやすさにもつながる

事例から学ぶ

原学級でも「個別の指導計画」を作成することで, 特性に応じた具体的な支援の方法や支援する場面などを明らかにすることができます。また, 原学級担任と自律学級担任のよりよい連携が, 校内における支援体制のモデルとなり, 他の学級にも広がるのが期待できます。

特性を知って、支える仲間づくり(中学校)

～みんながアキラさんのサポーター～

自閉症やアスペルガー症候群などの児童生徒が、所属する集団の中で生き生きと活動していくためには、教師や保護者といった大人の支えはもちろんですが、一緒に生活している子どもたちの理解やサポートが不可欠です。本事例は、中学校の部活動や学級といった集団の中で生き生きと活動することを願い、保護者と連携しながら周囲の子どもたちの理解を進め、サポートを呼びかけた取り組みです。

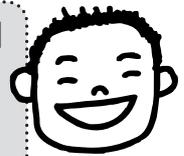
●アカネさんの悩みに応えることから始めてみました



アカネさん

吹奏楽部のアカネさんは、同じトランペットパートに所属するアキラさんの行動がどうしても理解できず、悩んでいました。

「アキラさんはみんなとちょっと違う感じ。時々、ビックリする行動がある」
 「よくボーッとしているけど、やる気あるのかな？」
 「先生はあまり注意しないけど、アキラさんだけ特別扱いなの？」
 「私たちはどうしたらいいの？一緒にやっていく自信がない！」



アキラさん

悩んでいるアカネさんにアキラさんのことを理解して接してもらうにはどうしたらよいか、部活動顧問も悩みました。SRECと話し合い、アキラさんのお母さんを交えて相談することにしました。

困って何とかしたいと訴えてきたアカネさんの気持ちをしっかり受け止めたい。



部活動顧問

アキラにとって周りからのサポートが不可欠。みんなにアキラのもっている特徴を話さなければいけない時がくるって思っていたけれど、今がその時なのかも。



アキラさんのお母さん

教師だけでなく、周りの子にもアキラさんのことを分かってもらうことが必要な時じゃないでしょうか。アキラさんが集中できる工夫も必要ですね。



SREC

アキラさんのことを一番理解しているお母さんから、アカネさんにアキラさんの抱えている困難点について話をしてもらうことにしました。

いつもアキラのことを気にかけてくれてありがとう。実はアキラはアスペルガー症候群という障害があるの。アキラが集団生活をしていくには、周りの友だちの支援が必要なの。



そうだったんだ。説明してもらって、初めて分かりました。もう少し詳しくアスペルガー症候群について知りたいです。私だけじゃなくて、部のみんなも話せば分かってくれると思います。

「先生たちが自分の気持ちをしっかり聞いて、対応してくれた」ということで、アカネさんのわだかまりが解け始めました。そして、アキラさんのお母さんから話を聞いたことで、アカネさんのアキラさんに対する見方が変わり、アキラさんを支えていこうという気持ちや、アスペルガー症候群についてもっと知りたいという気持ちを抱くようになりました。

●吹奏楽部の仲間をサポートを呼びかけました

吹奏楽部の仲間にもアキラさんのことを理解した上でサポートしてもらえるよう、お母さんから話をしてもらおうことになりました。

アスペルガー症候群の特徴である場の雰囲気を読めない、言葉どおりに受け止める、こだわりがある、といったことがアキラにもあります。感覚が過敏で、特にいろいろな音が気になります。やる事が分かっていると安心してできますが、いつもと違うことがあると困ってしまいます。委員会や係など、自分の仕事にはこだわりを持ってしっかり取り組めるけれど、それが気になりすぎて他のことができなくなってしまうこともよくあります。決められたお手伝いなどはよくやってくれるんですよ。
<一般的なアスペルガー症候群の特徴とアキラさんの特性について話してくれました>



周りの皆さんにお願いします。初めてやることや急な変更のときは事前にどうしたらよいか話してあげて。ボーっとしているときや話を聞いてないときは、肩をポンと叩いて声をかけてあげてください。落ち込んでいるときは、そっとしておいてください。そして、アキラのことを理解してもらって、みなさんがアキラのサポーターになって下さい。

アキラみたいな障害のある子のことをわかりやすく紹介した本があるの。読んでみて。

- ・落ち込んだりパニックになったりしているときは、そっとしておいた方がいいんだ。(アカネさん)
- ・お母さんが紹介してくれた本を読んだら、その理由がよく分かったわ。変だなあとと思うことばかり気にしていたけど、アキラさんのよいところもたくさんあるよね。(パートメンバー)
- ・いろいろとうるさく注意するより、さりげなくサポートする方がいいのね。(パートメンバー)
- ・全体に指示を出すときは、アキラさんに一声かけてからにするように心がけてみます。(部長)

お母さんが、自閉症やアスペルガー症候群の理解のための本を紹介してくれました。

「あなたがあなたであるために」(吉田友子著、ローナ・ウィング監修、中央法規) 本人への告知を考える人、アスペルガー症候群の人自身の自己理解に参考になります。

「十人十色のカエルの子」

(落合みどり著、東京書籍)

発達障害全般(学習障害・自閉症・アスペルガー症候群・ADHD等)について語られています。家族、教師、そして自閉症やアスペルガー症候群の子ども自身のために分かりやすい絵で具体的に描かれたガイドラインです。

「光とともに」

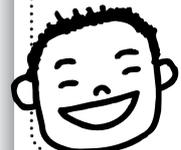
(戸部れいこ著、コミック、秋田書店)

自閉症児とその家族の悩みや喜び、周囲の支えや保育園、小学校での具体的な支援などがコミック版で分かりやすく描かれています。

アキラさんのお母さんからお話を聞いたり、紹介してもらった本を回覧したりすることで、吹奏楽部の友だちはこれまでのアキラさんの行動の理由が分かるようになりました。アキラさんへの対応の仕方についてもお母さんから具体的に話していただき、「吹奏楽部員が、まずアキラさんのサポーターになろう」という気持ちを持ってくれました。また、部活動顧問は、練習予定が確実に分かるようにアキラさん用のスケジュール表を用意し、それを見てアキラさんが安心して練習に取り組めるようにしました。

こうした取り組みをしたところ、部活動の中でのトラブルはほとんどなくなりました。アカネさんにも明るい表情が戻り、アキラさんも今まで以上に熱心に練習に取り組めるようになりました。

やる事が分かると安心できるな。前より部活動の時間が過ぎやすくなった気がする。



●クラスでアキラさんの特性について話し、サポートを呼びかけました

吹奏楽部で生き生きと活動しているアキラさんですが、クラスの中では居づらいときがあったり、アキラさんの言動に違和感をもっている生徒がいたりしました。そこで、学級担任とSRECで相談し、クラスでもアキラさんの特性について話し、みんなの支援を求めていると、保護者に提案しました。

クラスで困っているアキラさんの同級生は・・・

「もう少し静かなクラスだといいなあ」
「冗談でからかってくるのが許せない」
「バレーボールの練習でアドバイスしてくれたんだけど怒られたように感じて悲しくなっちゃう」

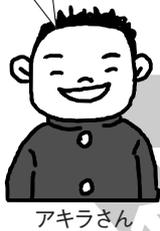


「話しかけても返事をしてくれないことがある」
「急にいなくなっちゃうことがあるのはどうして？」
「音楽や社会は得意なんだな」



●クラスへの伝え方について、担任・保護者・アキラさんで相談しました

僕の気持ちや感じ方を分かってもらって接してもらおうと楽かも。でもどう話したらいいの？



保護者とアキラさん

アキラさん自身の障害理解や自己理解を深めることができるように、親子で話をしたり、親の会主催の活動に参加したりしています。

クラスでは先生から話してもらった方がいいかしら。



本人の気持ちを確かめて進めましょう。

学級担任とアキラさん

クラスの友だちにわかってほしい自分の気持ちや、それをどう伝えるかを話し合いました。

学級担任と保護者

アキラさんの特性、どう接してもらいたいかについて、クラスの友だちへの伝え方などを相談、確認しました。



「アキラさんのよさを伝えたい」
「アキラさんがどんなときに困っていて、どう接するのがよいか伝えよう」
「アキラさんのことを話す前に、障害全般についての学習や自閉症・アスペルガー症候群についての学習がまず必要だ」

主治医の先生にも進め方を相談したところ、「本人の気持ちを大切にしながら進めましょう」というアドバイスがありました。アキラさんと保護者、アキラさんと学級担任それぞれで、アキラさん自身の特性の理解を深める話し合いを重ね、その間に学級担任とSRECでクラスでの授業の進め方を考え、保護者とも相談しました。

その結果、まず、障害全般についての理解を深める授業、次に自閉症やアスペルガー症候群の特性や対応のポイントについての授業、そしてアキラさんについての理解という順で進めていくことにしました。

●クラスで障害理解の授業を展開しました

「『自閉症』って知ってるかな？間違ったイメージを持っている人も多いから勉強しよう。ビデオや本、コミックなどで紹介したものもあるよ」

「自閉症の人も生活しやすくなるためにはどうしたらいいかな？」



学級担任

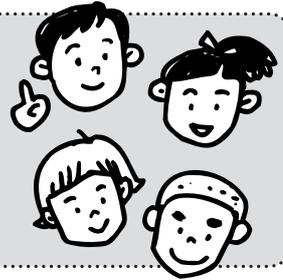
いろんな人たちの「違い」を理解し、認めていかれるようなクラスになってほしいんだ。

「『障害』という言葉から何をイメージしますか？」

「『ノーマライゼーション』の実現のため、私たちは何ができるかな？」

同級生の意見

- ・環境や周りの人の意識が変わることで、障害のある人がもっと生活しやすくなるんだなあ。
- ・障害の原因は何なの？自閉症って治らないの？もっと障害のこと、自閉症のこと、アスペルガー症候群のことを知りたいなあ。
- ・『自閉症』って、暗くて自分の殻に閉じこもっている人ってイメージだったけれど、間違っていたわ。感覚が過敏ってことや、こだわりが長所になることもあるって初めて知りました。
- ・その人の特徴を知った上で、お付き合いしていくことが大切だと思いました。



『障害』と聞いても漠然としたイメージしか持っていない子どもや誤解をしている子どももいました。学級担任とSRECは、自閉症児を紹介した本やテレビ番組のビデオも利用しながら、具体的な姿で自閉症やアスペルガー症候群を理解できるようにしました。授業を通して出てきた新しい疑問などにも丁寧に答えていきました。

●クラスでアキラさんの気持ちや特性について伝え、サポートを呼びかけました

学級担任が「一人一人それぞれいろいろな特性をもっている。それを尊重できるクラスにしたい」という願いを話した後、アキラさん自身から、普段困っていることや、そのときの自分の気持ちをみんなに伝えてもらいました。学級担任は、アキラさんのお母さんが吹奏楽部で話してくれたことをベースに、アキラさんの特性や保護者の思いを伝え、クラスとしてアキラさんをどうやってサポートしていくことができるのかを話し合いました。

「いろいろな音が気になって頭が痛くなるんだ」「冗談が許せないことがあるんだ」「うまくいかないことやトラブルがあると、どうしたらいいか分からなくなっちゃう」「一人で落ち着く場所がほしいことがあるんだ」



みんながアキラさんのサポーターになろう！

友だちの声

「他人事のような気持ちでアスペルガー症候群の勉強をしていたけれど、アキラさんの話を聞いてビックリ。でも自分のできることで協力したい」「感覚が過敏って大変そうだな。雑音を減らしたいけれどできるかなあ」「今まで軽い気持ちでからかってごめんなさい」「おかしいな、わがままかなって思う行動にも理由があったんだ」「アキラさんはアキラさん、一人の友だちとしてつきあいたい」

実際に同級生の中にアスペルガー症候群の人がいるということにビックリしたクラスメートでしたが、アキラさん本人から困っていることを聞いたり、保護者の思いやアキラさんへのサポートの具体例を聞いたりしたことで、「できることで力になろう」という気持ちに変わりました。

自分のことを話した後のアキラさんは、苦手だった体育に友だちと一緒に参加できるようになったり、修学旅行を楽しみに事前学習や係活動に取り組んだり、クラスでの活動に積極的に参加しています。

事例から学ぶ

「社会で生活していく上で、周りからの支援が不可欠」という思いを持っている保護者と連携し、周囲への理解を深める取り組みを進めることができました。教室や部活動での友だち、担任、教科担任、部活動顧問…より多くの周囲の人たちがサポーターとなることで、自閉症やアスペルガー症候群の子どもも集団の中で生き生きと活動できるようになります。

情報交換と記録の積み重ねで一貫した指導を行う

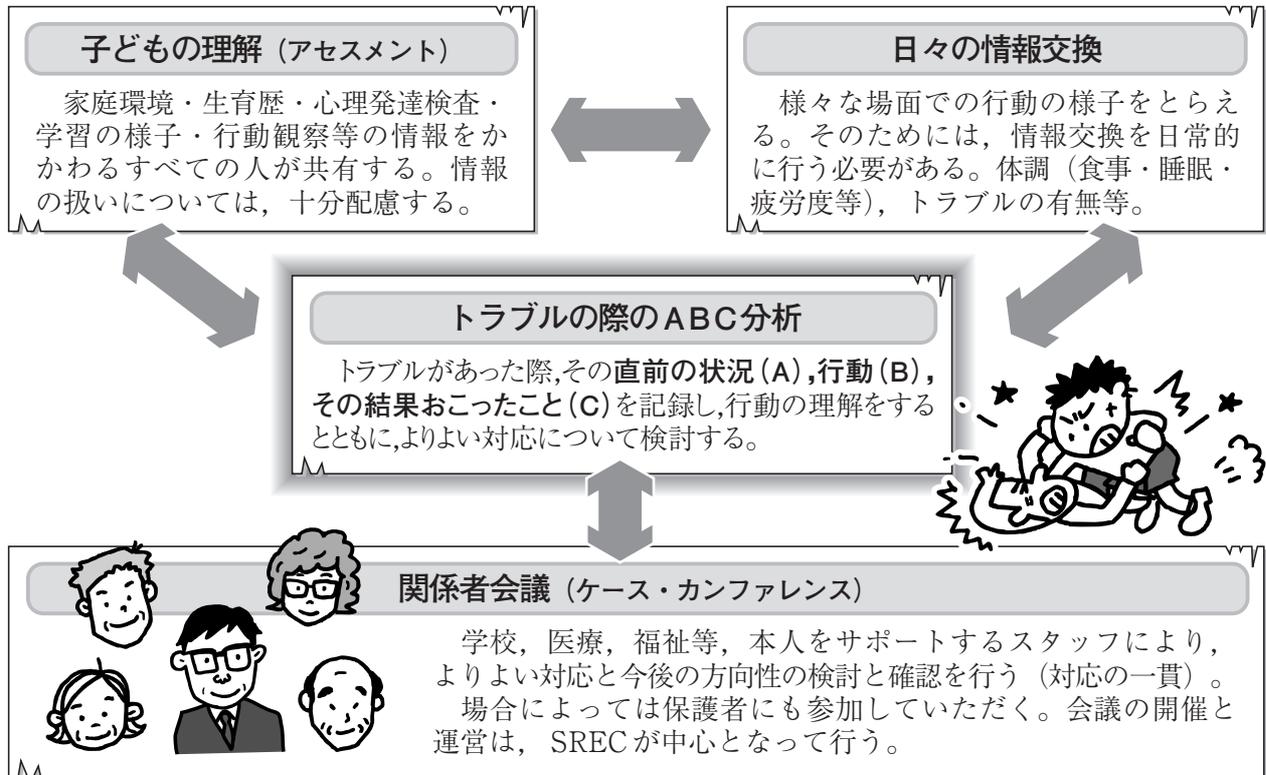
～ABC分析により環境条件を整える!～



子どもたちの問題行動を理解し支援する際、その行動によってその子が環境とどのような相互作用をしているかを調べ、そのかわり方に関係している様々な要因を探し出し、それらの要因のいくつかを変えることによってかわり方を良い方向に変えようとする方法があります。これをABC分析とか機能分析といいます。

教師集団が、日々情報交換を積み重ね行動の分析をすることによって、一人一人の理解を深め、問題を起こさなくてもすむ環境づくりを進めることができます。

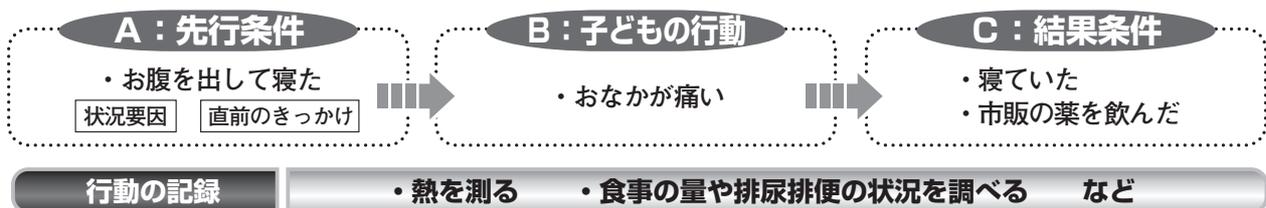
●ABC分析の活用



●行動の記録とABC分析

その子の行動を正確に知るためには、まず記録が必要です。現在の状況について、できるだけ正確に情報を得ます。そして、その前に起こった状況について知る事、その後の対応について知ることが必要です。また、記録は具体的で誰が見ても同じである必要があります。

記録に基づいて仮説を立て、それらに対応する手立てについて考えます。記録はそれらの手立ての効果をはかる物差しにもなります。また記録はその子が間違っただけの指導を受けないための権利でもあります。そして、仮説を立てるために、行動の前後のできごとを考えます。どんな行動も、環境と無関係に生じるものではありません。



A：先行条件

＝行動の手がかりやきっかけ

状況要因とは？…疲労、睡眠不足、といった時間的・空間的に隔たった要因です。直前のきっかけとは？…その刺激があるために行動が起こりやすくなるものです。

B：子どもの行動**C：結果条件**

＝行動の後の対応や結果

結果条件とは？…行動をおこす事で得られたものや消失したもので、行動を維持していると考えられるものです。

ABCを明確にして子どもの理解を進め、かかわり方について見直しをはかります。同じ行動でも、状況によっていろいろな意味があるということが分かってきます。

意味＝機能：感覚刺激、回避、注目、要求・事物の獲得

行動の前の手がかりや行動の後の対応は言葉だけではなく、周りの状況の変化であることもあります。行動の前後の対応を変えることによって、行動は変えることができます。また行動の前の要因に目を向けて、それらが行動に影響を与えていることがはっきりと分かれば、それらの状況事象をよりよい方向に変えておくことも必要となります。

●問題行動に対する援助の具体**1 結果条件に注目する****強化**＝問題行動以外の適切な行動に対しその行動が増えるよう、褒め認める。

例：褒め言葉…よい行動が見られたらささいなことでも褒める。その際は具体的な行動を褒めるようにする。本人にとってわかりやすい言葉で。時にはタッチングを添えて。褒めることを習慣化する。

例：トークン(ご褒美)…目標が達成できたらご褒美を与える。クラスでトークンエコノミー活動として目標を決め、目標数に達したらクラスでのお楽しみ活動を行う等も有効。

消去＝問題行動が生じてもそれに対してはいっさいの対応をせず見守り、それ以外の適切な行動に対して注目したり褒めたりする。(肯定的無視)

例：逸脱行動の機能が「注目ひき」であると判断した時は、相手をしない。側を離れる。声をかけない。

代替行動＝問題行動以外の適切な行動を示し、それを行ったら褒める。

例：外で砂遊びをするかわりに教室で工作をする等、してほしい行動(学習)に参加できない時は、それに替わる活動を自分で決めるようにする。決められない時は選択肢を示す。

過剰修正＝おこした問題行動に関連した、努力を要するよい行動ができるようにする。

例：泥を投げてガラスを汚したら窓ふきをする。いたずら書きをしたら自分できれいに消す。一人ではできない時は、教師も一緒にやる。

タイムアウト＝問題行動をおこした場から離す事で、本人にとって望ましい状況(例えば友だちと遊ぶ)を妨げる。**2 先行条件に注目する**

問題行動を生じさせるようなきっかけを可能な限り提示しない。

例：行事等の際は事前に内容を説明し、不安を取り除く。下見の際などに写真を撮り、事前学習の際視覚情報を与える。自ら行動をしなければいけない場面ではリハーサルを入念に行う。常に人間関係を把握し、座席について配慮する。

3 状況要因に注目する

生理的要因(体の不調、薬効、空腹、疲労等)・物理的環境要因(騒音・高温・部屋の狭さ・気になる物品の存在等)・人的環境要因(好きな人・嫌いな人の存在、先生に叱責されるといったような人とのかかわり方、楽しみな活動が用意されている、嫌な活動がある等)の可能な範囲で調整(適切な行動が生じやすい状況作り)する。

大切なのは情報の共有と一貫した対応です。記録をもとに、その子の問題行動について共通理解し、様々な場面でかかわる大人が一貫した対応を行うことで、環境の変化に敏感に反応する子どもたちにできるだけ安定した環境を提供することができます。



みんなが分かる楽しい授業（小学校）

～障害の理解から具体的な支援へ～

小学校中学年になり、思うように学校生活が送れず、自信を失いがちだったアキオさん。そんなアキオさんに対して担任のタカハシ先生は、アキオさんのために考えた支援の工夫を、授業で繰り返し行いました。タカハシ先生は授業を展開しているうちに、アキオさんのために工夫したことが、実は学級全体にとってもよいことだったということに気づきました。

●アキオさんへの支援がみんなの支援に



カヤマ先生（SREC）、アキオさんの様子を見に来てください

新しく学級担任になったタカハシ先生は、アキオさんが授業に集中できないことが多く、教室を出て行ってしまったり、学級の友だちとトラブルになったりするので、大変心配していました。何とかしたいと思い、まずSRECのカヤマ先生に相談しました。

SRECのカヤマ先生は、教室で行動の観察をしたり、低学年の頃の様子を担当だった先生に聞いたり、保護者と懇談をしたりしました。保護者との懇談から、実は保護者も以前から子育てに悩んでいたということが分かりました。

実は…私たちが心配していたんです。



SRECとの懇談を受けて、保護者はアキオさんと病院を受診しました。そして、医師からも今後の対応についてアドバイスを受けました。

SRECのカヤマ先生は自律学校教育相談に依頼して、一緒にアキオさんの理解に努めるとともに、校内研修会を開催しました。タカハシ先生は、自律教育担当教育支援主事から授業づくりにおけるポイントについて細かく教えていただき、授業づくりに努めました。

支援は授業で勝負！

1. タカハシ先生は、学級会や道徳の時間に、アキオさんの行動の特性について話をするとともに、誰にも得意なこと、苦手なことがあること、「みんなちがっていいんだよ」ということについて、繰り返し話しました。また、タカハシ先生がアキオさんに接するときの姿勢や方法が学級の子どもたちがアキオさんに接する際のモデルとなったようです。
2. これまで話して説明することが多かったタカハシ先生は、視覚的に分かるように提示することを心がけました。プレゼンテーションをしたり、実際にやって見せたりしました。学級生活では、グループ分けに配慮したり、学級の保護者や教師が自然な形で学級の活動の支援に入ったりするようになりました。

このような授業を繰り返すことで、アキオさんは徐々に授業に参加できるようになっていきました。そして、タカハシ先生は、何よりもアキオさんのためにと工夫した支援が、実は個別支援が必要な他の子どもたちにとっても有効な支援であることに気づいたのでした。

●体育の授業におけるアオキオさんへの支援の工夫

- 1 単元名 「キックベースボールゲーム」
- 2 主眼 キックベースボールを始めたばかりの子どもたちが、学習カードを見たり、先生からの説明（学級全体）を聞いたりしながら、ゲームのルールや進め方を理解して、試合を楽しむことができる。
- 3 展開

展開	学習活動	アキオさんへの支援	実際のアキオさんの様子	支援の視点
はじめ	1 準備運動をする。	・ランニングを一緒にやったり、チームのメンバーと同じようにやるように声をかけたりする。（モデリング）	・教師の声がけにより、チームの行動に遅れることなく準備運動に参加できた。	タカハシ先生が大切にしたこと 体験を重視した学習内容の獲得のために ①目標の確認 ↓ ②モデリング ↓ ③リハーサル ↓ ④フィードバック ↓ ⑤定着化 この①から⑤のサイクルの繰り返しにより、実際のスキルを身に付け自信がつくとともに、学習の楽しさも味わえると考えました。
	2 ルールの確認をする。	・打った後はコーンを指して走ること、コーンを回ってホームベースに戻ってくることを具体的に示して確認する。（目標の確認、モデリング） ・とったボールをアウトフィールドに持っていくこと、投げても走ってもいいこと、アウトと叫ぶことを確認する。（目標の確認、リハーサル）	・教師の動きを見ることにより、打った後、どうすればよいか分かり、次の活動を予測して動くことができた。 ・アウトの仕方が分かり、実際にアウトフィールドにボールを運ぶことができた。	
なか	3 試合を行う。	・打ったときはコーンを指して走るように声をかける。 ・強いボールが来ない位置を守るように配慮する。 ・好プレーができたときは褒め、自信がもてるようにする。（フィードバック・定着）	・友だちの声がけにより、ボールを蹴ることができ、コーンを目指し走ることができた。 ・表情もよく楽しく活動していた。	
		4 まとめをする。	・具体的なプレーの姿を示して賞賛するようにする。（フィードバック） ・全力プレーしたことを褒め、その上でどうすればうまくできるか、助言する。	

事例から学ぶ

担任が周りに相談できたのは、校内で研修会が開催され、その必要性が共通理解できていたからでしょう。また、本事例のように、授業を充実させることが有効な子どもの支援になります。これは特定の子どもへの支援のためだけに行われるのではなく、実は学級全体の支援になっているのです。

最初は、一人のために特別なことをやっているんじゃないかと気が重くなったのですが、やってみると、みんなの学ぶ環境を整えることになると分かり、気が楽になりました。



タカハシ先生

少人数で取り組む算数の授業(小学校)

～自律教育のノウハウを生かして～

算数の少人数学習については、習熟度別になっている学校が多いかと思います。本校でも、習熟度別にコースを設けています。基礎的な内容を扱う「基礎丁寧コース」には、LDやADHD等の診断を受けているお子さんや、診断は受けていないが支援が必要なお子さんがたくさん学習しています。

本校では、今まで自律教育で培われてきた支援方法を取り入れて、支援の必要なお子さんが「分かる喜び」を味わえるよう、学習指導に取り組みました。

●TT(ティームティーチング)を組むために、時間割を工夫しました

支援が必要なお子さんの学習指導はTTが有効だと考えていますが、TTを組むのはむずかしい現状にあります。それでも、何とかTTが組めるようにならないかということで、新年度準備の折に、人と時間が生み出せるよう時間割を考えてみることにしました。

今年は情緒障害自律学級に在籍しているヨシオさんが算数を「基礎丁寧コース」で受けるようになっていましたので、情緒障害自律学級担任のオノ先生がサブティーチャーとして支援に入るように考えました。そのために、ヨシオさん以外の子どもたちが原学級で学習する時間をまとめ、その時間に「基礎丁寧コース」の支援に入れるよう、時間割を調整しました。

●まず、子ども理解から始めました

オノ先生は、コースにいる子どもたちがどのような所で支援が必要なのか、よく観察しました。

ユキオさんは、服薬しているけど、どうしても学習に取り組めない日があるよね。

サトルさんはいい意見も出せるときもあるけれど、忘れ物が多くて学習になかなか取りかかれないね。

ケイさんとサヤさんは一生懸命取り組んでいるけれど、九九がまだ十分定着していないみたいね。



カズヤさんは、板書を写すのが苦手で、なかなか取りかかれないね。

シズカさんは自信がないみたいで、不安が強く、なかなか次の問題に進めないね。

ダイキさんとヒロさんは、理解は早いけれど問題を解き終わると席を離れてしまったり、二人でおしゃべりを始めてしまったりして、次の活動に移れないね。

●日常的に、情報交換を行いました

情報交換は授業終了後、担当二人で黒板を消したり机を整えたりしながら、短時間で行います。その日の授業で気付いたことはその場で話して共有化し、記録しておくようにします。また、実施したテストや学習カードの内容も丁寧に分析して、つまづきを確認しました。

●子どもに応じた支援を取り入れました

フラッシュカードの活用

フラッシュカードに問題を書き、授業開始時にテンポ良く提示して見せました。子どもはカードに集中し、その後の授業への取り組みも良かったように思います。

フラッシュカードはテンポ良くめくることができるように、滑りの良い厚紙で作ったりラミネートしたりしました。

単元に入る前に既習事項を確認！

ドリルの時間等を利用して、次の単元の学習に必要な既習事項について、理解の状況をチェックしました。理解が不十分な場合は、フラッシュカードで使用して確認をしてから、単元に入るようにしました。

単元後も繰り返し復習！

理解するのがゆっくりな子どもたちなので、授業の中だけではなかなか定着できません。繰り返し復習していくことで、理解が深まります。単元終了後も、フラッシュカードで繰り返し復習することで、定着を図ることができます。

ミニプリントの利用

課題がすべて終わってしまった子どもには、丸付けをしながら別の課題を1問ずつ印刷したプリントを渡し、時間のすきまができるようにします。1問だと抵抗も少なく、子どもも喜んで取り組みました。切り替えが苦手な子どもも、これならスムーズに切り替えができます。

丸付け

教師が机間指導しながら、その場その場で素早く丸を付けていきました。丸をもらうとどの子どもも喜び、自信を持って次の課題に取り組みました。また、理解が不十分な子どもは回答しているときにかかわることで、つまずきが発見でき、必要な支援をすることができました。

手順の言語化

特別な教育的支援が必要な子どもたちの中には、図形の見方や理解が苦手な子がいます。学級担任と連絡を取り合い、単元に入る前に「図形の見方・書き方」の手順を言語化して支援するのも有効です。

座席の工夫

学級の座席と違って生活班を考慮しなくても座席を組むこともできるので、学習のしやすさを優先して座席を組みました。

- ・板書を写すのが苦手な子は前へ
- ・互いに刺激になりやすい子は離して
- ・自信のない子のそばにはモデルになる子を

忘れ物対策

算数の授業に必要な物は、教科書ノート等**全部かごに入れて**教室に置くようにし、かごに筆箱だけ追加して教室移動すればよいようにしました。

事例から学ぶ

情緒障害自律学級担任がTTの一人として学習指導に入り、自律教育のノウハウを生かして支援していくことは、特別な教育的支援が必要なお子さんだけでなく、すべてのお子さんの学習支援にも有効です。集中を高める方法として、他にも興味関心を引く教材・教具を準備する、時間を計ってゲーム感覚で行う、使わないものは必ず片付けておく等がありますが、これらのことは、実は自律教育のみでなく、すべての授業においてポイントとして配慮していなければいけないことだと思います。

事例 13

みどころ



通常の学級で担任が取り組む支援のあり方(小学校)

～日常的に取り組める支援の実際～

特別な教育的支援が必要な子どもたちが、通常の学級に何人も在籍するといったケースが増えてきました。通常の学級の担任からは、支援したいという気持ちをもっていても、「どうしてよいのか分からない」「なかなか忙しくて勉強している時間がない」といった声を聞きます。そのため、なかなか具体的な支援に結びついていない現状があります。

これは、ちょっとした支援のポイントを大事にして日常の中で取り組んだ事例です。

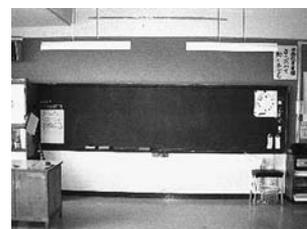
●通常の学級の中でできる支援

○担任

- ・ 思いを伝えたいときのブロックサインを決める。
- ・ 「がんばりカード」を作る。
- ・ 用件は端的な言葉で伝える。
- ・ その場その場で、タカシさんの気持ちを代弁する。
- ・ 教科書・プリントは拡大して表示する。
- ・ 「個別の指導計画」を作成する。

○教室環境

- ・ 集中しやすい教室環境にする。
- ・ タカシさんの座席は、前から1列目か2列目にする。
- ・ 黒板の周りの掲示をできる限り取り除き、シンプルにする。



○タカシさん

- ・ 絶対に友だちに悪口を言ったり、暴力をふるったりしないことを約束する。
- ・ がんばったことを「がんばりカード」に記入する。



タカシさん

○タカシさんの保護者

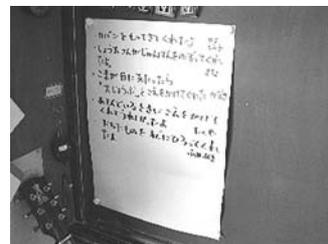
- ・ タカシさんの学校での様子を伝える。
- ・ 学校と家庭の連携の仕方について共通理解をする。
- ・ 「がんばりカード」に記入する。

○学級懇談会

- ・ タカシさんの保護者に許可をいただき、タカシさんのことを話題にする。
- ・ タカシさんがトラブルを起こした時の対応の仕方について共通理解をする。

○友だち

- ・ タカシさんとトラブルが起きた時の対応の仕方について考える。
- ・ タカシさんの得意なことや苦手なことを知り、タカシさんの支えとなれるようにする。
- ・ タカシさんのいいところを見つけたら、黒板に掲示してある紙に書く。



たくさん書かれたいいところ

とにかく、担任は一人で抱え込まないように、同僚や専門家にどんどんと相談しました。

●学級集団を育てる

いろいろな子どもを受け入れられる許容量が学級集団になれば、問題を起こしがちなタカシさんをクラスの中で支えることはできません。そこで、「対人関係ゲームプログラム※」を学級で行ったり、お互いの良さを見つけ出す活動を取り入れたりすることを通して、一人一人の違いや良さに気付いたり、お互いが譲り合うことの大切さを知ったりする活動を積み重ねてきました。

●タカシさんの「いいところ探し」

タカシさんは人なつこく優しい面があるものの、友だちに悪口を言ったり、暴力をふるってしまったりすることから、友だちからの印象が悪くなりがちです。そこで、教室の黒板の傍らに、タカシさんの好きな色の画用紙をはり、「タカシさんの『良い心』を応援しよう。いいところを見つけたらここに書いて下さい」とクラスの子どもたちに話をしました。

タカシさんが、何かトラブルを起こしてしまった時など、この画用紙を見せながら「君には、こんなにたくさんの『良い心』とそれを探してくれる友だちがいるじゃないか」と話しました。どんな話をするよりも、この画用紙を見せることが、タカシさんの心に言葉が届くようでした。

コラム：「二つの心」

どんな人の心にも「良い心」と「悪い心」があると子どもたちに話しています。例えば、悪口を言った子がいたとすると「○○ちゃんは『悪い心』が勝っちゃったんだね」「みんなで『良い心』を応援しよう」と声をかけます。そうすることで、その子の存在を責めずに、その子の心のあり方に目を向けてくれました。

●担任が配慮したこと

- ・タカシさんが叩いたり悪口を言ったりする行為をうれしいと思う子ども（保護者）はいません。何より本人も傷つきます。こうした行為についてはないがしろにせず、きちんと対応してきました。
- ・タカシさんの気持ちが友だちに伝わりにくい時は、その場その場で気持ちを代弁しました。
- ・できる限り人前で注意することは避けるようにしました。あらかじめタカシさんとブロックサインを決めておき、2人の間だけで分かるようさりげなく伝えました。
- ・タカシさんが、うまくできないことをタカシさんにだけ求めるのではなく、「クラスみんなの支えが必要なんだ」と話し、友だちからの配慮も必要でだということを、子どもたちに伝えてきました。

●「がんばりカード」

家庭で心がけてほしいことや、その月の課題となる内容を3つ選び、担任の方で「がんばりカード」に記入しておきます。保護者はがんばったことを中心に評価を記入します。それについて、担任もコメントを書いて返すようにしました。

日付	1/2	1/3	1/4	1/5	1/6	1/7	1/8	1/9	1/10	1/11	1/12
目標の行動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
達成状況	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
がんばりポイント	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コメント											

「がんばりカード」

事例から学ぶ

特別な教育的支援を必要とする子どもたちを通常の学級の中で支援するためには、その子の「セルフエスティーム（自尊感情）」をいかにして高めるか、そのための子ども同士の関係作りをどのように構築していくかが重要です。友だちを前向きにとらえようとする低学年からの取り組みが特に大切です。

※「対人関係ゲームプログラム」…学級集団の人間関係づくりのための技法。対人関係ゲームで体験した他者とのふれあいがきっかけとなって、日常の学級生活場面で行動が変化することが確かめられている。
【参考文献】「対人関係ゲームによる仲間づくり」田上不二夫編著：金子書房



ポイントカードとマニュアルによる分かる状況づくり(小学校)

～社会的ルールを「見えるもの」「関心のもてるもの」に～

高機能自閉症、アスペルガー症候群等、人とのかわりが難しいタイプの子どもの場合、社会的ルールを自然に身につけることができにくいので、自分の興味のままに行動してしまったり、周囲との間でトラブルを起こしてしまったりしがちです。

タロウさんには、ポイントカードを利用し「やるべきこと」でポイントを稼ぎ、稼いだポイントを使って「やりたいこと」をするというシステムを、学校・家庭の生活に導入してみました。また、生活・行動上の課題について、その場面ではどのような行動をとることがよいのか、マニュアル（指針となる文書）を作りました。こうして、「分かる状況づくり」（情報環境の整備）が進むにつれて、学校でも家庭でもより意欲的に安定した生活が送れるようになりました。

●ポイント制の導入

タロウさんは、パソコンを使うことが得意です。そこで、漢字の学習などにパソコンを用いていましたが、学習が終わった後で、インターネット上のゲームサイトにアクセスして遊ぶことが楽しみになりました。ところが、好きな活動だけにはまってしまいやすく、パソコンでのゲームの時間がついつい延びてしまいがちでした。そこで、活動にめりはりを付け、学習・仕事と遊びとのバランスを取るために、SRECからの提案でポイント制が導入されることになりました。

これは、学習・仕事で稼いだポイントに応じて、パソコンの時間が許可されるというものです。本人との協議の結果、ポイントの単位には、「分」を用いることになりました。一つの学習・仕事は、その分量に応じて5分または10分と評価されます。例えば、計算ドリルの1ページは5分、漢字学習ソフトの1問（10題）は10分といった具合です。そこで稼いだ時間（分）だけ、パソコンを自由に使えるのです。

初めは、1校時の前半で稼いだ分を後半で使うという形でした。しかし、パソコンの時間がついつい延びてしまい、稼いだ分を超えてしまうことが出てきたため、その超過分はマイナス（借金）として翌日に繰り越すことにしました。

●プラス・マイナス累計のポイントカード型評価へ

このように、実情に応じて改良を加えるうちに、ポイントの扱いは、その場限りのものから、しだいに累積的なものになっていきました。当初、翌日に繰り越すのはマイナス（借金）だけでしたが、これについては、本人から不満が出されました。つまり、マイナスだけでなく、プラス（貯金）も翌日に繰り越してほしいというのです。言われてみればもっともな意見で、その方が社会のルールにも合っています。また、その場限りでない継続性のある生活づくりを進めていくためにも、その方がよいと思われました。

そこで、ポイントのプラスもマイナスも翌日以後に繰り越すことにし、本人の判断で貯めたり使ったりできるようにしました。まさに、小売店や企業が顧客に対して発行する「ポイントカード」のようなシステムです。右図のような予定表の右側に、ポイント欄を設けて、そこに、ポイントの増減の記録と累計を記入していきます。

いろいろな場合に応じたポイント数については、本人と協議の上あらかじめ決定し、ポイント換算表（資料1）にまとめました。原則として、この表を基準にポイントの加減を行います。換算表にない事柄については、その都度事前に協議して決めることにしました。

今日の予定					ポイント(分)	
月 日()					スタート: 分	
時間	場所	内容	担当	サイン	増減の記録	累計
朝	自律学級	朝の会	学担			
	体育館・校庭	全校活動	SREC			
1校時	保健室	お話	養護			
	体育館・校庭	遊び	自担			
2校時	自律学級	算数	自担			
2休み						
3校時	自律学級	国語	自担			
4校時	職員室	お手伝い	教頭			
給食	〇年〇組	当番・食べる	学担			
昼休み						
清掃	職員室前廊下	ぞうきんがけ	SREC			
5校時	教育相談室	つくる活動	学生			
6校時	教育相談室	つくる活動	学生			
帰り	自律学級	帰りの会	学担			
<下校後の生活>						
時刻	内 容		サイン	増減の記録	累計	

ポイントカード型の予定表

●学校—家庭連携のポイントカードに発展

このような学校での取り組みに呼応して、家庭でもポイント制が取り入れられました。例えば、小さな手伝い一つで〇一つ、ちょっとまとまった手伝い一つで〇二つ。そして、〇一つ当たり、ゲームかテレビの5分、または小遣い20円と交換できるというものです。

学校と家庭が同一歩調で歩み出したので、S R E Cが、学校と家庭の垣根を取り払い、学校で稼いだポイントを家庭で使うことができるようにすることを提案したところ、タロウさんは大いに乗り気でした。そこで、保護者と協議した上で、1分＝4円というレートを決めました。これは、学校での軽微な仕事と家庭でのちょっとした手伝いが、ともにゲーム5分に相当し、また、家庭では、ゲーム5分と小遣い20円が等価だったことから算定しました。

このレートに基づいて、学校・家庭共通のポイントカードがスタートしました。前掲の予定表で、いちばん下に「下校後の生活」とあるのは、家庭での記入欄です。この改定によって、サイン帳は学校と家庭の間を行き来することになりました。それによって、タロウさんは、学校で稼いだポイントを、家庭で小遣いに替えたり、家庭で稼いだポイントを、学校でパソコンの時間に使ったりできるようになりました。更に、このような学校—家庭連携のポイントカードになったことによって、学校—家庭間の連絡がより密になりました。

●ポイントカードの効用—コミュニケーション・ツールとして

例えば、タロウさんは、学校の廊下を歩くときに、いつも手製の「剣」（竹ざお、ボール紙の芯などに手を加えた棒）を持ち歩いていました。それに対して、「何やってるんだか」と冷ややかに見る子どもや、よけたり怖がったりする子どももいました。本人のためにも、周りの子どもたちのためにも、この行動はやめさせた方がいいと思われました。

そこで、ある教師が、「棒を持って廊下を歩くのはやめなさい」と強く迫り、棒を取り上げようとしたのですが、タロウさんは満身の力を込めてそれに抵抗しました。結局、悪戦苦闘の末に棒を取り上げたものの、次の日にはまた別の棒を持って歩いている始末でした。

ある日、別の教師が、棒を持って歩いているタロウさんと行き会ったときのやり取りです。

「この学校で、棒を持って廊下を歩いている人、君以外にいる？」

「いない。ぼくだけ」

「そうか。じゃあ、特別許可が必要だね。1回50ポイントということで、どう？」

「ええ！そんなに高いの？そりゃ大変だ！すぐ置いてくる」

そう言って、自分の教室に急いで棒を置きに行った次第です。

●ポイントカードを補完する生活・行動のマニュアル

その後、タロウさんは、保健室の物品を無断で持ち出し、自分の黒いカバンに入れて持ち歩くという事件を起こしました。すぐに謝って返したものの、その後も、自分の持ち物からお気に入りの品を、黒いカバンに入れて持ち歩くことが続きました。学校の行き帰りだけでなく、常にひしと抱きかかえて歩いており、前には無断で持ち出した物品を入れていたこともあっただけに、その黒いカバンは、特に職員からは不審の目で見られることになりました。

そこで、個別指導の時間に、黒いカバンをぶら下げて歩いていると、先生や友だちから「何かよからぬ物を持ち歩いているのでは」と怪しまれることを伝え、より受け入れられやすい行動としては、中が見える小さな手提げ袋に自分の持ち歩きたい物だけを入れて歩くことよいことを話しました。話し合ってから確認したことをその場で文書にしたところ、それを受け入れ、その後は手提げ袋が定着しました。

このように、生活・行動上の課題について、担当教師と話し合いながら作成する指針の文書は、生活・行動のマニュアルとすることができます（資料2）。その中には、どのような行動を取ることがよいのか、そうすると周りの人がどのように感じ、本人にどのようなメリットがあるのか、本人の生活上の関心事と関連付けて書かれています。

事例から学ぶ

発達障害のあるお子さんへの支援では、脳の働きという特性を考慮し、想定される心の障壁を取り除こうとする「心的バリアフリー」のアプローチが不可欠です。心の障壁には、感情面のあつれきだけでなく、認識面の「分らなさ」もあります。

「分かる状況づくり」（情報環境の整備）としては、ポイントカードや生活・行動のマニュアルなど、社会的ルールが見える形にして提示し、本人の生活上の関心事と関連付ける手法が有効です。



ポイント換算表

200X年X月版

【ポイント増】+ (プラス)

学習・仕事	1件	+	10分	ドリル +5分 +3分
	ボーナス	+	5分	
○年○組の授業に参加	参加した時間(分)			
全校活動に参加	列に入って参加		参加した時間×5(分)	
〃	会場内で参加		参加した時間(分)	
〃	会場隣で見学		(最低限ノルマ)	± 0分
★家庭学習(ドリル)	1ページ	+	5分	
★お手伝い(小)洗濯物取り込みだけ等		+	5分	
★お手伝い(大)ごみ捨て,洗濯物たたみ(仕舞うまで)等		+	10分	

【ポイント減】- (マイナス)

<ポイントと交換するもの>

コンピュータ,ゲーム	やった時間(分)		
布粘着テープ(ガムテープ)	1巻	-	125分
セロテープ・両面テープ	1巻	-	50分
棒の携帯	1回	-	50分
模造紙	1枚	-	15分
画用紙	1枚	-	10分
プリンタ用紙	1枚	-	1分
★お小遣い	4円	-	1分

学校だけでなく,家庭でのポイント換算基準(★)も載っています。

※ 当面のレートは,1分=4円とする。

★レジャー(釣りなど) 交通費・入場料(円)または所要時間(分)

※ レジャーをいくらに査定するかは,お母さんと話し合って決める。

<ポイントで貸すもの>

自律学級教室家賃	1週	-	125分
※ 学期末など,半端の週は,25分×日数で払う。 ※ もし家賃が払えない場合は,○年○組で過ごす。			
使うと減る材料の類(のり・テープなど)	1日	-	10分
	返したら		5分バック
使っても減らない道具の類(はさみなど)	1日	-	10分
	返したら		10分バック

<ペナルティー>

サイン欄のサインなし(空欄)	1回	-	5分
無断使用物品,学習不用物品	1品	-	10分
PC不正使用,無断入室,廊下徘徊	1件	-	150分
予定外行動	捜した時間×人数(分)		

200X年X月X日

これでよしになったら,本人が認めサインをします。

サイン

資料
2ふしんしゃ
不審者

「不審者」とは、何をやるか分からない、怪しい人のことです。悪いことをするかもしれないと、思われている人です。

例えば、黒いカバンをぶら下げて歩いていると、何か見られたくない物を隠し持っていると思われ、怪しいやつ、つまり不審者と見られてしまいます。



不審者にならないためには、黒いカバンをぶら下げて歩くのではなく、口の開いた小さい手さげぶくろに、自分の小物だけ入れていきましょう。



そうすれば、「入れているのは自分の小物だけです。不審な物は持っていませんよ」と言っているようなものですから、先生に呼び止められて、「中を見せなさい」と言われることもありません。



黒いカバンをぶら下げて歩くなど、「不審な」行動をとったときには、廊下徘徊、PC不正使用と同じ150 (分) となります。

▶自分が他の人からどのように見られているか、または見られそうなのか、インパクトのあるタイトルを工夫して記述しました。

▶Aではなく、Bというように、とってはいけない行動だけでなく、とるべき行動を明記しました。

▶不適切な行動 (A) をとるとどのようなデメリットがあり、適切な行動 (B) をとるとどのようなメリットがあるのか、ポイントにも触れて書きました。

集団行動

「集団行動」とは、たくさんの人の中に入り、並んで話を聞いたり、いっしょに活動したりすることです。

全校体育、全校音楽、運動会などの活動は、集団行動です。将来、大学に入ると、大勢の人が集まる場面がたくさんあります。そのために、これらの活動に参加して、今から集団行動に慣れておくことは、とても役に立ちます。

〈大学のキャンパスライフ〉

※大勢の人が集まる場面がたくさんあります。



授業 (〇〇大学〇〇学部)



授業 (〇〇大学)



入学式 (〇〇大学)



学生食堂 (〇〇大学)



学生食堂 (〇〇大学)



入学式 (〇〇大学)

- ▶列に入って参加すると 参加時間 (分) × 2.0
- ▶列の後に参加すると 参加時間 (分) × 1.0
- ▶列の外で参加すると 参加時間 (分) × 1

列に入って10分以上いたら、たこ焼き。

▶課題となっている行動に、適当と思われる名前を付けてタイトルとし、冒頭で定義しました。

▶タロウさんの場合、将来、大学に行きたいという希望を述べています。また、当面、たこ焼きを作りたいという願いをもっています。そのような本人の関心事を、集団行動の練習を積み重ねる意義、それを成し遂げたときのご褒美として、関連付けて記述しました。

事例
15

自律学級での支援を通常の学級での指導につなげる(小学校)

～「連絡ノート」で支援方法を共有～

自律学級に在籍する5年生のカズオさんは、好きなビデオは大きな音でも平気ですが、耳慣れない音楽は耳をふさいで嫌がります。音楽の練習や音楽会への参加が大きな課題でした。新しく原学級担任になったタナカ先生もカズオさんの行動を理解しようと一生懸命でしたが、自律学級担任のハヤシ先生との連絡・相談の時間はなかなかとれず、毎日が試行錯誤の連続でした。そこで、互いに時間の取れるときに気軽に連絡し合えるようにと、「連絡ノート」を用意して連携した事例です。

図工でカッターを使うんだけど、カズオさん、だいじょうぶかしら。

給食当番もやってほしいけど、みんなと一緒には無理かしら？

朝の歌が始まると自律学級に帰っちゃうけど、歌が嫌いなのかなあ。

音楽会ではカズオさんにも一緒にステージに立ってほしいけど、どうやったらいいの？

タナカ先生

ハヤシ先生

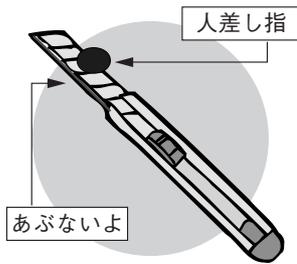
原学級での学習内容や課題、タナカ先生が困っていることが具体的に分かれば、ヒントぐらいは出せるんだけど。今日も放課後は出張で、ゆっくり話をする時間がとれないなあ。

何かいい方法はないかな？

「連絡ノート」を用意し、時間のあるときに記入して、連絡を取り合うことにしました。

() 月 () 日 ()

教科・単元名	<児童の様子> 次回はカッターを使って工作用紙を切ったり、模様を切り抜いたりする予定です。下絵は友だちと一緒に大好きな電車を描き、ご機嫌でした。 ▶カッターは、一人で使わせても大丈夫でしょうか？
図工	
<自律学級担任から> *時間いっぱいクラスで楽しく学習できたようで、ピョンピョン跳ねながら帰ってきました。カッターはどこにどの指を置いて握ればいいのか、刃の部分は危ないことが視覚的に分かるように、シールをはったり色をつけたりして示すと、理解しやすいかもしれません。こちらでも扱えそうなら事前にやってみます。	



ポイント1

◆「原学級での様子が分からないので教えてください」と自律学級担任から問い合わせるところから始めました。

ポイント2

◆始めから毎日書こうとすると、息切れしてしまうので、「書けるときに書こう」という気軽な気持ちでやりました。これが長続きするコツだと思いました。

ポイント3

◆1枚プリントでやり取りするのもよいのですが、ノート形式にすれば、指導の経過や支援の方法が形に残るので、保護者と懇談をする際の貴重な資料となりました。



「連絡ノート」を活用したカズオさんへの支援の実際を紹介します。

音楽会に向けての支援

支援 1

◆カズオさんが友だちと一緒にスタートラインに立てるように、活動の意味を伝える支援をしました。

タナカ先生→ハヤシ先生

朝の会でも、合唱曲の練習をしているけれど、一緒に歌ってくれません。
この曲が嫌いなのかしら？

「連絡ノート」

ハヤシ先生→タナカ先生

なぜ毎日練習するのか（意味）が理解できていないのかもしれませんが、音楽会で歌う曲であることを、説明しておきます。



タナカ先生→ハヤシ先生

全校での合唱曲とクラスの発表曲を、カセットテープに吹き込んで持たせますね。



カズオさん

タナカ先生が作ってくれたカセットテープを、お母さんと出かけるときも車の中で聞いていたカズオさんは、すぐに覚えることができました。家でも自分から口ずさむなど、楽しむ姿が見られるようになり、学級や音楽の時間にも、一緒に参加できるようになりました。楽器の練習にも意欲的に取り組めるようになりました。



音階ごとに色を変える

支援 2

◆楽譜にも鍵盤ハーモニカにも、音階ごとにシールの色を変えてはり、視覚的に分かるようにしました。指番号を併用すると分かりやすそうだと母親から連絡があり、相談しました。

支援 3

◆「①歌 2回、②合奏 2回、③〇時〇分になったら終わりです」と、カズオさんに予定をあらかじめ伝えておくことで、ステージ練習に最後まで参加できるようになりました。

事例から学ぶ

自律学級に在籍する児童が通常の学級で共に学習するときには、自律学級での支援方法をどのようにして通常の学級の支援に生かしていくことができるか、伝えていくことができるかがポイントです。

また、その効果的な支援方法を原学級担任だけでなく専科、クラブ・児童会担当の先生方等保護者も含め、その子にかかわるすべての人たちと共有できると、本人の安心と自信につながり、生活がより豊かなものになりそうです。

事例
16

みどころ

「親子の会」で元気いっぱい(小学校)

～語り合える場・分かり合える仲間と、子どもたちの集団保障を～

様々な困難を抱えている子どもの保護者は、「我が子の姿をどう受け止めればいいのか」「我が子にどのようにかかわっていけばいいのか」「誰にも分かってもらえないのではないか」といった悩みを一人で抱え込みがちです。子どもも地域の子どもの集団にうまくなじめない場合が多く、そのために放課後や休日の生活の場が限られがちです。そんな親子が集まって、色々なことにチャレンジし始めました。お母さんたちは自分の思いを語る場を見つけ、子どもたちはボランティアのお兄さんやお姉さんと様々な活動をして楽しむ場となりました。

そんな「親子の会」には、毎回様々な親子が元気をもらいに来ています。



近くの学校で「発達障害」をテーマにミニ講演会が開かれました。すべての保護者に紹介するとともに、SRECがナカジマさんやカサイさんを講演会に誘いました。カサイさんは都合をつけて聞きに行きました。会場で同じ学校のお母さんたちを見つけ、ホッとした顔になったカサイさん。

講演会が終わったその場で、井戸端会議が始まりました。そのうちに、カサイさんの目から涙がこぼれてきました。

「『悩んでいるのは自分一人じゃない』とホッとしました。あのお母さんたちともっと話をしたい」

- ・放課後や休日の子どもの遊び場がほしいんです。
- ・地域のサークルにもなかなかなじめない子どもたちの遊びの場を作りたい。
- ・集団遊びができるようにしてあげたい。

作ってしまおう！「親子の会」



子どもたちグループは学生さんや先生と集団遊び！ 親グループは話し合いと学習会！



ナカジマさんにも声をかけてもらえないかしら。



「親子の会」結成

月に一回・土曜日の午後・会場は学校

信頼し合える関係づくり

～みんなが先生 みんながリーダー～



- ・「みんなで解決していく気持ち」を大事にしました。
- ・「同じ悩みをもった仲間である」という気持ちを大事にしました。だから何でも話せます。
- ・運営は保護者が中心になって進めました。

- ・相談室と体育館をキープしましょう。調理室も良いですね。
- ・何かあったらいつでも職員室にどうぞ。
- ・学校施設の借し出しや連絡は学校に任せてください。遊具も借りてきましょう。



ゆっくり語り合ってください。子どもたちはしっかり預かります。

☆活動メニュー

- ・体育館でサーキット遊び
 - ・プールで水遊び
 - ・簡単お菓子作り 等々
- 「集団での活動」にこだわらず、誰もが無理なく参加できる内容を用意しました。



今日は何して遊ぼうか？

テーマを決めて学習も…「三人よれば文殊の知恵」だ！

- ・「知は力」。正しい知識，正しい情報を学びます。
- ・我が子の姿をよく知ることが，適切な対応につながることを信じて学びました。
- ・「我が子の小さな変化に気づける親でありたい」と思いました。
- ・交替で学習のリーダーにもなります。

子どもたちの様子は，保護者に口頭で伝えます。



事例から学ぶ

保護者の方々の困り感を的確にとらえ，保護者支援をすすめることが大切です。一人で悩みを抱え込んでいる保護者の方も少なくありません。本事例のように，保護者の方々がお互いに支え合う場をもつことは，大変有効な支援となります。お互いの経験を語り合ったり，子どもへの適切なかわり方のヒントを得たり，新しい情報を得たりすることができるとともに，心の支えとなります。本事例の学校のように，保護者の方々の主体的な動きを支援していく姿勢がよいと思います。

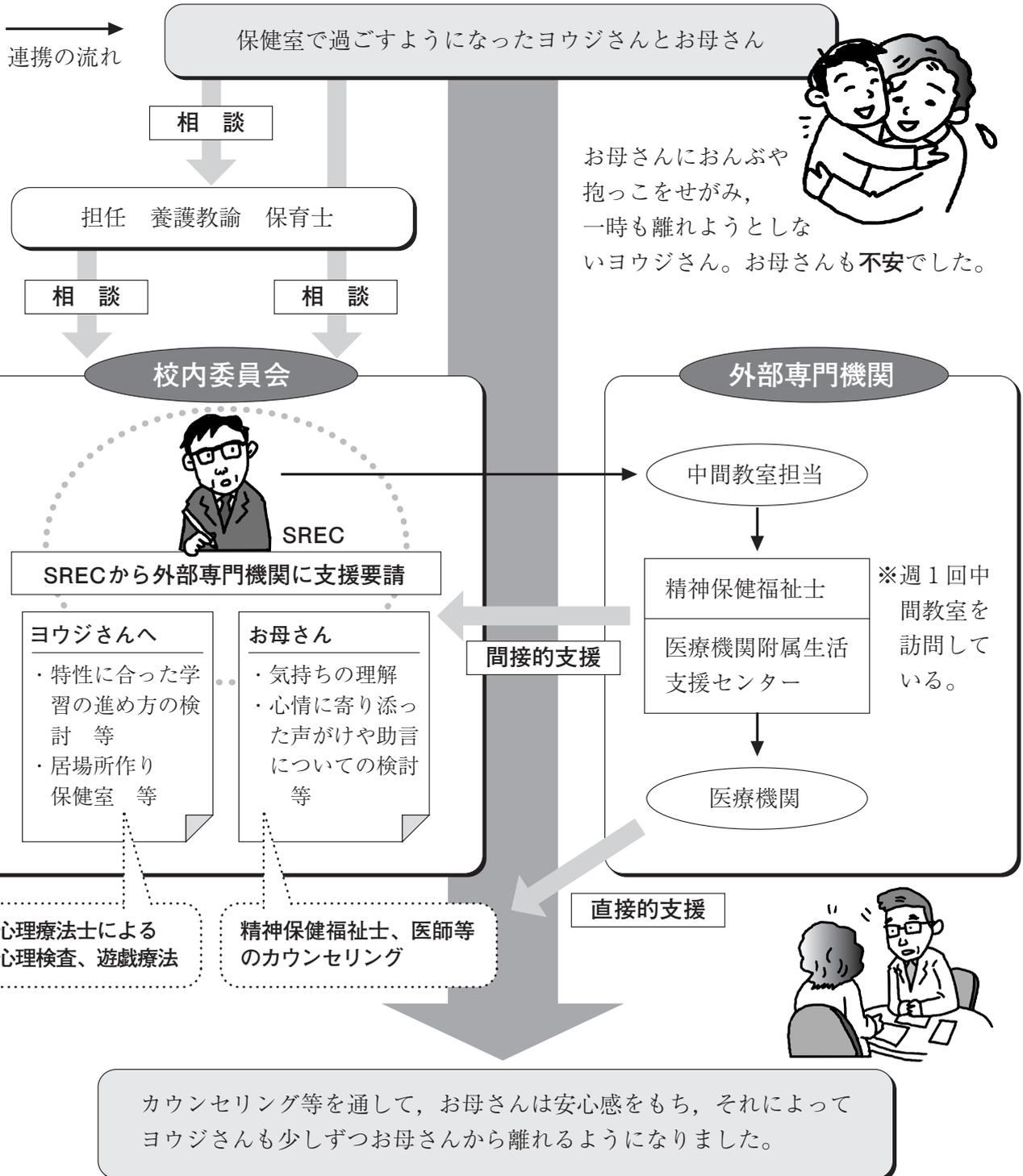
保護者の方からは，「保護者同士の支え合いで，孤独感から解放されました」「学校を超えた子ども同士のつながりができてうれしいです」などのご意見が聞かれました。

事例 17

外部機関との連携を生かした支援(小学校)

～保護者への支援が子どもを変える～

2年生の夏休み明けから教室へ入れなくなり、お母さんと保健室で過ごすようになったヨウジさん。SRECが中心となり、校内委員会でヨウジさんへの支援の検討が始まりました。検討を重ねるうちに、お母さんを支援することがヨウジさんにとっての重要な支援ではないかということが分かってきました。しかし、校内委員会だけでは支援の糸口が見つかりませんでした。そこで、外部機関に協力を求めることにしました。相談しやすい機関へ協力を求めたことをきっかけに、連携を求めたい様々な機関へとつながり、まさしく「みんなで支援」ができてきました。



●まずはヨウジさんが安心してすごせる居場所の確保

校内委員会で、ヨウジさんがお母さんと落ち着いて過ごせる場所として保健室、自律学級、図書館などを考え、時間割を組みました。下校前に次の日の時間割をヨウジさんに提示し、明日も安心して登校できるようにしました。また、何をして過ごすかも、本人が決めるようにしました。

●お母さん、ヨウジさんと相談を重ねるうちに分かってきたこと

ヨウジさんへの支援の糸口をさぐるために、担任、養護教諭、SRECがお母さんやヨウジさん、ヨウジさんの保育園時代の担当保育士と相談をしました。相談の中で、お母さんや家族が抱えている問題が次第に明らかになってきました。お母さんの不安が強く、お母さん自身への支援がまず必要ではないかと考えられましたが、学校だけで解決するには難しい問題で、外部機関へ支援を依頼することになりました。

●外部機関との連携

SRECが市内にある中間教室へ出向き、親子の状況について説明して、支援をお願いしました。中間教室へは週に一度、病院附属生活支援センターの精神保健福祉士が訪問しており、中間教室担当から紹介していただくことになりました。

訪問日にお母さんとヨウジさんが中間教室へ出向き、面接を受けました。その結果、二人で生活支援センターへ週1回通い、そこでカウンセリングを受けることになりました。

関係づくりも進み、2ヶ月後には精神保健福祉士から受診を勧めてもらい、医師によるお母さんのカウンセリング、心理療法士によるヨウジさんの心理検査や遊戯療法が行われるようになりました。診察の結果、ヨウジさんはADHDもあることがわかりました。そして、校内委員会を開催した際には、この精神保健福祉士の方にも参加してもらい、生活支援センターや病院での二人の状況から学校での支援の方法について適切にアドバイスを受けることができました。

●お母さんの変容がヨウジさんの変容に

生活支援センターでの週1回のカウンセリングで、家庭の悩みや自分自身のことを語り始めたお母さん。「今まで一人で悩んできたけれど、話すところできてとても楽になりました」と気持ちが安定してきたようでした。そうすると、ヨウジさんも少しずつお母さんから離れて活動する時間が増えてきました。給食はクラスの友だち数人と自律学級で食べたり、休み時間は自律学級の児童とプレイルームで遊んだりすることができるようになりました。

その後も医師によるカウンセリングを続けているお母さんは、「時間はかかるけれど、私の生き方や子どもへの接し方を少しずつ変えていこうと思います」と自信がなかった自分を少しずつ肯定的に受け止めたり、前向きな気持ちがもてたりするようになってきました。

ヨウジさんは、自律学級を自分の居場所と決め、友だちとの学習にも積極的に取り組めるようになってきました。

事例から学ぶ

不登校傾向のあるお子さんの場合、支援の方法を探っていく中で、本人だけでなく保護者への支援が必要と判断されるケースが多いと思います。保護者の不安感がお子さんの不安感につながっている場合です。保護者支援は、外部機関と連携して対応していくことが有効です。地域により利用できる外部機関は違うと思いますが、まずは学校が相談しやすい機関へ協力を求めていくと、そこからいろいろな機関へ広がっていきます。また、受診を勧める必要がある場合、学校側から働きかけるよりも、専門機関から保護者へ働きかけてもらう方がスムーズにいく場合が多いと思われます。

～生徒の自信を生み出す支援～

「自律学級の教室や家庭では元気一杯なのに、原学級や学年などには入っていけない。どうしてなんだろう？」サキさんはそんな生徒です。本事例は、学校生活における様々な場面で元気一杯生活できるサキさんの姿を願って自律学級で取り組んだ実践です。サキさんは責任ある役割を果たすことによってセルフエスティーム（自尊感情）が高まり、以前より自信をもって学校生活を送ることができるようになりました。

●保護者との懇談

小学校の頃から、時々登校を渋ることがありました。原学級の友だちといろいろあったようです。中学校に入学してからは、登校を渋ることはなくなりましたが、自律学級の教室を出ることをとても嫌がります。全校集会や学年のキャンプは、物陰から見ているようなときが多いようです。もっと伸び伸びしてほしいです。



母親



担任教師

4月からサキさんと過ごしていて、いいなあと思ったことがたくさんあります。例えば、自律学級の生徒みんなと仲良くできて、誰にでも話しかけることができます。学級の中ではリーダーです。学級のみんなと一緒に、給食当番などのときに普通に教室を出られます。活動の場面を工夫すればきっとサキさんらしく自信をもって活動できるようになると思います。

●学級の係の選出

Plan

お母さんの話から、「他の生活はうまくいっているのに、なぜ全校集会とか行きたがらないのかしら…」と、担任として焦りのようなものを感じました。

教師も保護者も、つい「できないこと」ばかりに目がいきがちですが、できることや得意なことを見つけ、支援の計画に生かしていくことが大切です。

サキさんの場合、自律学級の中でリーダーシップがとれることを生かして、責任のある役割を割り振り、その役割を果たせる場面を設けることが必要ではないかと考えました。

Do

学級の係決めに先立って、学級内でそれぞれの生徒のいいところ・得意なことについて話し合いました。サキさんについては、級友に対していつも優しく声をかけていることや、給食の準備などを先頭に立ってやっていることが出されました。サキさんが学級内でリーダー的存在であることが認められ、サキさんはルーム長に選出されました。



See

3年生のサキさんは、ルーム長に選出された後、以前にも増して1年生に積極的に声をかけるようになりました。教室が騒がしいときなど、注意することが多くなりました。また、教師が困っている場面では、友だちを誘って手伝いをしてくれることもありました。

ルーム長という役割を得たことで、サキさんは学級の中で一層積極的に活動するようになったと考えました。



●セルフエスティームを高めるために

Plan

ルーム長としての自覚が高まり、役割を積極的に果たそうとしているサキさんに、ルーム長としての役割をクローズアップした活動を設定したいと考えました。

その活動を通して、学級の友だちや周囲の人から認められる体験を積み、充実感や達成感を味わう中で、サキさんのセルフエスティームが高まり、一層成長する姿を願いました。

ルーム長の出番を強調しよう。他の生徒にも出番があって、楽しめる活動がいいな。周囲の人にもさりげなく褒めてもらう場面をつくりたいな。



Do

「みんなの家に行ってみよう！」



- ① 1日1軒、みんなの家に全員で行きます。1時間で往復しましょう。
- ② きちんと並んで歩くこと。交通に注意しましょう。
先頭はルーム長。2番目はその日の「道案内係」。最後尾は担任。
- ③ 道で会った人には、あいさつをしましょう。
- ④ ルーム長や先生の注意をよく聞きましょう。

生徒たちは、お互いの家のことはよく知らないようで、学区内の地図を見ながら、出かける順番を決めていました。

リハーサル初日、張り切って玄関前に並ぶ生徒たち。ルーム長のサキさんの指示で整列すると、たまたま通りかかった事務室の先生が「〇〇学級の生徒が整列するのを初めて見たよ。並ぶの上手だねー」と声をかけてくださいました。

アツシさんはルーム長のサキさんを追い抜いて走り出してしまうことがたまにありますが、サキさんの「走っちゃだめ」の一言で立ち止まります。普段は、みんなの後ろを遅れないようについて歩くことの多いノブオさんも、自分が案内係の日は、みんなの先頭を切って歩き、とても張り切っています。

家に着くと、得意そうにペットの子猫を連れてきて、みんなに触らせてくれたジュンコさん。いつも遊ぶ公園にも案内して伸び伸びと駆け回ったリョウさん。学校とは少し違う家庭や地域でのお互いの姿を見ることができました。

6名の家への訪問が終わり、最終日はナオコさんの家です。桜が満開の、いい天気の日でした。出発前に、みんなでクッキーとポップコーンのおやつを作りました。ナオコさんの家の近くの公園に寄り、たっぷり遊び、おやつを食べて過ごしました。



See

この活動の後、全校集会のときには、サキさんの声かけでみんなが整列して入場することが習慣になりました。

集会活動に参加することが苦手なサキさんでしたが、ルーム長の役割を果たすことが自信になって、集会活動に参加できるようになったと考えます。



事例から学ぶ

「生きる力」とは、「自分に自信をもち、自分もなかなか捨てたもんじゃないなあ」と思える経験を重ねることで育まれるものです。子どもたちの学校生活においては、常に意識されなければいけないことだと思います。

また、子どもへの支援は、指導計画を基に行うことが大切です。計画（Plan）を実行（Do）し、評価（See）して、さらに計画を修正し…といったP-D-Sサイクルを意識して行うことによって、子どもへの支援は、より状況に対応した適切なものとなります。

事例 19

子ども・保護者・職員それぞれの願いを重ねて(中学校)

～支援をチームで検討・修正～

高機能自閉症と診断されたコウタさんは、小学校では自律学級に在籍しつつ、原学級での生活も大切にして学校生活を送ってきました。トラブルもありましたが、周囲の理解を得て、楽しい小学校生活だったそうです。でも、比較的小規模でアットホームな雰囲気小学校とは違い、中学校では大丈夫だろうかと保護者の心配は尽きません。

原学級や自律学級でコウタさんがどのような支援を受けたのか紹介します。

●中学校生活をスムーズにスタートするために >>> 保護者と入学前に懇談しました



人間関係を築くのが苦手なコウタのことですから、きっと皆さんに迷惑をかけることが多いと思うんです。でも、苦手だからこそ、原学級で人間関係の勉強をして欲しいと願っています。

小学校のときは小さい学校だったので、みんなコウタの特徴を自然にわかってくれて、何かあっても「コウタ君だ」と許してくれていた部分があると思います。でも、中学校では、他の小学校から入学する人もいますし、コウタのことをよく知らないお友達とトラブルになったら…と心配です。

特に、カッとくる衝動を抑えられないことがあるようで、お友だちにけがでもさせてしまったら…。そんなにしょっちゅうあるわけではないんですけど、保護者の方々にも、こういう子どもだということをお話した方がいいのではないかと思います。

入学式の日、原学級の保護者の方にお話したいので、お時間をもらえないでしょうか。

数日後

保護者の皆さんにどうやってお話ししたらいいか、父親とも相談しながら一生懸命考えたんですけど、まとまりません。どんな言葉で説明しても、コウタの姿と別のものになるような気がして…申し訳ありませんが、入学式の日、皆さんにお話しするのはやめにします。皆さんには、**実際のコウタの姿を見て、感じてほしい**です。

●保護者との懇談を受けとめ、コウタさんへの支援をチームで話し合っていました



コウタさんの支援チーム

「**実際のコウタの姿を見て、感じてほしい**」という保護者の言葉を大切にしたい。始めからコウタさんの苦手なことを取り除いてしまうのではなく、つまずきや悩みを、周囲に迷惑がかかることがあっても体験することで、コウタさんも周囲もみんなが成長できるように支援したい。

原学級での支援（抜粋）

支援1

常に担任の様子を見て、声をかけられるように、コウタさんの座席は、教卓前で固定する。

支援2

原学級の授業で困難な教科は、自律学級の授業や放課後などに、個別に指導する。

支援3

特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。文章に書いて振り返り、気持ちを言葉で表すようにする。

支援4

保護者に学校生活の様子を知らせる。学校での対応が困難な場合は、保護者にも協力を願う。

●コウタさんの中学校生活

入学してしばらくした頃、コウタさんが原学級の友だちに対して、暴力（蹴る・物を投げる）をふるってしまうという出来事が起きました。相手の生徒からも詳しく話を聞いて、コウタさんが謝ることができる機会を設けることにし、わだかまりが残らないように配慮しました。

原学級の担任は、問題行動が起きたとき、生徒に文章を書いて振り返ることを課していたので、コウタさんも同じように対応しました。しかし、コウタさんにとって文章を書くことはとても苦手なことでした。困惑し、座っているだけで、ただ時間ばかりが過ぎてしまいました。

なんで蹴ってしまったのかなあ。自分でも理由がよくわからないんだ…
A君になんて言って謝ったらいいのかなあ。



自律学級担任から連絡帳

コウタさんと今回の出来事について話をしました。やはり蹴ってしまった原因は本人もよく分かっていませんでした。詳しく話すうちに、その前に誰かにきつい言葉で注意された、ということが分かりました。何か言われイライラした状態のとき、Aさんに更に注意されて、よく考える前に足が出てしまったのです。出来事の順番をメモしながら、「コウタさんには、イライラしているという手や足が出てしまうことがあるから、直していかなければいけないね。」と話しました。その決意やAさんに謝りたい気持ちを、文章にしたらどうかと提案しました。

文章を書くことは、コウタさんにとってかなり難しい課題ですが、出来事の順番や問題点を整理して考えるためには、良い手段ではないかと思います。自分のやった行為を謝めることは、誰にとっても難しいことです。コウタさんには、友だちに謝る前にまずは文章に書いて、言葉にして表すということを経験してほしいと思っています。

連絡帳 家庭から

本人はA君を蹴ってしまったことは悪かったと分かっているようですが、蹴るに至った原因がよく分かっていないようで、家でも文章で表現するのにかなりの時間を費やしました。もともと感情についての理解が難しいコウタにとってそれを文章にするのはとても難しいことです。これを書いて、彼にとっての反省になっているのかどうか???

●支援の方向を修正する

これらの出来事から、コウタさんにとって、出来事を順序立てて説明することや、感情を文章で表現することがとても難しいことであることが一層はっきりと分かってきました。そこで、支援チームで話し合って「支援3」を次のように修正しました。

支援3

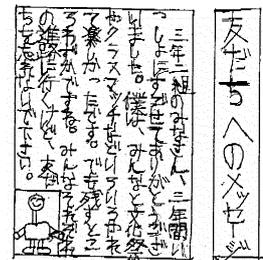
特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。文章に書いて振り返り、気持ちを言葉で表すようにする。



支援3 <修正>

特別扱いしない。不適切な行為は指摘する。不適切な行動が起きてしまったときは、できごとの順番や原因を、コウタさんに分かるように、メモをとりながら話し合う。それを基にして、文章を書いたり、謝ったりして、果たすべき責任について一緒に考える。

このような支援を根気よく繰り返す中で、コウタさん自身にも、問題となる行動が起りやすいのは、なんとなくイライラしたときだったことが分かってきました。以後、怒りの感情をぐっと我慢して、不適切な行為をしないよう努力するようになりました。1年生のとき、数回起きた暴力行為は3年生になってからは1度もなく、落ち着いた生活の中で卒業を迎えることができました。



事例から学ぶ

この事例の場合、保護者の方の願いから、原学級で特別扱いせず、トラブルや問題にその都度対処するようにしました。しかし、原学級の生徒に通常行われている指導が、その子にはうまくいかないこともあります。そこで支援チームでは、支援の方向を修正し、その子が自分の行為を見返せるような支援を取り入れるよう修正しました。

子ども・保護者・教職員それぞれの願いを重ね合わせて計画し、実施、見直し、修正といった一連の流れを大事にして支援をすすめることで、よりその子に合った支援となります。

安定した集団生活を送るための手だて ～自分は「今」・「何を」・「どのようにしたらいいか」が分かる!～



発達障害のある子どもたちに対しては、その子のもつ強い情報処理能力を生かし安心して確実に学ぶための支援、主体的に柔軟に生きるための支援が必要となります。これらの支援によって、本人が安心でき、学びやすく、学習に主体的に取り組む姿勢が向上する事は、問題行動の予防にもなります。

最初から「やらない」、「やらせない」、「できっこない」と決めつけるのではなく、支援を工夫し「やれる」経験を積み重ねていくことで、子どもたちは様々な活動に意欲的に取り組めるようになっていきます。

※この項における「発達障害」＝発達障害者支援法（H17.4.1施行）第2条の定義によります。

1 構造化

構造化とは、支援及び学習を組織化、体系化することです。

構造化は、状況の理解が悪い子、注意を向けられない子、自分で思考や行動を組織立てることが苦手な子が、できるだけ自律的自発的に考えたり行動したりできるようにすることを目的として行われます。「今」・「何を」・「どのようにしたらいいか」が分かるようにします。場所や場面、スケジュールや時間、活動の内容や順序などを構造化することで、適切な行動が可能になり、成功体験へとつながります。

スケジュールや時間の構造化

- *一日の生活の見通しをもち、自分から活動できるようにします。
- *始まりと終わりをはっきり示します。
- *変更がある場合は、できるだけ事前に予告します。



日課表の固定化(例)

(ルーティン＝決まった手順や習慣)

1. 朝の会
2. 算数
- 休み時間
3. 図工・音楽
その他の教科
4. 国語(音読)
給食
掃除
- 5・6. 野外活動
物作り等

- ・体を動かして、さわやかに1日をスタートする。
- ・散歩や緩やかなルールの集団ゲームによるSST（ソーシャルスキルトレーニング）を行う。

- ・スモールステップで学習プリントを進めたり、その子にあったレベルからスタートしたりする。
- ・やった過程が結果として見え、めあてが明確にもてるようにする。また、やったものについてはその場で即時に評価し、結果を表示する（意欲付け）。

- ・声に出して、できるだけ早く読む。
- ・スモールステップで積み重ねていく。

※日課が固定しやすい自律学級等で参考にして下さい。

場所や場面の構造化

- *活動、場所、場面を対応させて、今やるべき活動は何か明確にします。
- *立ち入り禁止の場所等は視覚的に分かるよう、テープ等で明示します。
- *掲示物はシンプルにします。気の散らない工夫とともにやったことが確認できるようにします。
- *騒音や雑音ができるだけ入らないよう配慮します。
- *座席は、人間関係を十分考慮して配置します。

- * 学習教材についてはすべて棚に管理します。どこに何があるかということや、借りるための手続きを明示します。
- * 道具は、使ったらすぐ片付けます。整理整頓に心掛けます。

活動内容や順序の構造化

- * 活動の順序をスクリプト（台本）にして掲示し、何をどのようにすればよいのか見通しをもって行い、目標が達成できるようにします。
- * 活動内容（どれだけの課題をやるのか・何をやるのか・いつ終わるのか・終わったら次に何をするのか）を明確にします。
- * 視覚教材や、コンピュータを積極的に利用します。
 - ※「自閉症ガイドライン2005」（長野県）が参考になります。

2 学習内容の見直し

- * 個に応じた基礎学力の定着化をはかるために…
 - ・ 読み書き計算力をつけるための教材を選定します。
 - ・ 興味もてるようにクイズ形式のプリント等で意欲を喚起します。
- * 分かる授業・楽しい授業に…
 - ・ 教材の視覚化に努め、操作活動を多く取り入れます。
 - ・ 物作り（動くおもちゃ作り・簡単な調理・プラバンやアイロンビーズ等）活動で、作る楽しさを感じられるようにします。
 - ・ 実験（ペットボトルロケット、電池や磁石を使って）で学習への意欲を高めます。
 - ・ 野外活動（木を集めて薪作り、みんなで調理）等で楽しく協力し合う経験が積めるようにします。



3 SST（ソーシャルスキルトレーニング）

- * 社会生活（集団生活）を営んでいく上で必要な技術のことをソーシャルスキル（社会的スキル）とよびます。ソーシャルスキルは練習や経験によって習得されますが、発達障害のある子どもたちは社会的場面の情報処理が苦手なため、この技術がなかなか身に付きません。仲間たちから拒否されたり、孤立したりし、円滑な社会生活を送るのが難しくなり、様々な二次の問題が生じやすくなります。遊びの場面・物作りやアウトドア学習等の中で、協力し合うことやトラブルにあった際の解決の仕方を学びます。

例：順番を守る

じゃんけんで決める、生まれた月の順にする等を話し合う。

乱暴な言動

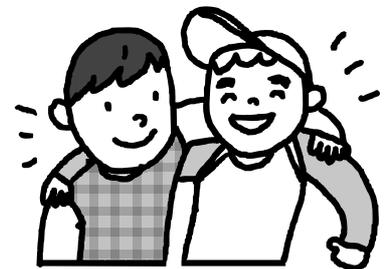
どのように言えば相手が嫌な感じがしないかを考え、声に出して練習する。

人に何かを頼む時

言い方の練習をしてからロールプレイを試みる。

腹が立った時

深呼吸をする。力をぐっと入れ、抜く練習をする。その場を自分から離れ、落ちつくまで待つ。



問題行動が起きる前に環境の調整をすることで、予想される問題行動を防ぐことができます。また楽しく意欲のわく活動を仕組むことで、子どもたちの中に自己肯定感を育てるとともに、人と協力し合うことの楽しさを感じることができます。



小さな成功を見つけて褒める (小学校)

～ADHDペアレント・トレーニング 親と教師の学習会～

校内委員会やSRECを中心とした校内支援体制が整ってくるにつれて、医療機関を受診し、診断を受ける児童が校内に複数見られるようになってきました。しかし、診断の有無が支援のゴールでなく、そこからが真のスタートであると考えます。これは、ADHDのある子どもを持つ複数の保護者と校内の職員が悩みを共有し、家庭や学校での支援に生かすために実践した『小さな学習会』の事例です。

●SRECが医療機関のスーパーバイズを受け、学習会への参加を呼びかける



保護者は、「誰が来るのか不安だけど、やってみたい」「難しそうだけど、本当にできるだろうか」「同じADHDとはいえ、子ども一人一人個性が違うのに、一緒に学習が進められるのかしら」等、様々な不安をもちながらも学習会に参加しました。

【ペアレント・トレーニング学習会の始まり】

◆参加者

ADHDのある子どもを持つ保護者
担任

(インストラクター : SREC)

◆回数 全9回 (2回/月)

◆時間 1時間半～2時間

1 『ペアレント・トレーニング学習会』の目的
ADHDのある子どもの行動を理解し、効果的な対応法を学び、話し合い、練習して、よりよい親子関係づくりと子どもの適応行動の増加を目指します。

2 進め方

毎回テーマを決めて学習・話し合い・練習を行い、宿題として、自宅でも練習します。参加メンバー同士で相談し合い、お互いに高め合っていくサポート効果も期待できます。

学習会は、隔週1時間半～2時間を原則として、段階的に行います。

毎回のセッションの最初に前回の宿題のふりかえりを行い、達成度を深めて、次のステップに進んでいく予定です。

3 参加人数 4～5名

このプログラムは、個別相談でも対応できますが、グループにすることで

- ① 宿題の報告などの体験を共有できる
- ② お互いにサポートし合えるというメリットがあります。

反対に、大人数になると1回のセッションで発言できない参加者も出てくるのが予想されるので、上記のような人数を設定しました。(後略)

●学習会のスタート

学校職員がインストラクターになり、保護者だけでなく担任も一緒に学習会に参加するというスタイルはあまり例を見ないようですが、みんなが参加しやすいようにと学校長の了解と全職員のバックアップのもとで、勤務時間内に学習会を開始することができました。その間、子どもたちは「児童館」で預かっていただけたので、校内の一室を使って安心して学習会に参加することができました。

ポイント1 ニーズがあったときに、始めるチャンス！

- ・大切なのは「やってみようという意欲」だと思いました。勉強不足で自信がないとしりごみせず、専門家に相談しながら、参加者と共に学ぼうという気持ちでチャレンジしてみました。始めてしまえばこんなふうにやればいいんだということがわかり、意外なほどスムーズに進めることができました。

ポイント2 自分たちの変化が実感できる！（資料1）

- ・ウォーミングアップを兼ねて、始めに宿題の報告を聞き合いました。
- ・宿題は決して楽ではないけれど、続けるうちに学習会参加への自覚も育ち、確実に子どもたちへのかかわり方がよい方に変化してくるのを自分たちで実感できるようになりました。

褒めることを宿題にされたら、わが子の「よいところ」が見つかるようになったわ。

〇〇さんはこんなふう
にやってみたのね。

毎回の宿題は大変だけど、
みんなの報告が楽しみ。



子どもが、どう褒めたら
喜ぶかわかってきたわ。

〇〇さんも同じだっ
たのね。

ポイント3 押し付けや教示のし過ぎに注意！

- ・参加者同士の話し合いとロールプレイを主にして行います。
- ・互いの悩みや思いを共有し楽しみながら学習していくことが、成功の秘訣だと思います。
- ・毎回最も時間をかけ、盛り上がったのが宿題の報告でした。参加者の努力や実践そのものが貴重な教材であり、孤軍奮闘してきた保護者に高いサポート効果が望めました。



ポイント4 茶話会形式で和やかな雰囲気づくり！

- ・おいしいものを前にすると、自然と笑顔が広がり心も開放されます。お茶菓子等を互いに持ち寄るやり方でもいいですが、参加費を徴収することで、責任感や意欲が増すこともあります。
- ・参加者間で話し合っ決めて決めるのがよいと思います。

ポイント5

「終了証」を手渡し
互いの努力を讃え
合う



ポイント6 担任の参加で、保護者にも安心感！

- ・保護者・担任・相談担当者が共に学び合うことで、子どもの問題や目標を共有できる、子どもを見るポイントがつかみやすくなる等の利点もありました。また、保護者の悩みや願いを受けてSRE Cがその解決のための具体的な支援方法（資料2）を職員会で提案するなど、迅速でより効果的な対応をすることもできました。

事例から学ぶ

インストラクターをSRE Cが担当し担任も参加することで、個別の教育相談の継続や、よりきめ細かな支援体制づくりにつなげることができます。参加者同士が子どものよき支援者として何でも話し合えるような関係になれるかがポイントです。

また、プログラム終了後も参加者が定期的に集まって話し合えるようなフォローアップの体制をつくっておくことにより、タイムリーな支援を継続できるよさもあります。

ペアレント・トレーニング

【プログラムの進め方と内容】(例)

回数	内 容	宿題と配付資料 (★)
1	<ul style="list-style-type: none"> ◆自己紹介 ◆「私 困ってます」発表会 ◆子どもの行動を3つのタイプに分ける <ul style="list-style-type: none"> ・好ましい行動 (増やしたい行動) ・好ましくない行動 (減らしたい行動) ・許しがたい行動 (なくしたい行動) 	★行動リスト (例) ①「行動観察表」事前に配布 ②子どもの行動を見て褒めてみよう ③子どもの行動を3つのタイプに分けよう
2	<ul style="list-style-type: none"> ◆親子タイム (スペシャルタイム) ◆上手な褒め方 (ロールプレイ) 	★親子タイム ★親子タイムシート
3	<ul style="list-style-type: none"> ◆肯定的な注目 褒める (好ましい行動を増やす) ◆対応テストA 	★対応テストA ④親子タイムを楽しもう
4	<ul style="list-style-type: none"> ◆上手な無視の仕方 (好ましくない行動を減らす) <ul style="list-style-type: none"> ・上手な褒め方のコツ ・無視の仕方のコツ ・無視が有効でない行動 ◆ロールプレイ <子どもにじゃまされずにあなたの用事をするには>	★行動リストでみる連続性 ⑤無視した行動—どう無視したか—その後どうなったか
5	<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもが従いやすい指示の出し方 (CCQ) <ul style="list-style-type: none"> 穏やかに (Calm) 近づいて (Close) 落ち着いた声で (Quiet) ◆ロールプレイ 	★ロールプレインシナリオ ⑥指示—子どもの反応—次にどうしたか
6	<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもの協力を引き出すために <ul style="list-style-type: none"> 「CCQで指示」「無視と褒める」 「予告」「選択」 「〇〇したら●●できるという取り決めをする」 ◆制限を設ける <ul style="list-style-type: none"> ・短時間の罰 (セルフコントロールを教える) ・リミットセッティング (限界設定) ・タイムアウト (警告してから) ◆ロールプレイ 	★指示を出してから制限を与えるまでの流れ ★ロールプレインシナリオ ⑦リミットセッティング
7	<ul style="list-style-type: none"> ◆トークンシステム 試験的なトークン表を作ってみよう	★トークンポイント表 (資料3) ★ポイントシステムの流れ ⑧試験的トークン表の実施
8	<ul style="list-style-type: none"> ◆学校との連携 ◆振り返り⇒「対応テスト」 	★学校連絡シート ⑨トークン表の継続
9	<ul style="list-style-type: none"> ◆全体のまとめとこれからのこと ◆「終了証」授与 	

キーワードは

1 行動療法

2 親子相互関係

3 サポート

参考資料 『AD/HDのペアレント・トレーニングガイドブック』 じほう



『行ってきますカード』

一斉指導の場面で集中の持続が難しかったり、パニックになりかけたりしたときなどに、職員間で連絡し合って同一歩調で指導に当たることができるようにと、保護者の願いを受け SREC が職員会議で提案したものです。

なまえ () () 月 () 日 ()

行き先(いきさき) (担任から)	活動の様子 () 先生から
時間(じかん) いま 今【 】時【 】分 帰ってくる時間は【 】時【 】分	 行ってきます <input type="checkbox"/> おかえりなさい <input type="checkbox"/>

<使い方(例)>

- 教室以外の場所で学習する場合は、行き先と帰る時間を相談しながら書き込む。
- 「行ってきます」の欄に担任のサインをして児童に持たせる。
- 教室に帰る前には別室での活動の内容や様子を、一緒に過ごした先生から一言書き添えてもらう。
- カードを受け取った担任は、「お帰りなさい」の欄にシール(サイン)をはる。
*送り手の担任は、可能な限り児童に課題を与えて送り出すことが望ましい。課題は簡単なものでかまわないので、児童と約束をした上で送り出し、迎えるときに課題ができていれば褒める。(課題=褒めるためのツールと考えます)
*ただし、安易に退室を認めることは危険です。「○ちゃんだから特別」とか「しかたがない」とならないためにも理由付けが大切です。



『トークンポイント表(例)』

がんばれポイントゲッター ～がんばってポイントをためよう!～

グリーンカード +1P	イエローカード -1P	レッドカード -3P
・英語教室でうろろしないで勉強できた。 ・ゲームをやめる時間を守れた。 ・その他、お母さんがえらいとおもった時	・ゲーム/パソコン/本を横取りしようとした。 ・ゲームで興奮して走ったり騒いだりして、注意されてもやめなかった。	・たたいたり蹴ったり押したりした。 ・うそをついたり人のせいにした。

◆毎日チェックすること(チェック5個で1ポイントゲット)

チェック項目 / 月日	ポイント
1 前日の夜9:45までにねた。	
2 朝6:45までに起きた。	
3 朝脱いだパジャマを片付けた。	
4 朝、歯磨き、顔洗いができた。	
5 学校から帰ってすぐ着替えと片づけができた。	
6 夕方5時までに宿題ができた。	
7 夜8:30までに時間割をそろえた。	
グリーンカード	
イエローカード	
レッドカード	
1日の合計ポイント	

<ポイントシステムの流れ> (例)

- 子どもに身につけてほしい行動を(5つぐらい)決める。
ぜひ身につけてほしい行動(ターゲット行動)・・・1つ
ちょっとがんばればできそうな行動・・・3つ
ほとんどできている行動(ダメー)・・・1つ
- 1週間ほど子どもに内緒で行動を記録してみる。
- 子どもと相談する。(ポイントシステムの説明とご褒美の決めだし)
- 実行する。(表を見えるところには)できたときには○(シールでもOK)できないときは空欄のまま(×はつけない)
- ポイントシステムのやめ方
良い行動が身に付いたらやめていくことも考えましょう。
良い行動が減り始めたら トークン表を復活させる。(その繰り返し)

10ポイント・・・ゲーム30分延長券	30ポイント・・・好きな本	50ポイント・・・ハンバーガーセット
100ポイント・・・○○円以内の好きなおもちゃ	300ポイント・・・好きなゲームソフト	500ポイント・・・旅行(家族と相談)



1年間の見通しをもって保護者と連携(小学校)

～三者による連携体制～

子どもたちの生活の場は、大きく分けると家庭と学校になります。通常の場合、直接の支援は保護者と学級担任が行いますが、自律学級に在籍した場合は、保護者—自律学級担任—原学級担任の連携が不可欠となります。1年間を見通し、三者での懇談を継続的に行うことで、適時に適切な支援ができるようになります。

本事例では、「個別の指導計画」（以下A表）と短期の指導計画（以下B表）の作成、見返しを懇談の要にして、1年間取り組んでいます。そのあらましについて紹介します。

● 1年間のあらまし（前期：4月～9月 後期：10月～3月） 担任者会

月	行事等	保護者	自律学級担任	原学級担任
4月	全体懇談 (参観日) 家庭訪問	<div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px;">「個別の指導計画」や年間の連携について、保護者と共通理解を図る。</div> 基礎資料を作成する。 (生育歴 通院歴 よさ 興味関心 願い等)		
5月末	個別相談 1	<div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px;">三者で児童の実態、支援上の配慮点等について情報交換し、1年間の目標、前期の目標、支援の方法などについて共通理解を図る。</div>		
6月				
7月	(通知票)			B表の内容に沿って、支援の経過を保護者に連絡する。
8月		通知票に保護者の支援の様子を記入する。		通知票を基に、前期の様子を見返して、後期B表の原案を作成する。
9月末	個別相談 2	<div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px;">三者で前期の見返しをし、後期の目標、支援の方法などについて、共通理解を図るとともに、後期B表を作成する。</div>		
10月				
11月末				後期B表にそって、通知票を作成する。
12月	個別相談 3 (通知票)	<div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px;">通知票にそって、三者で後期の支援経過について評価し、後期目標の修正や支援方法についての共通理解を図る。</div>		
1月				
2月末	個別相談 4	<div style="background-color: #e0e0e0; padding: 5px;">三者で後期の生活や1年間の様子を振り返り、可能性の芽や支援上最も大切にしたい内容等をまとめて、次年度に引き継ぐ。</div>		
3月	(通知票)			後期B表、1年間の目標と懇談の内容等を基に、通知票を作成する。

4月、自律学級担任と原学級担任とで担任者会を行いました。保護者とは参観日の授業参観後に個別相談を行って、「個別の指導計画」A・B表を作成する目的、その内容、そして1年間を通じてどのように扱うかについて説明し、三者で共通理解を図りました。

1年間を通して大切にしたのは、保護者、自律学級、原学級それぞれが「可能性の芽」を伸ばしていくという支援の立場と三者それぞれの支援の役割です。そしてA・B表の作成や活用を通して情報交換をし、子どもの理解や支援方法について深めていきました。

ここでは、短期の指導計画B表について紹介します（A表については、「特殊教育教育課程学習指導手引書」を参照してください）。

前 期 個別の指導計画B表 年 組 名 前

1年間の目標	1 1日、1週間の見通しをもって生活できるようになる。 2 国語 ひらがなの五十音を覚え、身近な物の名前の読み書きができるようになる。 算数 10までの数唱が正しくでき、具体物の数を数えることができるようになる。 3 安心してできる生活の場や活動を広げていく。
---------------	---

前期（4～9月）の計画

目 標	具体目標（各生活の場で） ①家庭 ②自律学級 ③原学級 ④全体	具体的な支援の方法とその経過
1	①朝起きてから、学校へ行くまでに行うことがわかり、自分で行動できる。	・毎日、朝の生活リズムをできるだけ一定にし、分かりやすい生活の流れをつくっていく。
2		保護者から
3	①②5までの数を具体物と対応させて数えることができる。	・数唱の学習を続けながら、給食や家庭での生活場面で実際に数える場面をつくっていく。
3		保護者から
3	②③集会活動の中で、集団の動きに合わせて行動できる。	・短時間で、動きが比較的単純な朝の集会活動を利用して、まず一緒にいることに慣れていく。
3		保護者から
その他の生活の様子から		保護者から

「1年間の目標」に合わせ、各支援の場での具体目標を設定しました。

・作成のときは、支援の方法を中心に記入しました。
 ・通知票はこの様式を基に、支援の経過等を記入しました。

具体目標以外の様子を通知票作成時に記入するようにしました。

年間を通じて4回の個別相談を行いました。内容は、前後期の「個別の指導計画(短期)」の作成やその評価です。三者がそれぞれ具体目標をもち、また支援してきているため懇談会の内容は焦点化し、次の具体目標や支援の方法について三者で明確にすることができました。保護者からも、大変好評でした。

事例から学ぶ

A表、B表の作成やその評価を、三者で顔をつきあわせて行うことによって、支援の当事者として自分がすべきことが明確になったり、主体的に情報交換をするようにもなったりします。結果として、三者の連携がいっそう強くなっていきます。

また、三者が共通理解し、実践を積み重ねていくためには、「いつ、どこで、誰が、何を、どのように、いつまで支援するのか」、という内容が明確になっていることが大切です。



保護者の協力を得るための学級懇談会(小学校)

～LD・ADHD児等への支援を保護者と共に行う～

LD・ADHD児等を支援していくためには、クラスの子どもたちや保護者が、その子について理解していることが大切です。保護者の理解があると、ちょっとしたトラブルが起きても寛容に受け止めてくれたり、学校以外でも同一步調で支援してくれたりするのではないかと考えました。そこで学級懇談会の時間を利用して、学級に在籍しているお子さんについて保護者の方々に理解してもらうように試みました。

●フミヤさんについての苦情

クラスの保護者からは、フミヤさんについての苦情がたびたび寄せられました。特に、保育園で一緒だった保護者の中には、フミヤさんの行動に対して不満をもっている方もおられました。また、その思いは、「(フミヤさんの)保護者は何をやっているんだ。」という思いも生み出していました。そこで、フミヤさんについてきちんと学級懇談会の場で取り上げ、クラスの保護者の皆さんに正しく理解していただくことが必要ではないかと考えていました。

これまで、そういったことをフミヤさんの保護者にお伝えしてきましたが、なかなか納得していただけず、実現しませんでした。しかし、フミヤさんの様子が以前よりも落ち着いてくるに従い、次第に担任に対して信頼を寄せてくれるようになりました。「フミヤさんをさらに支援していくためには、クラスの友だち、そしてその保護者の皆さんに協力していただくことが大切です」と根気よく時間をかけて話し合いを重ねた結果、フミヤさんを担任して1年半後ようやく理解を得ることができました。

●学級懇談会の様子

当日話したい内容を下記のようにまとめ、担任がフミヤさんについての話をした後、お母さんから話をさせていただくことにしました。

<p>○年△組学級懇談会</p> <p>○○小学校□年△組 ○年□月△日</p> <p>1</p>	<p>クラスの中でのフミヤさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても明るくて人なつこい。 ・面白いことを言ってみなを楽しませてくれる。 ・自分から進んでお手伝いをしてくれることがある。 ・友だちに優しいところがある。 <p>2</p>	<p>二つの心の話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな人の心の中にも二つの心がある。 ・「(悪い心を)どうしても止められないんだ」というフミヤさんの気持ち。 <p>3</p>
<p>フミヤさんが苦手なこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちの気持ちを考えることが苦手。 ・カッとなると自分の気持ちを抑えられなくて、悪口を言ったり、暴力をしてみたりする。 ・「ダメ」といわれても自分のやりたいことを何度も主張する。 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「よい心」がうまく働かず、自分の気持ちを抑えられないときがある。 <p>4</p>	<p>「よい心」を応援するためには</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの子どもたちの力が不可欠です。 ・お家の皆様のご協力、学校、家庭、地域で連携して支えていくことが可能です。 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フミヤさんを特別扱いしているのではなく、フミヤさんの課題を克服するためには、皆様のお力をお借りする必要があります。 <p>5</p>	<p>ご協力いただきたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いけないことをしたときや自分に都合のよいことばかり言っているときにはハッキリと「ダメ」と言ってください。 ・言うことを聞かないときには「お母さんにお話するね」「担任の先生に聞いてもらおうか」 ・気になることがあったら、フミヤさんのお母さんや担任までご連絡ください。 <p>6</p>

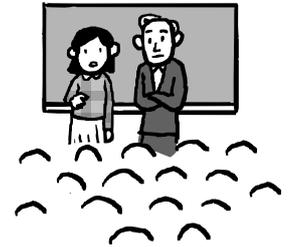
フミヤさんのお母さんは、「いつもご迷惑をおかけして、本当にすみません」と言った後は、涙で話ができなくなってしまいました。学級懇談会の後、多くの保護者の方がフミヤさんのお母さんの周りに集まり、「心配なことがあるならもっと相談してね」「もっと学級懇談会にも出てきてね」など、フミヤさんのお母さんに温かい声をかけてくださっていました。

○フミヤさんのお母さんの感想

「自分をもっと皆さんに嫌われていると思っていました。お話ししてよかったです。優しい声をかけていただけてうれしかったです」

●学級懇談会で話すときに配慮したこと

- ・担任からだけでなく、フミヤさんのお母さんにも話をしていただき、お母さんの切ない思いを直接伝えていただくようにしました。
- ・障害名だけが一人歩きしないように、このケースでは障害名は伏せ、フミヤさんについての具体的な話、また、どうしてそういう行動になってしまうかなど、フミヤさんに寄り添った話し方を心がけました。また、子育ての問題ではないことを合わせて伝えました。
- ・フミヤさんが遊びにいったときにトラブルが起きた場合には、どのように対応したらよいか同一歩調をとるようにお願いしました。
- ・懇談会を欠席された方については、伝えたいことをまとめた通信を封筒に入れ、子どもの目にふれないようにして様子を伝えました。



●保護者の方の反応

- ・フミヤさんのお母さんの気持ちを子育ての悩みを抱える仲間として共感的に受け止めてくださいました。
- ・他のクラスにいるLD・ADHD児等の保護者に、「クラスで話題にしてもらったら」と話しかけてくださる方がいました。
- ・フミヤさんのよい所を連絡帳で担任に知らせてくださる方がいました。
- ・「子どもにどのようにフミヤさんのことを話したらよいかわからない」など、新たに生まれた疑問を投げかけてくださる方がいました。

●今後の展開

学級懇談会で話題になったことは、フミヤさんを支援していく上で、新たな一歩を踏み出したにすぎません。さらにフミヤさんの様子について保護者全体に広めていく必要があると考えています。

事例から学ぶ

LD・ADHD児等を支援していくには、学級担任がクラスの友だちやその保護者の理解と協力が得られるように工夫することが大切です。親はだれでも子育ての大変さを知っています。きちんと情報を伝えることで保護者の共感を得、支援に協力していただくことが可能となります。そのためには、学級担任（あるいは学校）は、普段から保護者との信頼関係を培っておくことが必要です。

やってみよう,保護者学習会(小学校)

～全校の保護者を対象にした学習会の開催～

支援が必要な子どもの保護者に、障害についてもう少し理解してほしいと考えていました。「よし、保護者の学習会を開いてみよう」と決心はしたものの、どうやったらいいのか悩んでいましたが、何もしなければ何も始まらない、できることから始めようと思い直し、取り組んだ事例です。



SRECオノ先生

ユウジさん（ADHD児）やナミさん（LD児）のお母さんにもう少し障害について理解していただきたいのです。学習会を計画して誘ってみようと思うのですが…



校長先生

それならそのお家の方だけでなく、全校の保護者みんなを対象に募集し、「軽度発達障害」についての理解者を増やしてはどうか？軽度発達障害の子どもへのよい対応は、すべての子どもへの望ましい対応につながるんだから・・・

学習会のお誘い

※この事例ではLD・ADHD・高機能自閉症等を軽度発達障害と表現しています。

軽度発達障害学習会のお誘い

- | | |
|-----------------|---------------------|
| なかなか宿題に取り掛かれない。 | 忘れ物が多い。 |
| 身の回りのことに時間がかかる。 | ひらがなや漢字がなかなか覚えられない。 |
| 字がきれいに書けない。 | 友だちや兄弟とのトラブルが多い。 |
| 叱られることばかりする。 | 口ごたえばかりする。 |
| | 等々 |

親の思うようにはなかなかやってくれない子どもにイライラすることがあるかと思います。子どもの背景にあること、対応の仕方等を一緒に考えていきたいと思っています。軽度発達障害と言うと「えっ障害…」と抵抗を感じるかも知れませんが、その特徴を見るとどの人もこれは自分にも当てはまるなあと思う部分をもっていると思います。自分も含めどんな所が得意でどんな所が苦手なのか。その原因は何なのか。どのように周りの環境を整えたらいいのか。子どもたち自身にどんな力を付けていけばいいのか等を考え合うような勉強会にしたいと思います。

軽度発達障害のお子さんへの対応は、すべてのお子さんへの対応にも大変参考になると思います。是非、お気軽にご参加ください。

学習会の予定

- ◎ADHD・LD・高機能自閉症等、軽度発達障害って何？
- ◎どうしてうまくいかないの？LDやADHDの擬似体験をしてみよう
- ◎「どうせ私なんて」と思わせないために、どのように子どもにかかわっていけばいいの？
- ◎学校で軽度発達障害の子どもはどのように過ごしているの？
- ◎その他、皆さんが興味のあること、考えたいこと、希望のある内容を考えていきたいと思っています。

校長先生の助言から、お誘いの案内を全校に配布すると、何と20名程の参加希望者がありました。また、校長先生や教頭先生、そして担任の先生方も保護者の方々と一緒に参加してくれました。オノ先生はとてもうれしく思い、一生懸命学習会の準備をし、充実した会になるように努めました。オノ先生は次のような点に留意して、学習会を行いました。

学習会の工夫

- 1 学習会をするならきちんと理解していただきたいということで、2時間×3回で1シリーズとなるように計画しました。
- 2 理解しやすいように、プレゼンテーションソフトを利用し、配付資料を用意して、メモは最低限で済むようにしました。
- 3 第1・2集にあるチェックリストを学習会の中で実施し、自分の中にも軽度発達障害の行動の特徴と似ているところがあることを実感してもらえるようにしました。
- 4 子どもの困っている所がわかりやすいように、できるだけ具体的な事例でお話しし、実際に行った支援方法を紹介しました。
- 5 LD等の心理的疑似体験を行うことで、子どもの困っている気持ちに心を寄せてもらえるようにしました。
- 6 軽度発達障害の理解が中心ですが、「褒めて育てること」「セルフエスティームを高めることはすべての子どもにとって大切」「子どものちょっとしたよさに気づける自分になるう」という視点で話をしました。軽度発達障害の子どもに対する支援は、どの子にも大切な支援だという視点で話をしました。
- 7 研修に来る皆さんは、軽度発達障害について詳しい方、全く知識のない方と様々です。毎回アンケートを実施し、説明の不十分な部分や関心のあるところをチェックして、次の会に生かすようにしました。

ナミさんのお母さんの感想

今までナミに「早く早く」「頑張りなさい」と声をかけることが多かったのですが、「早く」と言われるほど焦ってしまったり、頑張ってもできないことを「頑張り」と声をかけられても苦しかったりすることがわかりました。



参加者からの感想！

学習会に参加して、今まで知らなかった軽度発達障害について知ることができました。また、軽度発達障害への対応の仕方は普段の子育てに通じることだと思いました。これからの子育てにいかしていきたいと思います。

コラム 学習会の必要性は分かるけどちょっとという人に

近くで開かれる学習会に誘ってみようよ・・・

講師は、近くの学校の先生に頼ってみようか

親の会と協力してヤスシさんの主治医のタナカ先生にお願いしてみるか

スクールカウンセラーのカラサワ先生に講師をお願いするか

同じ市町村内の幼稚園・保育園・小・中学校と一緒に学習会を企画しよう・・・

事例から学ぶ

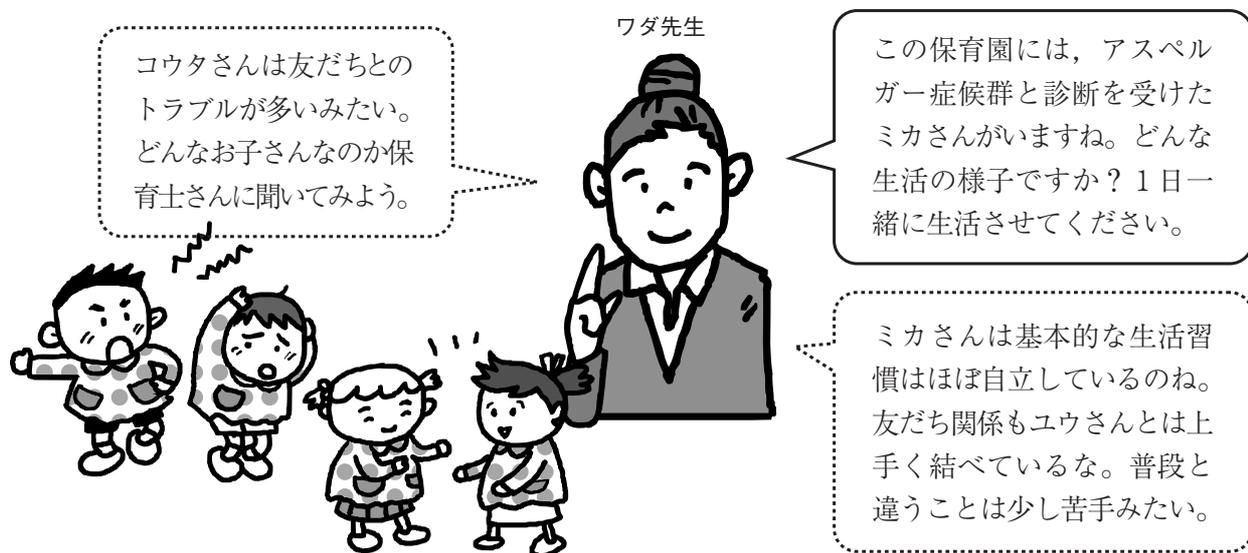
決してあきらめないことです。本事例では校長先生に相談をしていますが、誰かに相談することで、背中を押してもらえるものです。

自分の力でできるやり方は必ず見つかります。自分でできなければ人に頼むもよし、大がかりにしなくてもちょっとした会を企画するだけでも有効です。少しずつ理解者を増やしていこうと考え、できることから取り組んでみましょう。

「今年の1年生はとても大変だ」と新年度四苦八苦することはありませんか。どの学校でも保育園・小学校連絡会等で来入児の受け入れ準備を始めていると思います。これは小学校のSRECが、早い時期から保育園と連携して受け入れ準備を進めた事例です。

6月に開催された保育園・小学校連絡会で、巡回教育相談の対象となる来入児が数名いることを聞いた小学校SRECのワダ先生。受け入れ準備を進めるために、入学前のできるだけ早い時期から子どもたちの様子を知りたいと思いました。

校長先生と相談し、夏休み前に校長先生から各保育園の園長先生あてに、ワダ先生の訪問について依頼をしていただきました。夏休み中に訪問しました。



●「お昼寝の時間」にタキ保育士さんとゆっくりお話をする時間がとれました。

タキ先生：「ミカさんは事前に話をしたり見せてあげたりすると、落ち着いて取り組めることが多いです」

ワダ先生：「入学前に学校へ見学に来たり、入学式の会場を見たりしておくともよいかもかもしれませんね。運動会の来入児種目も配慮が必要かもしれません」

タキ先生：「2番目の組にしてもらえると、様子が分かって落ち着いて参加できると思います」

ワダ先生：「事前にお母さんとお話できると他の配慮もいろいろできますね」

タキ先生：「お母さんにお話ししてみます」

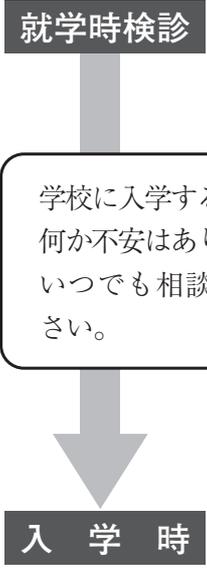
ワダ先生：「ミカさんの他にコウさんも今日はちょっとトラブルが目立ちましたね」

タキ先生：「友だちにすぐ手が出てしまうし、力の加減ができなくて友だちを泣かせることが多いんです」

ワダ先生：「力やスピードをコントロールすることを遊びに取り入れるといいかもしれませんね。ドミノや空き缶積み等もいいですね。やり方を教えてあげて、少しでも上手くできたらうんと褒めてみたらどうですか？」

タキ先生：「ぜひ今度やってみますね」

●タキ先生はその他にも気にかけているお子さんについていろいろお話をしてくれました。



タキ先生の勧めもあって、ミカさんやコウタさんのお母さんが教育相談に小学校へやってきました。ワダ先生からのお話で、安心したようでした。

学校に入学することで、何か不安はありますか？
いつでも相談してください。



事前に学校見学を希望するようでしたら、いつでも日程をとりますよ。

こだわりや友だち関係で心配でしたら、保護者のための学習会もあります。よかったら参加しませんか？

- 学級担任のミナミ先生に、入学前のミカさんやコウタさんの様子、有効な対応の仕方を知らせておくことができたので、ミナミ先生もそれを参考に準備をし、落ち着いて対応することができました。
- コウタさんは、入学当初から友だちとのトラブルが目立ちましたが、入学前から丁寧に対応することによって、保護者と学校との信頼関係ができていたので、すぐに懇談の時間を設け、どうしていくかについて一緒に考えることができました。
- 新しい環境に慣れにくいミカさんも、入学前に学校見学を繰り返し行っていたので、入学後もスムーズに学校生活に入ることができました。

幼稚園・保育園で対応に困っている時には！

保育園や家庭で対応に困っているケースに出会うことがあります。そんな時には**自律教育地域化主任推進員**に相談したことも有効でした。（本誌p77参照）

実際に保育園に出向き子どもの様子を見たり、保護者や保育士と話をしたりしながら、具体的な対応の仕方を教えてもらえるので、保護者も心強いようです。

また、書類等による申し込みもなく、電話一本で継続的にかかわってもらえることも可能です。

事例から学ぶ

時間の余裕がある長期休みに、1日を通して生活の様子を見ることにより、より多くの子どもの情報が得られ、確かな理解につながります。入学時からできるだけスムーズに学校生活に入るとは、本人にとっても保護者にとっても学級担任にとっても大事なことです。事前準備を十分行うことで信頼関係も生まれます。

また、子どもを目の前にして保育士さんと話ができると、より具体的に子どもの話ができます。できそうでなかなかできていない支援です。

事例 25

小学校と中学校をつなぐ縦の連携(小学校)

～SREC同士の連携で中学校にスムーズにつなげる～

「この子は中学校に入学してうまくやっていけるかなあ」と心配になることがあるかと思います。小学校のSRECと中学校のSRECの連携がポイントです。中学校生活にできるだけスムーズに入っていくことができるように、本人、保護者、学級担任の願いを大事に汲み取りながら、入学前の早い時期から小中学校で連携して準備に取り組んだ事例です。

マサオさんは、通常の学級に在籍するADHDのあるお子さんです。クラス替え後の4年生のときは、新しい学級や担任に慣れるのに時間がかかりました。5年生のときは、臨海学習で友だちとうまくいかず、班を飛び出してしまうこともありました。今でも、新しい集団に入るのが苦手です。そのようなマサオさんを、担任のサワ先生はよく理解し、できるだけ生活しやすくなるよう工夫してきました。しかし、中学校へ進学してからどうなるのか、心配でたまりませんでした。

5年秋

サワ先生の心配

中学校で新しい友だちや毎時間変わる先生方に慣れるのに時間がかかるのではないかなあ？

テストが受けられないと高校受験ができないと思うけれど、大丈夫かな？

小学校担任サワ先生



集団行動などで大声を出されたら、固まってしまうかもしれないなあ。

中学校に進学するまでにどんな力を付けておく必要があるんだろう？

相談



小学校SRECオガワ先生

大変心配していたサワ先生は、SRECのオガワ先生に相談してみることにしました。オガワ先生から、中学校SRECのタナベ先生やスクールカウンセラーのミキ先生にお願いして、授業を参観していただき、アドバイスを受けてみてはどうかとの提案があり、お願いしました。

◆タナベ先生・ミキ先生のアドバイス◆

- 学力的には大丈夫そうだけど、テストが受けられないと中学校では苦戦しますね。まだ1年以上あるから、テストが受けられるように学習の方法を考えましょう。
- 集団行動が上手とれるような支援を工夫し、自信がもてるようにしていきましょう。

お母さんにもタナベ先生からのアドバイスを伝え、テストや集団行動を上手く乗り越えられるように、お母さんにもサポートをしていただくことをお願いしました。

6年秋

6年の秋になり、中学校への入学が近づいてきました。保護者、担任、少人数学習担当者、小学校SREC、中学校SRECで、中学校入学に向けてどのような準備をしたらよいか話し合いをもちました。

- ・担任、少人数学習担当者、小学校SRECから、現在のマサオさんの学校生活での様子について、プリントなどを用意して要点的に説明をしました。
- ・お父さんやお母さんに、中学校の自律教育体制について、中学校SRECから説明をしていただき理解をしていただきました。

以下のことに取り組むことを決めました。

- 中学校の先生方にあらかじめマサオさんの特徴についてよく知っておいていただくようにするため、連絡を密にしましょう。
- 中学校生活について見通しがもてるように、そして慣れない中学校で頼れる人をつくっておくために、小学校の卒業式前に中学校のタナベ先生に個別に中学校の説明をしてもらう機会を設けましょう。
- 叱られたり大声を出されたりすることが苦手なマサオさんに、どんな場面で先生方が大きな声を出すか予告しておきましょう。

中学校の新入生受け入れ係、生徒指導係、SREC、教頭先生に小学校へ参観に来ていただきました。また、支援の必要な子どもについて、保護者の了承を得て、中学校に「個別の指導計画」を引き継ぎました。

2月には6学年全体で、中学校の授業参観や中学校の先生による学校生活についての説明会を開いてもらったのも、多くの子どもたちに好評でした。

中学校で工夫した支援内容

中学校でも小学校からの情報を生かし、受け入れを工夫しました。

- SRECを1学年に配属し、新しい学年の先生方に情報をしっかり伝えました。
- 大声での指導は苦手ということから、学年の先生方は集団行動などのときに、突然大声を出すことがないように配慮しました。
- 入学後、トラブルなどがあったときには、早めに保護者と連携できるようにしました。

自律学級担任者会の開催

中学校区で1～2ヶ月に1度、自律学級担任者会も行っています。

そこで行事の計画をしたり、児童生徒の情報交換などをして指導の参考にしたり、よりよい支援の方向を探ったりしています。小中学校の月別予定表を見ながら自律学級担任者会の計画を入れるのはなかなか大変ですが、支援をつなげていくには意味のある会となっています。

事例から学ぶ

普段から、小学校SRECと中学校SRECが連携し合うことです。できるだけ早い時期から、中学校入学後困難になりそうなことについて支援を行い、中学校への移行をスムーズに行うことが必要です。また、本人や保護者の願いを十分汲み取って支援を考えていくことが大切です。



「個別の教育支援計画」に基づいた一人一人のネットワークづくり(自律学校)

～「みんなで支援」を進めるためのツールの活用～

「個別の教育支援計画」は、「障害のある子どもたち一人一人のニーズに応じて、乳幼児期から学校卒業後までの一貫した支援を、教育、福祉、医療、労働などが連携して行うための計画」です。

ここでは、自律学校で行われている「個別の教育支援計画」作成の取り組みの例を、ステージごとに紹介します。

●自律学校の各ステージでの取り組みの例

乳幼児期	<p>自律学校入学が決まった1月、ハルオさんの就学に向けた準備と幼稚園から学校生活への円滑な移行を支援するため、「個別の教育支援計画（移行支援計画）」を立てる話し合いを行いました。</p> <p>この計画にそって移行支援を行ったことにより、ハルオさんも保護者も安心して入学後の学校生活をスタートさせることができました。</p>	<p>主な参加者</p> <p>保護者・幼稚園担当者・療育コーディネーター・自律学校就学担当者・保健師・SREC</p>
小学部	<p>小学部3年のナツコさんの保護者は、学校から配布された支援会議のアンケート用紙を見て、関係機関の方に集まってもらい、子どものことをみんなで話し合うことを希望しました。また、将来のことを考え、福祉のことなどの情報も知りたいと考えていました。</p>	<p>保護者・担任・支援センター担当者・市町村福祉課担当者・地域の学習教室担当者・SREC</p>
中学部	<p>中学部1年アキオさんの保護者は、校内で行われた性教育の講演会に出席しました。アキオさんがこの頃すっかり大人の体になり、性の問題についてどうしたらいいか悩んでいたのです。担任は教育相談に保護者を誘い、みんなで一緒に考えてみてはどうかと考え、支援会議を兼ねて行うことにしました。</p>	<p>保護者・担任・療育相談担当者・養護教諭・SREC</p>
高等部	<p>いよいよ卒業が近くなる高等部3年生は、学校の進路指導主事が中心になり、全員の生徒についてケア会議を行っています。卒業後の生活、就労について具体的な姿をイメージしながら、本人も参加して話し合いをしています。</p>	<p>本人・保護者・担任・進路指導主事・市町村福祉課担当者・支援センター担当者</p>

スムーズな移行のために

「個別の教育支援計画（移行支援計画）」は、次のステージへの円滑な移行を見通すものです。本人や保護者の意向を踏まえ、在園、在学中及び卒園、卒業後の支援が適切に行われるように、子ども一人一人について作成するものです。

円滑な移行という点では、幼稚園・保育園から小学校へ、小学校から中学校へ、また転校するとき、クラス替えのときも、同様なことが大切になってきます。これまでの支援が適切に移行できるように、十分な話し合いを行い、縦の連携を進める必要があります。

●初めてのネットワークづくりに向けて

対象児童生徒		○学部	年	ナツコさん
会議を開催するまで	担任	*保護者への、あるいは保護者からの会議の依頼に応じて、話し合う内容を決め、出席機関を選択する。SRECに開催日の希望と出席機関を相談する。 *SRECからの決定内容を受け、保護者に確認し、資料などの配布について確認する。		
	保護者	*会議開催の意向を受け、話し合いたいこと、希望日と出席してほしい機関などを担任に知らせる。		
	SREC	*担任からの報告を受け、希望日と出席機関、会議場所を調整する。 *会議内容によっては事前に関係機関に知らせ、資料などの用意を依頼する。校長名で開催通知を関係機関に配布する。事前にできている「個別の教育支援計画」に目を通しておく。場合によっては児童生徒の様子を知るため、参観などをしておく。		
日時	○月 ○日 (○) 午前 ○時～○時			
場所	学校 教育相談室 (*他の機関の場所をお借りすることもある)			
出席者	本人 保護者 担任 SREC 障害者総合支援センター職員 市町村社会福祉課職員 サービス提供機関職員 地域の学習教室担当者			
資料として用意したもの	個別の教育支援計画 療育相談記録			
会議の内容 進行:SREC	① 自己紹介 ② 支援会議の趣旨について説明 配布資料の確認 ③ 担任より…支援計画説明 保護者…補足・意見 ④ 各機関より…これまでの本児とのかかわりの説明 ⑤ 保護者より…悩んでいること、将来の願い(長期・短期)、情報として知りたいことなどの意見・確認 ⑥ 各機関より…意見、実際に支援できることの確認 ⑦ 目標の設定 具体的支援について協議 ⑧ 次回の開催予定について確認			
実際に話し合われたこと、今後の方向 *具体的にできること、行っていきたいこと・みんなで確認したこと ①教育 保護者と協力し、コミュニケーション手段を具体的に決め出す。他機関と共有する。 ②家庭 排泄に関わる課題 担任との連携・協力 ③医療 定期通院(継続) ④福祉 ヘルパー利用(余暇活動) 担任との連携・協力 保護者への福祉に関わる情報提供 ⑤その他 療育相談(継続) 地域の学習教室の利用(継続・担任との協力)				

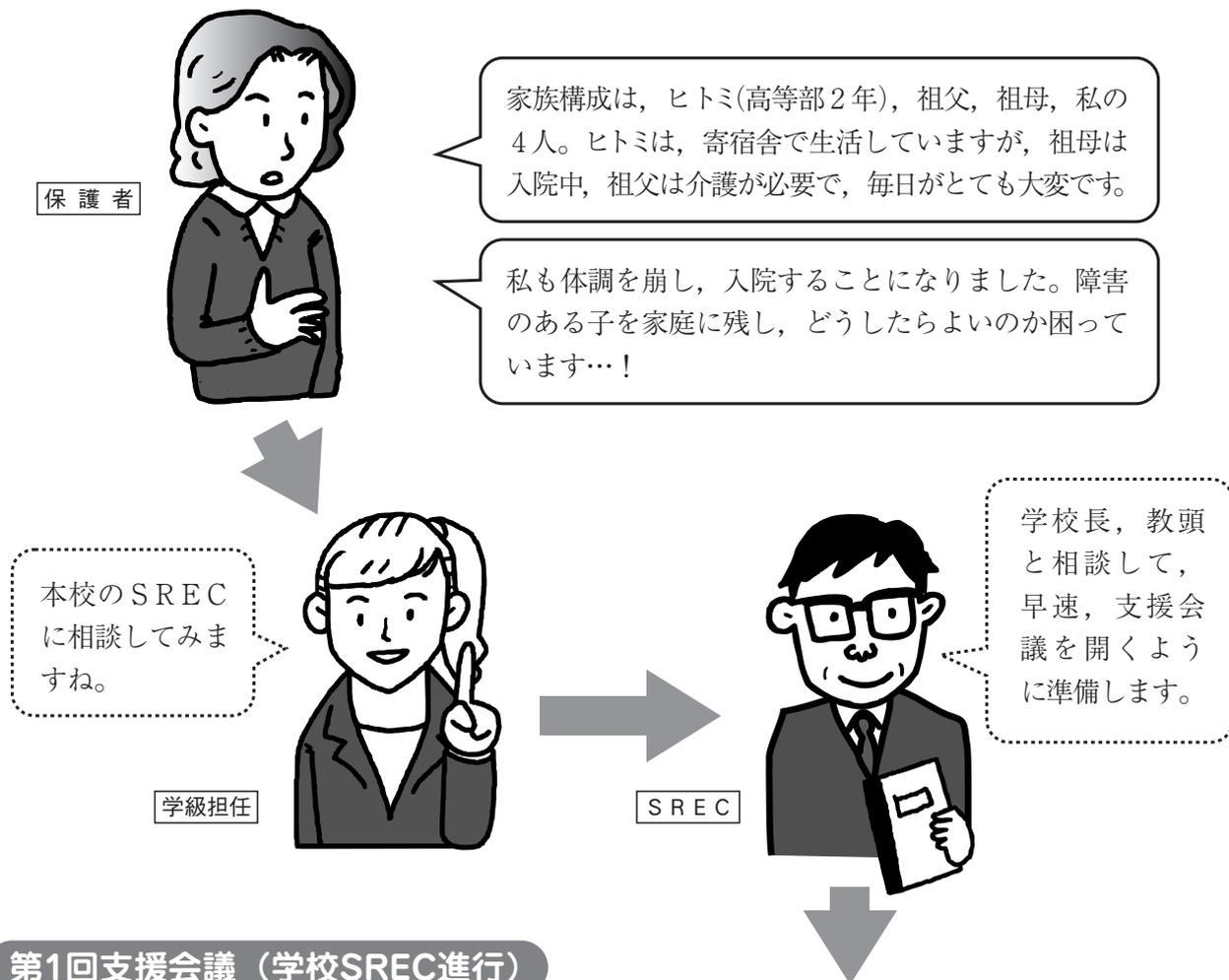


保護者

今日は、長い時間ありがとうございました。何だか今日はたくさん支えてくれる方がいるんだなあということを再認識しました。もっと小さかった頃の、どうしていいのか分からなかった苦しい頃に比べたら、今はとても気持ちになりました。
これからもどうぞよろしくお願いします。

●ネットワークの活用

支援会議を開くまで



第1回支援会議 (学校SREC進行)



本ケースは急を要したので、圏域の療育コーディネーターと連携をとって、分担しながら、即、支援会議が開けるように準備をしました。

支援会議の結果、施設の体制が整い次第入所することになり、主として学校や叔母さんがヒトミさんへのケアを、福祉課や地域の関係機関が家庭へのケアを行うように分担し、次のように実施しました。

- 児童相談所は、ヒトミさんが入所できる施設を早急に探し、手続きを進める。
- 入所するまでの間、週末は「圏域の療育支援センター」で過ごすことにする。
- 環境の変化に弱いヒトミさんに対して、平日は学校と寄宿舎で精神的な面も含めて支援していく。
- 家庭に対しては、市厚生課のケースワーカー、社会福祉協議会のケアマネージャーなどがサポートしていく。



第2回支援会議（児童相談所進行）

入所当時は、落ち着いて生活していたヒトミさんですが、入所3ヶ月後ぐらいから、施設での生活が不安定になってきました。そこで、児童相談所が施設からの依頼を受け、再度支援会議を開くことにしました。今度は、児童相談所担当者が進行を行い、体調も回復してきた母親も外出許可を得て参加し、下記のような方向で支援していくことが確認されました。



福祉課
担当者

- 月に一回をめぐりに帰省する。そのために、次のような支援を行う。
- 予め、学級担任や施設職員が、本人に帰省のことをしっかり伝えておき、見通しがもてるようにする。
 - 施設からの送迎は、市でも援助する方向で検討する。
 - ヒトミさんが楽しみにしている「療育支援センターでの集まりの会」に参加できるようにセンターでも配慮する。



支援
センター
担当者

各担当者が分担されたことを実行し、現在では施設での生活も安定してきて、落ち着いて生活しています。ヒトミさんの表情もよくなり、月に一度の帰省を楽しみにがんばっている姿が伺えます。

今後は、卒業後のことも含めて、実習などを繰り返しながら各機関との連携を更に深めていきたいと思えます。

事例から学ぶ

子どもを中心に支援のネットワークをつくってあると、基本的な情報が共有化されているので、支援会議が必要なとき、関係機関それぞれがその必要性を理解して、集まりやすくなります。日頃から、Face to Faceのお付き合いが大切です。

子どもの特性や成長とともに支援に加わる関係機関も変わってきます。少し先のステージでの子どもの様子をイメージし、その上で今を考えていくようにしましょう。また、支援会議は必要に応じて継続して行い、常に情報を共有できるようにすることが大切です。そのためにも、今後は「個別の教育支援計画」を活用していくことも必要です。まずはSRECに相談してみましょう。



ずっと応援しているよ(中学校)

～中学校卒業生への支援～

学校で子どもと過ごすことのできる日々は決して長くありません。子どもの卒業や教師の転退職などで、子どもとの別れは誰も経験することです。

学校で精一杯の支援をし、進路にもある程度の見通しをもって送り出すのですが、子どもによっては、新たな環境にすぐに適応できない場合もあります。中には、保護者や子どもから相談をもちかけられることもあります。

学校でのお付き合いが終わっても、子どもや家族の生活はまだまだ続いています。「その子をめぐりサポーター」の一人として、見守っていきたいものです。

その場合の注意する点などをまとめてみました。



中学校では自律学級に在籍していたマリさんは、卒業後、養護学校高等部に入学しました。対人関係を築くのが苦手なマリさんですが、進学後は元気よく通学していました。

マリさんのお母さんは、マリさんの兄弟の参観日のときなど、中学校での担任だったミヤモト先生のところに近況を話しに来てくれました。

ある日、マリさんのお母さんから気になることを聞きました。

今、学校に行けなくなってしまったのです。理由はよく分からないんですけど…。

家にいるだけではダメだと思って、地域の作業所や障害者生活支援センターにも通ってみたんですけど、しばらく行くと、マリがいやがって行かなくなってしまうことの繰り返しです。八方ふさがりで、どうしたらいいか…。

マリも、「これじゃいけない」と思っているのか、とてもいらだって、かんしゃくを起こすことが多くて、家の中は大変です……。



ミヤモト先生は、お母さんの話を聞いて、家庭とマリさんの悩みの深さを感じ取りました。

「行かなければならないけど、行けない」という思いが強いマリさんにとって、学校の先生や支援センターの方などの支援は、今はなかなか受け入れることができないようです。

ミヤモト先生は、今はマリさんを指導する立場でないので、以前より気軽にマリさんに接することができるのではないかと考えました。

家に閉じこもりがちなマリさんと、マリさんといつも一緒のお母さんの「息抜き」ができればいいなあ……というような気持ちで、久しぶりにマリさんに会いに行くことにしました。



お母さんの話の聞き役になりたいな。
マリさんが気分転換できるといいなあ。
一緒に外出できるといいなあ。誘ってみよう。



久しぶりにマリさんの家を訪ねたミヤモト先生は、改めてお母さんの話を聞きました。

結論や方針を出せるわけではないので、ただ聞いて気持ちを受けとめたいと思いました。

お母さんから、施設や病院などについての質問をされたので、資料を手渡しました。

ミヤモト先生は、マリさんとドライブに出かけました。いつもはあまり外出しないマリさんですが、楽しそうな表情で、いろいろなことを話してくれました。



マリさんの支援者や学校の先生の考えも知りたいなあ。病院や施設について、情報を提供したけど、そんなことしてよかったのかなあ…。

ミヤモト先生は、養護学校の担任と連絡を取って、マリさんと会ったときの様子などを伝え、更にこのような外出を今後も続けていきたいことや、保護者の気持ちなどを伝えました。

その後、マリさんとは、1月に1～2回のペースで会うようにしました。マリさんから、電話や手紙も届くようになりました。

支援センターでは関係者と、マリさんの今後を話し合う会を開こうと計画しています。

ミヤモト先生は、会に情報を提供しつつ、マリさんや保護者の話し相手の一人として、今後もずっと応援していきたいと考えています。

卒業生のためにできること ～ずっと応援しているよ～

- 指導し評価する立場を離れた一人の「その人をめぐるサポーター」として、一緒に考えていきたいと思っています。
- 在籍校や支援の担当者と連絡を取り合うようにしたいと思いますが、現在行われている支援の妨げにならないように注意したいと思っています。
- 必要に応じて、本人や保護者の気持ちを代弁して、在籍校や支援者に伝えたいと思います。
- 本人や保護者の「気分転換」の機会のお手伝いをしたいと思います。以前の経験から、本人の好きなことを掘り起こして、現在の生活に彩りを添える気持ちで接したいと思います。
- 「無理強いはいらない。自分も無理はいらない」をポイントにしていこうと思います。

事例から学ぶ

特別な教育的支援の必要な生徒にとって、中学校卒業後の選択肢は多くはありません。卒業までの限られた時間の中で次の道を決定しなければならず、とかく教師は行き先が決まった時点で安心してしまいがちです。しかし、その子と家庭は、その後の環境の変化に大きな不安を感じている場合もあります。

中でも、対人関係を築くのが苦手な生徒にとって、卒業後の環境の変化は大きな試練です。進路先でつまずき、進路変更を余儀なくされる可能性はかなり高いと言わざるを得ません。しかも、つまずいたときにこそ厚くなってほしい支援の手が、むしろ薄くなりがちなのです。

できることは限られているのかもしれませんが、「その人をめぐるサポーター」として、次の支援につながるように、応援していきたいものです。



支援情報



SREC養成研修

.....

県教育委員会では、初めてSRECに指名された方に対して、以下のようなプログラムで養成研修を5日間実施しています。これらのプログラムは、SRECに必要な資質を養うばかりでなく、教員が関係者と連携して児童生徒の支援に取り組む上でも必要な資質であると言えます。

校内研修などで取り入れることで、校内支援体制づくりを促進することも期待できます。

.....

<平成17年度のプログラム>

回	
第1回	〔コーディネーター概論と障害の理解〕 ① 長野県のSRECについて（講義） ② 長野県のSRECの実践報告（発表） ③ LD, ADHD, 高機能自閉症等とは（講義：心理的疑似体験を含む）
第2回	〔チーム支援〕 ① チーム支援概論（講義） ② 校内におけるチーム支援の活動内容（講義） ③ チームによる実態把握（演習：ロールプレイ）
第3回	〔「個別の指導計画」の作成〕 ① 「個別の指導計画」について（講義） ② 「個別の指導計画」の作成（演習：インシデント・プロセス法による検討）
第4回	〔連絡・調整力の養成と向上〕 ① 人間関係づくりについて（講義） ② 人間関係づくりの実際（演習：対人関係ゲーム・プログラム）
第5回	〔教育相談力の向上〕 ① 教育相談力の向上（講義） ② 教育相談の実際（演習：ロールプレイ）

自律教育相談



.....
県教育委員会では、障害のあるすべての子どもに対する支援の充実を図るために「自律教育相談」を実施しています。以下の機関の担当者にご相談ください。
.....

<手続き>

- ① 随時、電話で申込
- ② 相談日時、場所などを打ち合わせ
- ③ 教育的支援の開始

※ 電話相談も受け付けています。

<支援の内容>

- ① 障害のある子どものアセスメントとその理解
 - ② 「個別の指導計画」の作成
 - ③ 授業などにおける有効な支援方法、教材・教具作り
 - ④ 校内支援体制の構築、関係諸機関との連携
 - ⑤ 保護者支援
 - ⑥ 就学相談
- 等

自律学校

教育相談担当教員等

長野盲学校	026-243-7789
松本盲学校	0263-32-1815
長野ろう学校	026-241-5320
松本ろう学校	0263-58-3094
長野養護学校	026-296-8393
伊那養護学校	0265-72-2895
松本養護学校	0263-59-2234
上田養護学校	0268-35-2580
飯田養護学校	0265-33-3711
安曇養護学校	0261-62-4920
小諸養護学校	0267-22-6300
飯山養護学校	0269-67-2580
諏訪養護学校	0266-62-5600
木曾養護学校	0264-22-3553
花田養護学校	0266-28-3033
稲荷山養護学校	026-272-2068
若槻養護学校	026-295-5060
寿台養護学校	0263-86-0046

教育事務所

自律教育担当教育支援主事

佐久教育事務所 (教育相談)	0267-63-3182
飯田教育事務所 (教育相談)	0265-53-0462
松本教育事務所 (教育相談)	0263-47-7830
長野教育事務所 (教育相談)	026-232-7830

総合教育センター

自律教育担当専門主事

自律教育部	0263-53-8805
-------	--------------

自律教育課

自律教育地域化主任推進員

<東北信地区>	
自律教育課	026-235-7456
<中南信地区>	
松本盲学校	0263-36-9515 (直通)

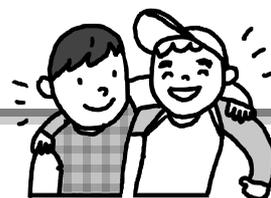
障害者総合支援センター



10圏域ごとに障害者総合支援センターが設置されています。障害のある方が地域で安心して生活できるように、関係機関と連携して地域に根ざした支援を行っています。療育コーディネーターなどが、面接・電話・訪問などにより相談支援を行います。

圏域	機関名	電話	設置場所
佐久圏域	障害者総合支援センター 「こころん」	0267-63-5177	佐久市取手183 佐久市野沢会館内
上小圏域	障害者総合支援センター	0268-27-2084	上田市中央3-5-1 上田市ふれあい福祉センター2階
諏訪圏域	障害者総合支援センター 「ばすてる」	0266-54-7363	諏訪市小和田19-3 諏訪市総合福祉センター1階
上伊那圏域	障害者総合支援センター	0265-74-5627	伊那市伊那1499-7
飯伊圏域	障害者総合支援センター	0265-24-3182	飯田市上郷黒田341 飯田市上郷保健センター内
	飯田市療育センター 「ひまわり」	0265-23-6097	飯田市松尾新井5933-2
木曽圏域	障害者総合支援センター 「ともに」	0264-52-2494	木曽郡上松町荻原1460 上松荘内
松本圏域	障害者総合支援センター 「wish」	0263-26-1313	松本市双葉4-8
	障害者総合支援センター 「あるぷ」	0263-73-4664	安曇野市豊科4156-1
	障害者総合支援センター 「あいあい」	0263-64-4040	松本市刈谷原町759-1
大北圏域	障害者総合支援センター 「スクラムネット」	0261-26-3855	大町市大町1129 大町市総合福祉センター内
長野圏域	障害者総合支援センター	026-285-1900	長野市川中島町今井1387-5 ハーモニー桃の郷内
	稲荷山医療福祉センター	026-272-1435	千曲市野高場1835-9
	障害者総合支援センター 「歩楽里」	026-257-5955	長野市豊野町蟹沢2600-1
	ながの障害者生活支援協会 「ベターデイズ」	026-259-9970	長野市平林163-5
北信圏域	障害者総合支援センター	0269-23-3525	中野市笠原765-1

自閉症・発達障害支援センター



.....

県内で暮らしている自閉症の方が、それぞれの特性を理解された上で、地域の中で必要な支援を受けることができる支援体制づくりを目指しています。医師，臨床心理士，作業療法士，言語聴覚士などが予約制で相談支援を行っています。

.....

機関名	電 話	設置場所
自閉症・発達障害支援センター	026-227-1810	長野市若里7-1-7 長野県精神保健福祉センター内

※ 中南信地区の活動拠点は県立こども病院内に設置

平成17年度 自律教育研究委員会

研究委員

◎ 委員長 ○ 副委員長

安川 健治	長野市立山王小学校	手塚 里子	須坂市立旭ヶ丘小学校
○森田美智子	上田市立塩田西小学校	樋口 時夫	佐久穂町立佐久東小学校
上條 英子	松本市立田川小学校	山下 亨	大町市立大町北小学校
堀内 澄恵	飯島町立飯島小学校	瀧澤 康弘	岡谷市立小井川小学校
◎勝山 幸則	須坂市立相森中学校	片山ますみ	長野市立櫻ヶ岡中学校
井手 輝文	松本市立女鳥羽中学校	○竹村 信之	飯田市立緑ヶ丘中学校
○市川 和明	長野県小諸養護学校	中野 奈津	長野県花田養護学校
金井なおみ	長野県諏訪養護学校		

長野県教育委員会

大和田康子	総合教育センター自律教育部	専門主事
清水 閣成	佐久教育事務所	主任教育支援主事
土屋 雅弘	飯田教育事務所	教育支援主事
伊藤 潤	松本教育事務所	教育支援主事
洞澤 佳久	長野教育事務所	教育支援主事
高橋 英一	自律教育課指導ユニット	主任教育支援主事
樋口 一宗	自律教育課指導ユニット	教育支援主事
片桐 俊男	自律教育課指導ユニット	教育支援主事
高山 和浩	自律教育課指導ユニット	教育支援主事

自律教育シリーズ第3集
自律教育校内支援体制事例集

みんなで支援みんなが笑顔 キーワードは「チーム！」

平成18年1月25日印刷
平成18年2月1日発行

長野県教育委員会

連絡先

TEL 026-235-7456

FAX 026-235-7459

E-mail jiritsu@pref.nagano.jp

HPアドレス <http://www.nagano-c.ed.jp/kenkyoi/>